
Fate/CrossOverGuardian 第一章 『サスケ外伝編』

蒼空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Crossover Guardian 第一章『サスケ外伝編』

【Nコード】

N8777M

【作者名】

蒼空

【あらすじ】

ナルトとサスケの因縁の対決に決着が付きサスケがナルトと手を取り合おうとした時、突然仮面の男マダラが現れサスケを時空間へと飛ばし抹殺した。しかしサスケは不思議な声に導かれ目を覚ます、だがそこは自分が全く知らない世界だった・・・そして一人の男と邂逅した時、運命と共に新たな物語が動き出す！！

《初の連載、クロスものです！設定の矛盾、理論の破綻等至らない点が多くあると思いますが暖かい眼で見守っていただけたら嬉しい

です、では皆さんどうぞお楽しみください》《追伸この第一章は二章、三章への土台作りなので内容が少し適当になっています、もしもの場合は二章から読んで頂いて構いません、皆さんにご迷惑をお掛けしますがどうぞよろしく願います》

くブローグく 決着そして始まり

二人の少年が向き合っていた 服はボロボロ、体の至る所には血が滲み疲労が濃い事も誰の目にも明らかだがそれでも少年達は一向に倒れようとはしなかった、ナルトは仙人モードと九尾のチャクラが底を付きサスケも佐能乎と天照でチャクラが殆ど残っておらず どちらにも使える忍術は一回程しか使えない事が二人には分かっていた、だが視線を合わせると二人は笑った どちらも出す術は決まっていたのだ、自分の信念が強ければ勝ち、弱ければ負ける だから後は互いの忍道をぶつけるだけだ
そして同時に走り出し

「螺旋丸！！」
らせんがん

「千鳥！！」
ちどり

二人の最も得意な術が交差しぶつかり合うと大気が震えた そして数舜程均衡していたが唐突に均衡が崩れた瞬間に螺旋丸がサスケの腹部に命中した

「サスケエエエエエエエエエエ」

「うおおおおおおおおおお」

サスケが螺旋状にきりもみしながら岩に激突し動きが止まったナルトが慌てて駆け寄ると最もな疑問を叫んだ

「なんでだ！ なんで千鳥を途中でやめたんだ！ 答えるサスケ！！」

サスケが眼を開けると小馬鹿にしたような口調で

「うるせえよ ウスラトンカチ 耳元で叫ぶな・・・」

「なんだと！」

「・・・自分でも分からないだよ」

「・・・」

「・・・ただ兄貴の顔がちらついてカカシとお前の言葉を思い出したら力が抜けたんだ・・・」

「・・・たしかに木の葉がうちは一族にした仕打ちは許せないし兄貴を追い込んで一族を皆殺しさせた事はもっと許せないが なぜか兄貴の眼を移植した時に兄貴の想いが俺の中に入って来たように感じたんだ 復讐しか考えてなかった俺の心に疑問が浮かんだったんだ」

「復讐なんてしても何も帰ってこないんだ、それに復讐をすればさなるる復讐を生んで憎しみの連鎖がはじまるんだってばよ」

「そうだな・・・兄貴の願いは俺にただ平和に生きて欲しかったはずなのに兄貴の意思を無視して復讐に走っちまった俺は今や犯罪者だしな・・・いずれにせよ俺はもうダメだな・・・」

「なに言ってるんだ！！まだやり直せるってばよ 俺達は仲間だろ、いずれ火影になる俺を頼れよ！」

ナルトが手を差し出しながら笑うと少し救われた気がした、こんな俺でもまだ仲間がいたんだなと素直に喜ぶべきだな そして長年悩

んでいた答えが出て気持ちは穏やかだった

「ふん・・・ウストラトンカチが・・・そうだな、お前とならやり直せるかもしれないな・・・」

そしてナルトの手を掴もうとした瞬間　ナルトの背後から異様な殺気を纏ったマダラが現れた

「やはり千手の意思は厄介だな、まさかサスケの復讐の炎を消すとは　やはり殺しておくか・・・」

マダラがナルトをクナイで貫こうとする瞬間に素早く起き上がったサスケが割り込んでクナイを掴んだ

「どうした　なぜ庇う　木の葉に復讐するんじゃないのか・・・」

「知ったことか！　単にお前が気に入らないだけだ」

「ふむ・・・やはり愛を知ったうちはは欠陥品だな　多少おしいが処分するか・・・」

マダラが呟くとサスケの空間が歪み何処かに移動させられそうになるとすかさず　わずかに残ったチャクラを使い千鳥鋭槍でマダラを貫いた

「ぐ・・・小癩なマネをだがもう時空間移動はもう止まらないぞお前は一生涯時空間の中で朽ち果てるがいい」

「サスケエエエエエ」

そしてチャクラが尽き意識を失うと全身を暗闇が包んだ・・・

命の恩人との出会い

真つ暗な暗闇の中でサスケはボンヤリと覚醒した 自分が奇妙な空間に居る事は分かるが思考が追いつかずまた意識を失おうとした刹那 頭の中で声が響いた

- 契約せし者よ -

- 汝は英雄となりし魂也 故に『英霊の座』を与えよう -

- いずれ目覚めし時が来た後 汝の問おう -

- そして我と世界に契約を果たさん -

声が途切れた途端に意識が掻き消えた

そして唐突に意識を取り戻し最初に感じた感覚は激しい痛みだった 痛覚があると言う事は自分はまだ生きていると言うことだろう ぼんやり考え 痛みを堪えながら眼を開けると見知らぬ天井が眼に入った 次に顔をずらすと自分がベットに寝かされている事に気が付

き 体を起こそうすると全身から痛みが走り完全に眼が覚めた痛みで動けないが頭は冴えているので何故自分がベットに寝かされていると考えようとした時

「あ・・あの・・だ・・だいじょーぶですか？」

「っ・・・・・・・・」

突然後ろから声を掛けられた為心臓が止まりそうになるほどビツクリしたが冷静になりながら後ろを振り返るとそこいたのは若い女性だった 髪は腰まで届く金髪で髪を黒いリボンで束ねおり 紅い瞳をしているので一瞬同族かと思ったがありえないと悟った 顔立ちはカワイイ部類に入ると思うが自分は復讐の為に生きてきたので女性にはあまり興味がなかったが そんな自分でもこの人は綺麗だと思う

「気が付いたんですね すぐにお水とお薬を持ってきましたね」

女性は走り出しながら奥の部屋に移動したと思ったたらずぐに戻って来て

「あー！そーだ まだお名前を聞いてませんでした 私はフェイ・ルミナスと言いますあなたは？」

「うちは・・サスケだ」

「じゃあ・・サっちゃんだね 私の事はフェルミと呼んで」

「・・勘弁してくれ・・」

サスケは初めて気が抜けた顔をした

異世界の真実

薬を飲み落ち着いた所でフェルミが質問してきた

「ねえ どうやって此処に来たの 森の向こうから来たの？」

さてどう答えるべきか 正直に自分の正体を言っても警戒されるのがオチだが かと言って名前を言ってしまった以上身元がばれるのは時間の問題だ 自分は五影会談を襲撃した犯罪者なのでここは自分のことはうまくはぐらかして相手の情報を聞き出すのが一番確実だと判断し

「森？ ここは一体何処なんだ」

「ここはシルフィスの森と言って私達魔術師しか住んでいない所だよ でも不思議だなあ森には人避けの結界魔術が張り巡らせているから普通の人間は絶対に入ってこれないんだよ？」

「・・・はい？」

一瞬頭が凍り付いた 魔術師？ 魔術？ シルフィスで何処だよ？
いままで聞いた事の無い単語を聞き啞然としていると

「彼はもうよいのかい？」

突然また別方向から声がしたので振り返るとそこには白髪の長身の男が立っていた

「あつ 師匠！！」

「こら これでもお前の父親なんだからお父さん呼びなさい」

「えーっ だって師匠が私のお母さんと結婚したからって今更お父さんとは呼べないよーっ」

「ふう・・・まあいい それよりも彼と少し二人きりで話をしてもいいかな」

「何で？」

「すまない男同士の秘密の話なんだ」

「ふーん まあいいよ私も魔術の修行の時間だし また後で来るね」

「ああ 頑張れよ」

ルミが部屋から出ると未だ混乱中のサスケに向かって

「まずは初めまして 私は伊織 海斗と申します」

「そして まずあなたに謝らなくてはなりません」

「どうゆうことだ？」

「あなたを此処に呼んだのは私だからです・・・」

そして運命の齒車が今ゆっくりと動き出した

二千年前からの召喚

サスケは伊織を睨みながら話を聞く事にした

「そして信じられないかもしれませんが あなたは一度死んでしまつたのです」

「なんだと 俺を馬鹿にしているのか！ ふざけるのもいい加減にしろ」

俺が死んだ？ 馬鹿馬鹿しい現にこうして生きているではないか
こんな妄想に付き合う必要は無い 体力を回復させたらすぐに此処を絶とうと思案し寝ようとすると

「いいえ事実なのです あなたが何故ここに来たのか・そしてあなたが消えてからの後の事を知りたくありませんか それにあなたの怪我の治療をした恩をあなたは無下にするのですか？」

「たしかに怪我の治療には感謝してるが妄想に付き合うほど俺は人が出来ていない あまりしつこいようだと多少心苦しいがおまえを殺すぞ」

殺気をこねた視線を向けると伊織は意に介した様子も無く

「結構です あなたには知る権利と義務があるのですから」

「いいだろう 怪我が治るまでの暇つぶしに聞いてやる」

殺気を向けても微動だにしない所を見ると真剣なんだろう それに

情報を探るにしても話を聞く分には問題ないだろうし聞き慣れない魔術師や魔術にも多少興味があるので話を聞くことにした

「では・・・まず此処はあなたの住んでいた時代ではないのです」

いきなり斜め上からの問いに崩れそうになるが 男は真剣な眼差しをしているので続きを聞く事にした

「此処はあなたの居た時代から約二千年後の未来なのです」

「さて 寝るとしよう・・・」

サスケがベットに横になろうとすると

「あなたがそう思うのも無理がありませんが本当なのです」

「言ったはずだ妄想に付き合う程お人好しじゃないんだ それとも死にたいのか・・・」

「では証拠を見せましょう」

伊織は懐から見覚えがある物を取りだした

「これは俺の額当てじゃないか ナルトが持っていた物が何故お前に？」

かつて木の葉を抜ける時にナルトと一騎打ちをした時にナルトに傷つけられた一文字の傷があるので間違いない たしかにこの額当てはナルトが俺の手掛かりの為にいつも持っていたので簡単に手放すとも思えないが

「これはかつて二千年前の狂乱の世界を平和に導いたある一人の男の遺産なのです」

「どうゆう事だ」

「二千年前の伝承では・・・その時代には世界を手に入れようとしたある組織がいましたその組織の名は暁アカツキその組織のリーダーによって一時世界は掌握されかけました」

アカツキ
暁かつて俺も所属しておりマダラが創設した組織 たしかにあいつの目的は全ての統一だと聞いた

「しかしある若者がその組織に戦いを挑みました 仲間や周辺各国の力を借り組織は壊滅寸前まで追い込み残すはリーダーと数名を残す所までできましたが若者の前にかつての友が立ちはだかりました復讐を生きる糧とした彼に若者は必死に説得をしましたが彼は耳を傾けてはくれませんでした やがて組織にはリーダーと親友だけが生き残りリーダーは最後の手段として世界を支配する術を完成させました」

自分の知る歴史とは微妙に違うものだがまあそんな所だ 伝承と言うのだからそれなりの歴史があるのだろう それに第四次忍界大戦の事は未然に防がれたとはいえ世間一般には極秘事項としてかん口令が敷かれたはずなのでこの事を知っているのは極僅かのはずだ そう考えるとこの男の話にも信憑性が出て来た

「そして最後の戦いで若者は親友を倒し共に手を取り合おうとした時にリーダーであるマダラによって親友は次元の彼方へ飛ばされてしまいました マダラは若者に『おまえの親友は二度と出られぬ異

空間に飛ばした恐らくもう時空の歪みで体は消滅しているだろう
よしんば助かつて二度と出られない上時間の流れが違うからもう
百年か二百年が経って寿命が尽きて死んでいるだろう』しかし若者
は『俺はあきらめないってばよ 例え望みがなくても最後まで生き
ていると信じて助けに行く まっすぐ自分の言葉は曲げねえ それ
が俺の忍道だ!』そう言う若者はマダラと最後の決着を付け そ
して若者はマダラを倒し世界を危機から救いましたが親友を助ける
事が出来ませんでした しかし若者はいつか逢える事を信じて争い
や憎しみを生まない世の中を作る為に自分がみんなを導くリーダー
になりそして世界を平和に導きました そして長く平和が続きまし
たがやがてリーダーナルトが病に伏し死ぬ直前に家族や弟子達にい
いました『俺の忍道を唯一曲げたあの親友で兄妹でもあり好敵手だ
ったあいつともう一度逢いたい俺はもう逝く だから俺の意思を
継いだ者がいたらあいつを助けてやってくれ 頼んだぜ息子とバカ
弟子共・・・じゃあな・・・いつかまた逢おうぜ・・・サスケ・・・
』こうして世界を平和に導いた火影 ナルトは息を引き取りました」

話を聞いて自然と体が震えた 信じない訳ではないが作り話とも思
えない

「この額当てはナルトさんが亡くなる少し前に弟子の一人に渡され
いままで我が家の蔵に保管されていましたが私は子供の頃からこの
話を聞き育ったので興味が沸き手入れをしていました ナルトさん
の息子や弟子達は必死にあなたを助ける方法を探しましたが良い成
果を挙げられず 世代が代わる度にやがて忘れられていきましたが
この伝承だけは各地に残り神話として今も語り継がれています」

「じゃあ 俺が此処に居ると言う事はおまえは遺言を守ったんだな」

「はい 私はナルトさんの弟子の子孫で幼少の頃からこの伝承を聞

きいつかあなたと逢いたいと思い勉強と実験を重ねやっとなんかを呼び出す召喚魔術を完成させたのです」

「召喚魔術？」

「はい 召喚魔術とはその者に縁のある物を召喚の触媒とし世界と契約する事でその者をあらゆる次元から呼び出しこの世界に留める事が出来るのです」

「口寄せよりすごいな でもなぜ誰もこの術を使わなかったんだ」

「いえ 理論だけは昔からあったのですが実行できるだけの技量と技術が無い事と危険なので誰もやらなかったのが殆どですね」

「危険？」

「へたをすればこの世の者とも思えない怪物が召喚されたり 暴走して爆発でもしたら周囲にクレーターが出来るほどの大爆発の危険があるんです 以前同じように召喚魔術を試した人は爆発に巻き込まれて星になりましたし・・・」

「よくそんな危険な事が出来たな」

「まあ 私も半分賭けみたいなものでしたので おまけに多少失敗してしまいましたし・・・」

「な・・・何iiiiiiii」

「あ・・・安心して下さいあなたは確かに生きています ただそれはあなたの体ではありませんが・・・」

「？」

伊織がポケットから鏡を取り出すと自分に向けた。そういえば眼が覚めてから鏡を視ていないなあと思ひ覗き込むとそこには自分の顔では無い別の誰かの顔が映っていた。

魔術と忍術

鏡をみるとそこには20代前半の男が写っていた。髪は伊織と同じ白髪で目つきは鷹のように鋭いがなにより眼に付いたのが写輪眼が発動している事だった。不思議に思い発動をやめようとしても戻らないのだ。こんな事は初めての経験だ。それにこの顔は誰だ？髪や顔立ちは伊織と多少似ているので血縁者か？

「一体どうゆうことだ！！ 説明しろ！！」

「分かりました。ご説明します。その体は私の弟の伊織・恭介きょうすけの体なのです」

伊織がゆっくりと話し始めた

「先程も申したがあなたは一度死んでしまったのです」

「ふざけるな！！じゃあ俺はなんなんだ」

「落ち着いてよく聞いてください。簡単に言うとあなたは肉体が滅び魂が無事で弟は肉体が無事で魂が無い為にこうなったのです」

「余計に分からなくなったぞ。つまりどういう事だ！」

「分かりやすく説明すると。あなたを召喚した際の時空のひずみの影響で肉体が消滅しかけ魂がかるうじて無事でした。しかしこのままでは魂も消えてしまう為3日前に死んでしまった弟の体を抛り代にし一人の人間として転生させたのです」

「そうか しかし魂なんてあるわけ・・・いや大蛇丸の不屍転生の術は魂を媒介にしていた とゆう事は確かに魂の存在はあるのだろう」

「はい 恐らく時空間の影響でああなたの体は朽ち果てる直前だったのでしょう それにしてもあなたは運がよかったですね ちょうど弟の体が近くにあったので転生できたのですから・・・」

しかし違和感があつた こんな偶然が何度も続くのだろうか たまたま肉体が滅びかけ なぜ弟の死体が呼ばれた所にあつたのだ？ 明らかに怪し過ぎる そう思い睨みつけると伊織が

「やはり納得できませんか さすがですね」

「いきなり呼び出されて はいそうですかと納得できるか それに死んで3日後に召喚魔術とやらをするなどおかしいだろう」

「分かりました あなたには真実を知る権利があります 全てをお話します」

そして伊織の雰囲気が変わり 怒りを込めた眼で

「実は弟は殺されたのですそれも私達と同じ魔術師によって」

「まて さっきから魔術師や魔術など聞きなれない言葉が出てくるが何なんだ？」

「ああ 申し訳ない その事を説明するのをすっかり忘れていました 簡単に説明すると魔術師はあなた達で言う所の忍しのびで 魔術とは忍術を発展させた物の名称で扱いやすさを向上させ誰でも出来るよ

うな汎用性が最大の特徴で他にも印を結ばず詠唱のみでの発動や効果や威力を上昇させる事に成功した忍術なのです 今では魔術専用の様々な道具があります」

「すごいな そんな術を使う者がたくさんいるのか」

「いいえ 魔術を使える者は世界で多少いるだけで 真に強力な魔術が使える者はさらに限られます」

「何故だ 扱いやすくなったのなら誰でも使えるのではないのか？」

「いえ 魔術は秘匿される存在なのです ですからあなたが居た時代に比べたら圧倒的に少ないのです」

確かに忍術が誰にでも出来たら忍の存在理由など無いに等しいだろう それに戦いになれば魔術の被害が広がるだけだろう

「そして時の権力者達はその力を恐れ限られた者の魔術を伝授し忍術を封印した為 今では魔術が主流となり忍術は忘れさられ 今世界で忍術が出来るのはサスケさんだけなのです」

「そうか・・・二千年の間に世界はこんなにも変わってしまったのか・・・助かった 礼を言う」

「そんな サスケさんは知っておかないといけません これからの為にも」

「そうだな・・・ところでさっきから写輪眼が発動したまま戻らないのは何故だ このままだと直にチャクラが尽きる」

「それが伝説に名高い写輪眼ですか　すごいです感動しました」

伊織は眼を輝かせながら答えた

「原因は恐らく弟の体を抛り代しても写輪眼がうまく適合できなかったので転生させ新たに生まれ変わった事による反動でしょうON/OFFの切り替えが出来ないようです」

「なんとかならないのか？それに洞察眼で動きを読み続けるからいずれ気が狂いそうだ」

「そうだ！　いい物があります　少し待っていてください」

そう言つて伊織が部屋から出た　しばらくすると手に眼鏡を持つてやってきた

「これは『魔眼殺しの眼鏡』という特殊な眼の能力をかき消すもので　更にレンズの特殊加工によつて外側から見ると普通の眼に見える機能を持った特別品です」

「すまないな　さつそく掛けてみるよ」

さすがは二千年後の技術　眼鏡を掛けてみるとチャクラの消費が止まり鏡を見ると確かに文様が消え普通の眼になっている

「まさか写輪眼の能力を抑えるとは・・・凄いな眼鏡だな　これなら日常生活に関しても何の問題もないな」

「いえ　お役に立てて嬉しいです　これなら戦いに行かれるのですから心配だったのですがこれなら大丈夫ですね」

ん？戦いに行く　聞き間違いか？

「あー　すまないが何の事だ？」

「いえ　怪我が治ってしばらくしたら弟を殺した魔術師を倒して欲しいのですよ」

「そうゆう事は自分でやった方がいいぞ・・・」

「悲しい事に僕の実力では勝つことはできません　それに僕が行ってもむざむざ殺されに行くようなものなのです　だからこそサスケさんを召喚したんですよ」

「ちょっとまって　お前は子供の頃に憧れたから俺を召喚したんじゃないのか！」

「それもありますが　今の魔術師は等価交換が原則なんですよ　それに恩を仇で返すのですか」

「く・・・知るか！それに俺は復讐者だ　そんな恩を返す必要は無い！！」

そう言っつてベットから立ち上がろうとすると

「そうですか　仕方ありません　使いたくありませんでしたが最後の手段です」

そして伊織が腕を捲ると　手の甲に奇妙な痣があった　そして伊織が何かを呟くと痣が光だし

「礼呪によって命じる　復讐者よ我に従え」

すると突然体から紫電が走り全身に痛みが走る

「ぐあ．．．お　お前一体なにをした．．．」

「いえ　あなたが転生する際にある細工をしたんです　それは私の命令を3回だけ令呪を用いる事で本人の意思とは関係なく私の言葉を実行できる絶対命令権をあなたに付加しました」

「な．．．なんだと．．．どう．．．ゆう．．．つもり．．．．．だ」

痛みと疲労から意識を失う寸前

「すみません　ですが私は必ず勝たなければならぬのです　妻と娘のためにも．．．」

そしていつかの再現のように意識が暗闇に落ちていった

英霊そして聖杯戦争

あれからどれ程たったのだろうかボンヤリと意識が戻ると 小鳥のせせらぎが聞こえた 続いて目を覚ますとそれと共に眩しい光が眼に入った どうやら朝のようだ 全身がまだ痛むがかるうじて我慢出来るレベルだ それに何故か前起きた時のような激しい痛みは無くなっていた フェルミの薬のお陰か？どちらにせよこれならあと2日程で動けるようになるだろう しかし伊織の令呪のお陰でえらい目にあつたな これでは動けたとしても逃げられないだろう まあこの時代でやる事もないしのんびりとするか そう考えると

コンコン

扉をノックのする音が聞こえた

「サスケさーん 朝食を持ってきましたー」

声からして恐らくフェルミだろう

「ああ 入っていいぞ」

「失礼しまーす」

扉が開かれるとお盆を持ったフェルミがやって来た

「おはようございます 起こしちゃいましたか？」

「いや少し前に目が覚めたし お腹も空いてきた所だったんだ」

「そうでしたか よかったです じゃあテーブルに置いておきますね」

「ああ ありがとう 助かったよ」

「お皿はそのままに置いておいてくれれば後で私が取りにきますから なにかあったら下の階に居ますから呼んでください それじゃあ！」

「分かった ではいただきますよ」

フェルミが部屋から出ると料理を手に取った 一般的な朝のメニューは二千年経っても変わらないようだそれに此処に呼ばれてから食事を一度も食べていないので空腹感もあった 食べてみると中々の味だった 空腹が最高の調味料とはよく言った物だ 食べ終えてしばらくするとフェルミがやってきた

「うちのお母さんの料理は おいしかったですか？」

「ああ おいしかったよ 暖かい家庭料理なんて子供の頃以来だよ」

「そうなんですか？ あっそうだ師匠が後で話がしたいから待っていて欲しいそうです」

「そうか・・・」

「では 失礼しますね」

フェルミが部屋を出た30分後 伊織がやってきた

「気分はどうですか 先日は失礼しました あれしかあなたを止める方法がなかったので」

「まったくだ！ 殴りたいが恩があるのも確かだ まあ俺もこの時代じゃやる事もないし話だけでも聞こう」

「おお！ ありがとうございます さすが伝説の英雄です その心使いに感謝します それに安心してください令呪を使い切ればあなたな自由になれるのですから」

「そうか だが英雄なんて言うのはよせ おれは歴史に類を見ない犯罪者だ 英雄なんておこがましい」

「たしかにそうでしょうが しかし伝承や神話ではあなたの存在はナルトさんに匹敵する好敵手と唄われています それに犯罪者だろうと転生したのですからまた一から始めればいいんですよ」

「そう簡単に割り切れる物じゃないんだが そうだな・・・罪は消えないがその罪を背負う事でこの世界に尽くす事にしよう それが俺を変えてくれたナルトへのせめてもの罪滅ぼしだ・・・」

「そうですよ ナルトさんの為にもあなたは生きて恩返ししなければ」

「ふっ・・・これで目的が出来たな ところで俺に話しとは？」

「はい じつはあなたに二カ月後に冬木と呼ばれる場所で開催されるある戦いに参加して欲しいのです その戦いの名は聖杯戦争・・・」

「

「聖杯戦争？」

「はい「万能の釜」また「願望機」とも呼ばれる手にする者の望みを実現させる力を持った存在　これを手に入れるための争いを聖杯戦争と言います」

「しかしなぜそんな戦いが必要なのだ？それにそんな物を手に入れてどうするんだ？」

「二百年程前に第一回の聖杯が完成したのですが　完成した聖杯の権利を独占するために殺し合いが始まってしまい失敗　そして五十年後の二回目の儀式から円滑に殺し合いが進むように現在の「聖杯戦争」を模した形となったのです」

「殺し合いか　穏やかじゃないな」

「いえ　実際に殺し合うのは魔術師ではなくサーヴァントと呼ばれる使い魔のような者達なのです　私達はサポートがメインです」

「サーヴァント？何なんだ一体　口寄せ動物のような物か？」

「口寄せ動物？何ですかそれは　まあ例を挙げるとサスケさんと同じ様な者です」

「どういう事だ？俺と同じ人間なのか？」

「微妙に違います　サーヴァントとは英霊なのです　英霊とは生前に偉業を成し遂げた者の事を言いそして聖杯戦争が始まる時期が来るとその魂を聖杯が取り込みそして聖杯が選別したマスター候補者が、召喚されたサーヴァントと契約することで聖杯戦争が始まるの

です」

「じゃあ俺と同じ様な奴が聖杯を巡って殺し合うのか」

「はい　そして聖杯戦争には7つのクラスがあり7騎のサーヴァントが居ます　セイバー（剣の騎士）・アーチャー（弓の騎士）・ランサー（槍の騎士）・ライダー（騎乗兵）・キャスター（魔術師）・バーサーカー（狂戦士）・アサシン（暗殺者）のクラスがあり　そのクラスに該当する属性を持った英霊を召喚、クラスの役割に一騎ずつ憑依させることで人としてのカタチと人格を再現する仕組みになっているのです」

「では俺は何のクラスなんだ？」

「あなたは恐らく　イレギュラークラスの「アヴェンジャー（復讐者）」なのでしょう」

「イレギュラー？なぜイレギュラーなんだ」

「あなた自身で言ったじゃありませんか　自分は復讐者だと　極稀ごくまれに7つのクラスに属さないエキストラクラスが召喚される事があるそうです、現在確認されているサーヴァントはバーサーカー・アサシンそしてアヴェンジャーであるサスケさんですが恐らく残りのセイバー・アーチャー・ライダー・ランサーは召喚されるでしょう　この四騎は必ず聖杯戦争に呼ばれます　そしてキャスターの存在が今回は廃止されアヴェンジャーが代わりに召喚されたでしょう」

「サーヴァントと言うのはそんなに強いのか？」

「はい　魔術師がまともに戦って敵うような相手ではなく　なによ

り凄いののは彼らの半身ともいえる「宝具」が強力なのです」

「宝具？どんな物なんだ」

「宝具とは幻想を骨子にして作り上げられた武装のことで 英霊は、生前彼らが持っていた武器や固有の能力・魔術・特徴や、あるいは彼らを英霊たらしめる伝説や象徴が具現化したモノとして、基本的に一つ、多い者で三つほどの宝具を持ち 魔力を注ぎ宝具の真名を口にすることで宝具に秘められた真の力を発現させる「真名開放」による攻撃はいかなる存在も倒すことも可能とされています しかし真名開放は諸刃の剣で魔力つまりチャクラを大量に消費し真名を晒す事で相手に自分の正体がばれてしまうので予防策や弱点が立てられてしまうので後の戦いが不利になるのです ですからサスケさんの事をこれからアヴェンジャーと呼びます よろしいですね」

「あ・・ああ 了解した」

話を聞いただけでも凄まじさが分かる

「しかし何でサーヴァントは召喚された魔術師に従っているんだ 魔術師より遥かに強力な存在なのだろう」

「あなたと同じで「現界のための絶対条件」として令呪による絶対命令権が課せられているのです さらに彼らは、現世に留まるために現代の依り代を必要とし、そのための魔力も自らではほとんど生成することが出来ないため魔術師との協力関係を余儀なくされます」

「では俺も魔力を生成出来ないのか」

「いいえ あなたは特別なのです 弟の抛り代を經由して転生した為受肉した肉体があるので自分の魔力を作る事が出来るのです 更に私の魔力も送る事が出来るので魔力切れの心配はありません」

「ところで気になっていたんだが何故おまえの弟は死んだんだ？確か魔術師に殺されたと言ったな それに聖杯戦争なんかに参加する理由は何だ？」

「本当の理由は今は言えません しかし建前は弟を殺した魔術師が聖杯戦争に出るという情報を聞いたので私は参加したと言う事にしてください」

「にわかに納得は出来ないが まあいいだろう そういえば弟の死因は何なんだ 魂が無いなんておかしいだろう」

「弟はサーヴァントと魔術師の魔力補給のエサとして魂を奪われたのです」

「魂で魔力を補給出来るのか」

「サーヴァントは元々英霊つまり霊体なので魔力を取り込むのに人の魂を喰らう方が早く回復出来るのです同じようにサーヴァントが回復すればマスターである魔術師の魔力も微量ながら回復するので 弟は魔術師だったので普通の人より魔力が多かった為に狙われたのです」

「その魔術師の名前は分かるのか」

「はい 名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン バーサーカーのマスターです」

修行と一般常識

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは遠坂・マキリに並ぶ始まりの御三家と呼ばれ アインツベルンは聖杯の器を遠坂は聖杯に魔力を供給する土地をマキリは令呪を編み出し聖杯戦争への優先的に挑戦権を持っているのです」

「では聖杯戦争にはその3人のマスターがでるのか」

「はい ですから聖杯戦争が始まる二カ月後まであなたには魔術の修行とこの時代の一般常識を勉強して欲しいのです」

「たしかに俺はこの時代の事には疎いから助かるが魔術の修行なんて俺に出来るのか？ 恐らく魔術と忍術は根源は同じ存在だが本質は別だと予想している どうなんだ？」

「いい質問です たしかに現代の魔術は魔術回路と呼ばれる魔力を精製するための疑似神経を体内に持つており これを用いる事で真に強力な魔術が発動できるのです 回路が無い場合でも威力が数段落ちますが発動出来ます これが一般であり魔術回路を持つ者だけが真の魔術師と呼ばれます」

「なおさら俺には魔術なんて出来ないじゃないか 仮に覚えてもそんな威力じゃサーヴァントには対抗出来ないだろう」

「覚えたての魔術の威力などサーヴァント相手には風が吹いた程度にしか感じないだろうと予想している」

「安心してください あなたはもう魔術が使用できます あとはそ

の感覚に慣れるだけです」

「なんだと！何故俺に使えると判る？」

「あなたの体は弟の体を媒体にしたので魔術回路も受け継いでいますので問題なく発動出来ます 怪我が治りしだい使い方を教えます あなたとサーヴァントの契約をしたので魔力のラインが繋がりますので魔力を回復に廻しているので明後日にはもう動けるはずです」

「そうか昨日に比べて怪我が治りが早かったのはそういう理由か ところでお前の弟は何の魔術が出来るんだ？」

「それは怪我が治って魔術の修行が始まる時に教えます 今教えても正しく理解出来ませんでしょう 扱うにはそれなりに知識が要りますので」

「わかった 今は怪我が回復に専念しよう」

多少肩透かしを食らったが怪我が治るまでの楽しみにしておこう そう油断していると

「ではまずこの時代の一般常識と魔術の基本理念を勉強しましょう」

と 伊織が言ってきた、回復の為に寝て体力を戻したいのだが・

「いきなりか まだ体の節々が痛むし今日はゆっくりとしたいのだから・・・」

「なにを仰います 時間が限られているのですよ 無駄な時間は掛

「けられません!!」

「怪我を治すのは無駄な事なのか・・・」

「屁理屈を言う暇があるなら勉強しますよ!!」

「わ・・・わかったよ これでも忍者アカデミーで主席を取った事もあるそれくらいなんて事ない」

「大した自信ですね では遠慮なく教えますよ 覚悟しなさい」

伊織が笑いながらはりきっている

（言っんじゃないかった・・・）

修行開始

三日後、怪我也治り本調子の8割程まで回復した。そして修行の為に久しぶりに外に出た、寝たきりの生活だったから体が鈍っていないか心配だが、それは杞憂だった。むしろ以前より力があるくらいだそれにこれから魔術の修行が始まるうとしている。と意気揚々としているといつの間にかその隣りにフェルミが居た。

「何故フェルミもいる。修行じゃないのか」

「ひつどーい！ 私はこれでも魔術師よ。（まだ見習いだけど・・・）」

「本当か・・・とてもそうは見えないが・・・」

「う・・・うるさーい。あなただって魔術の事は素人同然じゃない！！」

「む・・・確かにそうだな。すまない悪かったな」

「判ればよろしい」

フェルミが胸を張っていると伊織が歩いてきた。

「こら。年頃の娘がはしたないぞ。罰として擬似戦闘訓練を3セットだ」

「えー！横暴だ！人でなし！悪魔！鬼畜！○能！○リコン！」

「・・・・・・15セットに追加だ」

「すいませんしたああああ」

フェルミが必死に土下座している　サスケは不思議と懐かしい感覚に囚われながら元第七班の事を思い出していた　あの頃はナルトが馬鹿をやってサクラが突っ込んで俺はウストラトンカチと馬鹿にしてカカシはそれを見て笑っていた　もうあの光景を見ることは出来ないが自分に残された大切な思い出　復讐だけしか考えていなかった自分が唯一笑う事が出来た懐かしい思い出　そして憎しみを消してくれたナルトに恩を返す為に聖杯にやり直しを願い叶えて貰うのもいいかもしれないな　そう物思いに耽っている

「それでは修行を開始する　アヴェンジャーは私と魔術の訓練をフエイは基礎魔術の反復練習だ」

「また基礎なのー　もっと凄い魔術教えてよ」

「おまえは魔術回路のイメージが脆いそれでは魔力が暴走して悪ければ自爆するぞ　それを良くするには基礎の反復が大事なんだ　なにお前ならいずれ私より強くなれる才能がある」

「うーん　イマイチ実感が無いけど其処まで言うならがんばるよー」

「ああ　しばらくしたら様子を見に行く」

「はい　師匠」

フェルミが見えなくなると魔術の訓練が始まった

「では先日教えた魔術回路を起動させ術を発動しましょうか 使い方は昨日教えた通り魔力を頭に流し込むイメージを その後手足に集中するように魔力を固定してください」

「おい まだ何の術か聞いていないぞ どんな効果が判らずに発動できるか！」

「まあ 効果はやってみてのお楽しみで 大丈夫ですよいきなり暴走して爆発したりしませんから 弟の魔術はそのような類の術じゃないので」

「そういう問題じゃ・・・はぁ・・・仕方ないな」

基本はチャクラを使う忍術と大差ない問題はイメージだ 魔術は忍術と違い精密なイメージが重要だと聞いた 要は忍術がライフルだとしたら魔術は大砲のような物だ どちらもイメージを要求するが忍術は精密さを重視し魔術は威力を重視している 忍術の精神エネルギーと身体エネルギーを練り合わせ細く絞りチャクラを生成し印を結び発動する感覚だが魔術は精神エネルギーのみを強めイメージで固定化し詠唱で自己暗示を掛け打ち出す感覚だこれが魔術が覚えやすく威力が高い理由だ 多彩さは無いが威力のみなら忍術と大差ない 故に幻想を現実にか魔術の根源なのだろう

「不安が残るがイメージしてみるか」

目を閉じ魔力を頭に流し回路を起動させイメージで魔力を手足に集中してみた そして目を開けて手足を見ると別段変わった様子も無い 困惑していると伊織が

「どうやら成功したようですね　さすがは天才と唄われる事はありませんね　まさか一回やっただけで成功するとは　普通なら何百回もトレーニングしないと発動すら困難ですのに　いささか嫉妬を覚えます」

「そうなのか？別段変わった様には見えないが・・・」

「では　試しにあそこの岩を殴ってみてください」

そこには二メートルはある岩が佇んでいた　訳が判らず少し強めに殴ると岩は音を立てて崩れた

「それこそ弟が最も得意とした”強化の魔術”です　手を強化させれば常人の何倍の力が発揮でき、足を強化すれば自分の脚力を上昇させ超スピードを発揮できます、もっとイメージを高めれば部分的な場所を鉄以上の強度に強化できます、つまり強化の魔術とは身体能力を極限まで高めた魔術なのです」

「身体強化を魔術と呼ぶのか？」

「まあ確かに現代の魔術の殆どが打ち出す・放出が主流です　ですから弟は魔術師の中でも稀だったのですそのせいか弟は家族から出来損ない呼ばわりされていましたので家族と折り合いが悪く弟は家を出ました、そして私だけが唯一の理解者だったのでよく逢ったりしていました・・・」

「そうか殺されたんだっとな」

「はい　ですが弟の為に聖杯戦争に勝たなくてはなりません」

何故それが弟の為なのか疑問があるが今は聞かないでおこう

「では今日は強化に慣れる為に戦闘訓練をしましょう　しばらくこの修行を続けたらあなたに渡したい物があるので頑張ってください」

「わかった　近くで実戦を想定した訓練をしているからお前はフェルミの事を見てやれお前はあいつの師匠だろ」

「そうですか　ではしばらくフェイの所にいますから何かあったら呼んでください」

「ああ　判った」

伊織が背を向け立ち去るとサスケが試したい事がある為森に入った
対する伊織はフェルミの所に向かいながら悲しい目を空に向けながらフェルミの所に向かった

特殊武装

- 十日後 -

強化の魔術にもだいぶん慣れ ある程度の応用も出来た頃 伊織が以前言っていた渡したい物とやらを持ってきた

「では あなた用に改良した武装一式を渡します これで少しは戦闘を有利にできます」

たしかにサーヴァント相手に術だけでは確実とは言えない その為にも武器は必要だ

「まずはこの外套を着てください」

取り出したのは足まで届く程のロングコートの外套だった さっそう着てみたが普通のコートと変わらない様に見える

「そしてその外套に千鳥を流してみてください」

「千鳥の事まで知っているのか 俺の技は秘匿感がゼロだな」

苦笑しながら千鳥流しの要領で電気を流したが別段変化した様子はない すると伊織がナイフを取り出し突っ込んできた 突然の事で反応が遅れナイフの刃が外套に刺さったと思ったがナイフは外套を貫く事はなかった

「驚きましたか その外套にはある加工が施してあるのです 布地は魔力を分散させる効果がある布ファンデルで構成され 内側には

防刃・防弾に優れたミスリル合金と呼ばれる希少な物質が編目状に織られているので防御力が高いのです剣で切られても銃で撃たれてもまずダメージはありません更にミスリルは電気を流すと魔力を吸収する特性がありそれに比例して強度が増し防御力が更に高まるのです しかしそれは一時的に過ぎず一分後には元に戻ります そして許容量を超える魔力や攻撃を受けると貫通してしまうのであくまでも緊急の防衛手段として使って下さい」

「ああ 気をつけるよ」

「次にこちらです」

次に用意されたのは自分の愛刀である草薙の剣くさなぎだった

「これはあなたを召喚した際あなたのそばにあった剣を私が特別な魔術を付加させ魔力を通わす事で切断力を数倍まで高めた”改良版かいりょうばん草薙の剣”なのです」

「切断力を高めた？そんな事が可能なのか・・・こつちに来てから驚く事ばかりだな」

「確かにこの時代は魔術も科学も格段に進歩しました 特に科学はもう我々の魔術を上回っています 魔術で起こした火も今はライタ―で簡単に出来ますし あなたの使う雷遁の術も科学で出そうと思えば出せます」

「俺の時代は精々通信機がやっとだったな それに比べたら現代科学の進歩には恐怖すら覚えるよ」

「まあ 科学には科学のいい所もあって魔術には魔術のいい所もあ

「りますから千差万別ですよ」
せんさばんべつ

「そうだな　ところでどうやって草薙の剣の切断力を上げたんだ」

「今の状態では切断力は以前と同じなので判り易く説明する為には一度魔力を通わせてください」

「わかった・・・はあ！！」

千鳥刀と違い雷遁では無く普通の魔力を流すと刀身が碧色に輝き細かい振動が発生している　柄の部分は大した事はないが刀身は二重にぶれるほど振動している

「魔力をエネルギーにして刀身に高周波振動を纏わせる事で鋼をも両断する切断力を可能しました　刀身が碧色に光っているのは高周波振動に耐えられるように魔力で強度を高めた為に碧に変化したのです　ですが強度を上げた分魔力の消費と金属疲労度が著しいのでこちらは長時間の使用が出来ませんので気をつけてください」

「長時間使えないなら実戦には使えないじゃないか」

「しかし英霊に対抗するには一時的にしる極限の力が必要です　ですから使用する際は時間を計算しなければなりません　恐らく最短で一時間、最長で二時間といった所ですね」

だが実戦は自分達の予想通りにはならないのが常だ　俺は戦闘経験はあるが経験不足の面がある

「相手にもよるが強敵と戦う場合勝負は一瞬で決まる場合が多いが実力が拮抗して長引く事もあるが　まあ一時間も掛からないだろう

だが例外もある、その為にも長時間使える武器が必要だ」

「安心してください 最後のこの武器は長時間の使用を目的に作られたので大丈夫です」

今度は小型の小刀を数十本出した 形状からして小太刀のようだが小太刀は刃渡りが短いために攻撃力の面では刀に劣るが軽く小回りが効き、敵の攻撃を捌く盾にも出来るので防御に適した武器だ

「こちらはあなたの時代にあつたチャクラ刀を改良した小太刀で基本的な能力は使用者の魔力性質を吸収して放出する事ですがこの小太刀は魔力を放出し維持するのに特化しており使用者が離しても魔力を数秒維持できる特性があります ですからこの小太刀はそのまま接近戦でも使え投擲用にもできます 小太刀は多少ストックしてあるのですばらくは大丈夫でしょう」

説明が終わると武装と術を再確認する まず忍術・強化魔術・外套・草薙の剣・小太刀これが自分の持つ全ての武器だ もうすぐ始まる聖杯戦争に向けて万全の準備をしておこう まずはこの武装に慣れ全力を出せるようもっと修行しなければ

「聖杯戦争までの一ヶ月半 やってやろうじゃないか!! なあ伊織」

「ええ 絶対勝ち抜きましょう」

こうして二人の男は修行を開始したのだった・・・

特殊武装（後書き）

次回ついに原作とクロスします

冬木市へ

- 一カ月後 -

1月26日

いよいよ聖杯戦争が始まる日本の冬木市に向かう日が来た 俺は世話になった家に別れを告げていると

「アヴェンジャー！！頑張つてね 師匠を負かしたら承知しないわよ」

「アヴェンジャーさん 夫をよろしくお願いします お気をつけて」

フェルミと母親が玄関でサスケに言った 聖杯戦争の事は伊織が家族に言つてあつたが魔術師同士の殺し合いなのだ生きて帰れる保障はない 普通なら途方にくれ泣き崩れる所だが二人は泣く事はなかった何故平気なのかと尋ねたら

（あの人なら帰つてくると信じています 確証はありませんがなんとなくそう思うのです 確かに不安は尽きませんが私達は信じています夫が必ず帰つて来てくれる事を だから泣きません）

（師匠はイヤミっぽくて厳しいけど 凄く強いしとても優しいのだから私が唯一憧れる世界一の魔術師なんだからきつと聖杯を持つて帰ってくるわ）

と、二人はそう答えた フェルミはともかく母親は大した物だ それだけ伊織の事を愛しているのだらうならばこの人達を悲しませない為にも伊織の事は守る事に決めた そして当日、二人に見送られ

ていた

「ああ 世話になったな」

サスケが玄関で二人と話していると準備が整った伊織がやってきた

「待たせたな では出発しよう 留守を頼んだよ」

「はい あなた ご武運を祈ります」

伊織が妻と抱き合った しばらくして離れるとフェルミが涙ぐんでいた

「師匠・・・」

「お父さんだろ まったく困った娘だ」

笑いながらフェルミの頭を撫でるとフェルミが我慢していた涙をこぼした

「なに必ず戻るさ 僕は世界一の魔術師なんだろう？ だったら大丈夫だ 留守の間は修行をサボるんじゃないぞ じゃあ行ってくるよ」

フェルミから離れると外に向かい歩き出した 玄関から出ようとした時

「いつてらっしゃい お父さん」

フェルミが大声で言った

「いつてくる!!」

伊織も大声で返した それから一度も振り返らずに森からでた
そして運命の戦いが始まるうとしていた

1月26日・深夜・

森から出て車にしばらく乗りそして飛行場に着いた 日本に行くに
は飛行機に乗る必要があるらしい一応こちらの一般常識は教えても
らったので知識として知っているが実物は初めてだ 実際に見て驚
嘆している

「あなたのパスポートを用意したが偽造なのくれぐれも目立つ行動
はしないでください」

「心配するな 多少驚いているだけだそれに見つかっても俺の催眠
眼で暗示を掛けるから問題無いそれにこれなら俺が不審者には見え
ないだろう」

アヴェンジャーは白のシャツに紺のスラックスを履いておりなら
おかしい点はない むしろ今風の若者のようだ 武装は武器口寄せ
で瞬時に装備する事が出来るので問題ない それに遠距離からの攻
撃には外套を着れば多少は防げる

「まあ 二千年前の人には見えませんね」

「ひどいな そんなに俺は目立つのか」

「ええ ある意味で」

端から見れば外国人の兄弟程度には見えるがアヴェンジャーの方が若いのでビジュアル的にはアヴェンジャーが目立つ

「とにかく早く乗り込もう 目立つのは苦手だ」

「そうですね」

こうして飛行機に乗った二人は機内でもひととき目立つがそれは別
の話

1月27日・冬木市 新都・

飛行機から降り電車に乗り冬木市にやって来た 開口一番にアヴェンジャーは

「これが日本の街か圧倒だな それにしても広いなこんな人口密集地で聖杯戦争をするなんて正気か」

と、言うと伊織が耳打ちした

「迂闊に聖杯戦争の事を喋らないで！ どこに敵の魔術師がいるか判らないのですから」

「すまん 迂闊だったな それでこれからどうする」

「まず 聖杯戦争の監督役にマスター登録を申請します 登録した

ら拠点を探す為に町に行きましょう」

「監督役か・・・どんな奴なんだ？」

「私も知りません 新都の南側にある冬木教会にいるらしいです」

「よし そこに向かおう」

二人は教会に向け移動する途中で百貨店が見えた 中にはデパートなどが在るので

「登録が終わって拠点を探す前に食料を調達しておきましょう」

「金はあるのか？ おまえの家はとても裕福そうには見えなかったが」

「失礼ですね あの家は私の魔術工房で 実家だと落ち着かないから工房を家に改造して妻と娘で暮らしていたのです 私の実家は資産家も兼ねているから資金の問題はありません 君は家が古いからと言って差別するのですか」

「そ・・・そうか 悪かったよ」

異様な迫力でつい謝ってしまった それ程の迫力だった そしてしばらく歩くと不気味な雰囲気と共に教会が見えた

「着いた様です 教会内はサーヴァントの立ち入りを禁止しているからここで待機しててください」

「妙な雰囲気だ 一人で大丈夫か」

「簡単にはくたばりませんよ　もしその時は令呪で呼ぶから安心してください」

「令呪をそんな事で使うな　令呪は使い方しだいで能力をブーストする事も出来るだろう　大事に使いえ」

「そうでした　では念話を使いましょう」

ズルっとこけそうになった　イマナントイッタ

「ちょっと待て　そんな大事な事を今言うなよ　それに念話なんて出来るのか」

「契約したマスターとサーヴァントはラインを通して念話をする事が出来るからサーヴァントが単独行動していても念話で指示が出来るのです」

「もういい・・・さっさと登録してこい・・・」

頭を抱えていると伊織は教会に入っていた

「あの馬鹿　本当に勝つ気があるのか・・・」

一人愚痴ていると黒いライダースーツを着た金髪の男が目の前を通り過ぎた　見た目が派手以外気にしなかったが突然男が振り向いて

「雑種　教会に何用だ」

人をいきなり雑種呼ばわりするとは相当性格が捻れているようだ

「人を待っているだけだ　貴様には関係ないことだ」

「ほう　よく吠えたな　よい特別に名を聞こう」

「男に名を名乗る趣味はない」

「ふん　口の減らない雑種が　まあよい」

男は立ち去ると教会の裏口から中に入った

（教会の関係者か？それにしても妙な男だ少なくとも二度と逢いたくはないな）

そのまま三十分が過ぎた頃やつと伊織が出てきた

「お待たせしてすみません　登録は終了しました　思いの他話が手間取ったので」

「そうか・・・ところで教会で妙な男に会わなかったか」

「妙という訳ではないのですが監督役の男が奇妙でしたな　たしか
言峰^{こよみね} 綺礼^{きれい}と言っていました」

「そいつは金髪だったか」

「いえ　黒髪でした　どうしたんだ？」

「・・・何でもない」

確かに妙な男だったが気にする事もないだろう

「では 今日の宿を探しますか 新都ならホテルもあります それに食料の買出しもしなければならぬから拠点探しは明日にしまし
よう」

陽も傾きもうすぐ夕方になる時間だ 暗くなつては搜索は無理だろう

「判った じゃあさっきの百貨店に行くか」

「いえ 地図によると食料関係は橋の向こうにある商店街の方が安
いらしいです」

「金持ちなんだから節約する必要があるのか？」

「この町では私達は孤立している状態なんです だから資金には限
りがある切り詰める時は切り詰めた方がいい」

なんと家庭的な魔術師だな とても資産家のお坊ちゃんには見えん

「よし まず商店街に繰り出しましょう」

「好きにしろ」

伊織が先頭に立ちアヴェンジャーが後に続いた 橋を渡り商店街に
着くとすぐ脇に小さな公園があつた

「俺は公園で待つてるから お前は食料を買ってこい」

「来ないんですか？」

「俺に出来るのは 戦う事だけだ それ以外は専門外だ」

「そこまで言うなら少し待っていてください 一時間程で戻ります」

伊織が商店街に向かうと公園のベンチで待つことにした すると公園で小さな女の子が泣いていた 以前の自分なら少女の事などに留めなかったが今はこの世界に恩を返す為にできる限りの事はしようそう思い駆け寄ると

「どうしたんだい」

後ろから赤髪の少年が同じタイミングで尋ねた 赤髪の少年は十代半ばに見える 少女はどちらの顔も見ると泣きながら

「ぐす…帽子が…風に飛ばさ…れ…て…ぐす 木の枝に…引つか…かつちゃっ…たの」

見ると三メートル程の木の枝に帽子が引っかかっていた 赤髪の少年は

「まってる 今取ってやるからな」

助走をつけながらジャンプしているが届かない そんな事では届く訳ないだろう

「俺がやろう 替われ」

赤髪の少年は退くと 俺は樹を登り始めた こんな事は力カシの修行だった樹を足で登る事に比べたら簡単だがさすがに人間が立った

まま樹を登れば警察沙汰だろう　だから見た目は普通に
見せ手と足をチャクラで吸引して登っていく　そして帽子まです
り着き帽子を持って降りた

「ありがとう　お兄ちゃん」

「これから気をつけろよ」

「うん」

少女は頭を下げ帰っていくと　赤髪の少年が

「あんた凄いな　よかつたら名前を聞かせてくれないか」

今日はよく名前を聞かれる日だな　まああの男よりは好感が持てる
分構わないだろう

「アヴェンジャーだ　訳あってこれしか言えない」

「アヴェンジャー？不思議な名前だな　じゃあ俺の名前も教えるよ
おれは”衛宮^{えみや} 士郎^{しろう}”だ　よろしくな」

拠点は柳洞寺

伊織を待つ間の時間潰しに衛宮士郎と名乗った少年とベンチで話す事にした

「俺の事は士郎と呼んでくれ だから俺もアヴェンジャーと呼び捨てていいかい」

「構わんさ ある意味偽名のような物だからな まああだ名と思ってくれ」

「はは なんだよそれ」

「自分でもそう思うよ」

二人して笑いながら他愛ない話をして時間を潰した

「じゃあアヴェンジャーはお兄さんと一緒に日本観光をしていたんですね」

「まあな 旅をしながら世界を周っているんだ」

「羨ましいな 俺もいつか世界を旅したいと思っていたんだ」

「何故だ 言葉を覚ええないといけないし紛争地域もあるから旅はオススメしないよ」

「俺には正義の味方になる夢があるんだ だから世界で困っている人を助けて回りたいんだ」

「そうか いい夢だな」

その後も適当に話を合わせながら話込んでいると伊織が帰ってきた

「お待たせしました おや、そちらは？」

「はじめまして 俺は衛宮士郎と言います アヴェンジャーとは先程知り合いました」

「……よろしく わたしは兄の……アイザックと申します」

とつさに偽名を名乗った 魔術師の本名は自分の弱点を晒す場合があるのであまり公にはしない方が無難であるらしい

「変わった名前ですね それもあだ名なんですか」

「まあそんな所です では陽が沈むのでそろそろ失礼します」

伊織は時間を惜しんで早めに切り上げたいのか早々と立ち去りたがっていたがそれを士郎が引き止めた

「今夜は泊まる所を決めましたか？ よかったら俺の家に来ませんか部屋ならあまっているので俺は歓迎しますよ」

「いえ見ず知らずの方に迷惑を掛ける訳には参りません それに宿は決まりましたのでその好意だけありがたくもらいます」

「そうでしたか すいませんでした 出過ぎた事を言って」

「いえ こんな遠い異国の地でこれほど私達に気に掛けてくれた人がいるなんて感激しました またいつかゆつくりとお話でもしましょう」

「はい それじゃ アヴェンジャー アイザックさんさよなら」

士郎が背を向け立ち去るとアヴェンジャーが笑っていた

「はは 中々面白い奴だったな なあアイザック？」

「即席ですがいい名前でした 今度から私の事はアイザックと呼んでください」

「転んでもただでは起きない奴だな・・・所で今日の宿が見つかったのは本当か」

「もちろん その商店街で聞いたんですがこの近くの”柳洞寺”と呼ばれる寺で住み込みのアルバイトを二人募集しているそうです 仕事内容は境内の掃除をする事らしいです」

「そんないいアルバイトはもう他の奴に取られているんじゃないのか」

「いえ 聞いた話だと境内はとても広くて一日掛かりでも終わらないらしいし食事は質素、時給も少ないので、誰も来ないと聞きました」

「俺達だって無理だろう ホテルを探した方がいい」

「なあに 私が軽く暗示を掛ければ彼らには私達が働いて見える様

にすれば大丈夫です それに柳洞寺は霊脈に優れているし山だから
拠点には打って付けなんですよ」

「確かに山は戦略的に見ても優れているからな 判った、俺も賛同
しよう」

「よし さっそく行きましょう」

荷物を抱え柳洞寺を目指す事になった 数分後、柳洞寺のふもとに
着いた様だ 見上げると空に届きそうな程の階段がある

「長い階段だな これなら拠点としては合格だ」

「霊脈も十分です これなら魔力の回復も早いでしょう」

長い階段を登りやつと頂上に辿り着いた 山門を潜ると本堂が見え
たので近ずくと寺の脇で二人の男が話していた

「零観殿 すまないが後を頼む」

「なに 葛木殿も出張とは大変ですな」

「これも仕事です」

「左様でしたな道中気をつけなされよ」

スーツを着た強面の男が横を通り過ぎた挙動からして只者ではない
と思ったが何事も無く階段を下りていったすると本堂の側にいた男
がこちらに気がついた

「おや こちらに何用ですか」

「はじめまして 私達はこの寺が住み込みで働けると聞き参りました」

伊織が礼儀作法に則り言葉を交わすと

「おお 外国の方がいらつしゃるとは驚きました我が寺は異国人だからと差別は致しません ささどうぞ中にお入りください」

そう言つて本堂の裏口に入ると和室が続いていた 中に入り部屋に案内されると案内した男が座り

「柳洞寺の住職を務めます零観れいかんと申します まずはお越し頂きありがとうございます では早速仕事を教えます」

「いきなり採用ですか！ 面接や履歴書などはしないのですか」

さすがにこれは驚いた この世界に逢つて間もない何処の誰とも判らない者達をいきなり採用するのだ

「我が寺は来る者は拒みませんし履歴などここではなんの関係もありません どんな人物かは仕事を見れば判ります ですから異国の方でも構いません」

「・・・・・・」

俺も伊織も言葉が出なかった こうして冬木市で迎えた最初の夜は戸惑いを含んで明けていった

1月28日 - 朝 -

境内の掃除の為朝早く起きた 最初の計画では一日様子を見て寺の住人を確認し全ての人を暗示に掛ける予定だその為にも初日だけは真面目に仕事をしなければならない それくらいならまだいいが問題は・・・

「すまん・・・アヴェンジャー・・・零観さんと朝まで飲み明かして動けないのです・・・仕事はあなたに任せます」

「・・・おいおい勘弁してくれ、おまえもそうだが霊観も寺で酒を飲むとは 仏とやらはよほど寛容なんだな」

皮肉を込めて言うと 隣りで同じように酔い潰れている零観が

「はっはっは なにを仰る 仏に仕える身だからといっても酒を禁ずると言う訳ではありません」

「おまえは本当にこの寺の住職なのか」

「これは手厳しい」

伊織がこの調子では暗示を掛けるのは今日は無理だろう どちらにせよ今日は様子見だこのあたりの地形を調べながら拠点を見て回る事にしよう そう割り切り掃除を開始した

- 夕方 -

ようやく境内の掃除が終わった 此处は広過ぎてとても一人では時

間が掛かり過ぎる　一応このあたりの地形は覚えたこれで道に迷う事は無いだろうが疲れた・・・

本堂に戻ると伊織・零観と共に士郎と同じくらいの少年がいた

「アヴェンジャー殿　ちようどよかった貴殿に紹介しておきたい者がおるのだ　これは私の弟で・・・」

「柳洞一成りゅうどういっせいと申します以後お見知りお気を」

一成と名乗る少年は頭を深く下げた　こちらも一応礼儀に則り

「アヴェンジャーだ　よろしく頼む」

「異国の方が来たと聞きましたでしたが礼儀を弁えているとは　さすがですあの女狐にも見習わせたものだ」

女狐？誰の事だと考えていると　零観が酒を取り出し

「さあ一成とアヴェンジャー殿も来た事だし歓迎会を始めるか」

「また飲むのか　懲りん奴だな　少しは自重しろ」

「零観兄！いくらなんでも境内で酒を飲むのは」

「まあそう言うな　一度も二度も変わらんさ」

「そう言う問題では無いでしょう！」

零観が笑い一成が戒めるを見ながら夜を迎えた

- 深夜 -

月明かりが池の水に反射している光景は見事だった 歓迎会が終わり皆が眠りに付く頃寺の池で伊織と俺はこれからの作戦を検討していた

「まず当面は柳洞寺で準備を整え聖杯戦争が開始されたら偵察を主眼に置きましょう運が良ければ敵のマスターかサーヴァントが何者か判ります あなたはこの世界の歴史疎いので真名を暴くのは私の役目ですから戦闘宙域には私が同行します アヴェンジャーは敵のサーヴァントを倒す事だけを考えてください」

「お前の護衛はどうする」

「全てあなたに任せます」

「つまり助けるも助けられないも俺の自由か」

「そう言うことです 不満ですか？」

「いや むしろ行動を制限するのかと思っていた しかし何故俺を自由にするんだ？もしかしたらお前を見捨てるかもしれないのに」

「それだけ信用しているんですよ あなたとは気が合いますからね」

「気色悪い事を言うな！ 判ったよなるべくお前の事も護衛するフェルミにも約束したしな」

「そうですね では戦闘は任せました」

「了解した」

作戦も決まり寺に戻ろうとすると頭上から

「よう 兄ちゃん ヒマなら遊ぼうぜ」

この世の者と思えない殺気が向けられた こちらも全力の殺気を声の方を向けると全身を青いボディーアーマーに包まれた飄々とした男がいた 素早く武具口寄せを行い武装すると

「へえ 変わった事が出来るな あーあ、面白がって声を掛けるんじゃないったぜ」

「貴様 サーヴァントか」

「それ以外の何に視えるてんだ まあ詰まる所それがわかる兄ちゃん達は俺の敵って事でいいんだよな」

「そうだな 貴様に言われるまでもない」

「は いいねえー それじゃあとつとと始めるとするか」

そう言う男の手から禍々しい紅槍が出現した

「槍兵のサーヴァント!! おまえランサーか」

「おう 貴様はなんだ・・・セイバーって雰囲気じゃないならアサシンか」

「ご想像にお任せしよう」

「言ってくれるねー そっちがその気なら応えねーと失礼ってもんだよね？・・・その心臓・・・貰い受ける！！」

「上等だ！後悔するなよ！！」

こうして黒と蒼の戦いが始まった

アヴェンジャーVSランサー

眼鏡を外し写輪眼を発動させた後、手足に強化魔術を掛け草薙の剣を手に黒い外套を纏った弾丸が疾走する

「俺に接近戦を挑むとは、よほど自信があるのかそれともただの馬鹿か！」

高速で突き出される槍の一撃を剣で受け流す

ランサーの槍は喉を、肩を、心臓を間隙なく貫こうとする

残像さえ霞む高速の打突、ランサーの槍は必殺と称される程凄まじい

「く・・さすがはランサーと言われる事だけはある だが！」

高速の一刺はまさに赤い閃光 しかし攻撃は当たる事は無かった

写輪眼で見切れるからだ そしてアヴェンジャーにはかわす手段はいくらでもあった、いくら早くても写輪眼で筋肉の動きを読めば槍の攻撃を予想しかわす事は出来る

「むっ！」

だが気を抜けば即座にやられる、嵐のような連撃はもう二十合は続いている そして

「！！！」

一際高い剣音の後、アヴェンジャーから草薙の剣が離れた 打突から一転して手首を払う事で剣を弾いたのだ 恐らくランサーの技だろう

「間抜け」

瞬間。

一息のうちに放たれた槍は顔、首、心臓の急所を狙った。だが新たに武器口寄せを行い小太刀を手に取るとその攻撃を弾き返す

「！？ 二刀使いか」

「さあ どうだかな」

ランサーの槍が奔る。

それはまさに流星だった。火花を散らす剣合は絶え間なく続いた。懐に入れまいとするランサーと、小太刀でいなし間合いを詰めるアヴェンジャー。

両者の打ち合いは百を超えた。そして両者が間合いを離れた。仕切り直しをする為か、ランサーは大きく間合いを離れた。

「・・・これだけやっても傷一つ無しとはな」

苛立ち、呟くランサー

「どうしたランサー、様子見か？ それでは最速の名が泣くぞ」

「・・・チィ、減らず口を叩きやがって。テメェ、何処の英雄だ」

「さあな。おまえ如きに言うだけ無駄だな」

「ほう・・・ならば喰らうか、我が必殺の一撃を」

「ご自由に。いずれ倒さなければならぬ敵だ」

「後悔するなよ!!! ん・・・なんだよ今いいところなんだよ・・・ちっ・・・判った判った諜報活動に徹しろだろ」

ランサーが明後日の方角に目を向けると苦虫を潰した様な顔をした

「雇い主の命令だ 今回はこちらでお暇いとまするぜ」

「逃がすと思うか」

「まあ 今日は挨拶とってくれ お互い万全な状態でやり合った
ほうが後腐れないだろ」

「そうですね 今回は挨拶と思う事にしましょう」

「伊織!!!」

「アヴェンジャー 彼の言う通り万全な状態で挑まなければ勝機
はありません」

「だが!!! ぐっ」

軽い紫電が奔った

「あなたに掛けた令呪を忘れたんですか それに相手が手の内を見
せない状態で”宝具”を発動したら悪くて全滅です 今回は抑えて
ください」

「そういう訳だ じゃあな兄ちゃん 次は本気で殺やろうぜ」

ランサーが離脱すると周囲が元の静けさに戻った

「ふう 退いてくれましたか どうやら彼は令呪で諜報活動を命令されているようです アヴェンジャーもしかして怒ってますか・・・」

「いや 冷静に考えればお前の言う事も最もだ 少し熱くなってしまった」

「・・・いえ 私もサーヴァント同士の戦いに声が出なかったので恥ずかしい限りです」

こうしてサーヴァントとの初の実戦は幕を閉じた

1月29日

今日は計画通り伊織が寺の住人に暗示を掛けた 暗示の内容は俺達の事を親戚を尋ねに来た居候と言う内容だ、多少良心が痛むがこれも勝ち抜く為だと割り切った これで柳洞寺に行動を縛られる事は無くなった 今日はこの柳洞寺を要塞化する為にも結界魔術やトラップを施した 俺はサーヴァントの襲撃に備え見張りをしたが何も起きないまま夜になった

「アヴェンジャー 偵察を兼ねて町に行きませんか」

「いいのか こんな時に？」

「あなたも世俗に触れるのも たまにはいいでしょう」

「まあいい 偵察するにも町の地形を実際に見るのも戦いの鉄則だ」

「よし 零観さんも誘うか アヴェンジャーも現地の人間がいた方が確実でしょう？」

「本当に偵察が目的か・・・」

そのまま、零観を誘い山を降りたが案の定偵察は脱線し新都の方にある酒場で酔い潰れていた

1月30日

昨日の反省を生かし今日は一人で偵察する事にした 柳洞寺の結界も完成し魔力を持つ者は正規のルートを通らないと中に入れないようにしてあるので拠点としての機能は十分果しているから伊織の心配は大丈夫だろう まず新都に行き地形を調べた所センタービルが目についた どうやら新都で一番高いビルのようにだ、狙撃に優れたアーチャーなどが好む場所なので要注意の場所として記憶した 次に深山町に戻りこの地に住んでいる遠坂の家を調べた 家の前に立つと奇妙な感覚に包まれた眼鏡を外し写輪眼チャクラで視て見ると何らかの魔術が働いているようだ 写輪眼は魔力を色で視る事が出来るので家全体が色に包まれていた どうやらこの家の主は留守のようだ、まあ居たら居たらで面倒事になる そう思い踵を返し交差点に差し掛かると子供とぶつかってしまい転ばせてしまった

「いたっ ちょっと何処見てるのよ！ レディに怪我をさせるなんて最低！」

そう言って転んだ相手を見ると銀髪の長い髪をした少女が怒ってい

た 年は十代前半だろうか一際長い銀髪が目を惹いた どうやらひどくご立腹らしく

「男だったらレディに手を貸しなさいよ それともそれが判らないほど鈍感なの」

「すまなかった 大丈夫か」

こちらが悪かったので手を差し出すと 少女は手を掴み起き上がった

「本当にすまなかった お詫びに何かご馳走するよ」

「あら いい心掛けね それなら許してあげるわ」

「ではあそこのカフェでよろしいでしょうか お嬢様？」
フロイライン

「ええ それでいいわ 使用人」
バトラー

二人は向かいにあるカフェテラスに入りテーブルに座った 伊織から困ったら使えと言われお金を貰っていたので助かった 少女はコーヒーを注文したが俺は頼まなかった

「何で注文しなかったの」

「これは君のお詫びの為に入ったから 俺はいいんだ」

「では遠慮なく頂くわ」

コーヒーが届き飲み終わる頃には陽が沈み始めていた そろそろ戻るとしようか

「じゃあ俺は帰るから 君も気をつけて帰るんだよ」

「ええ また逢いましょう お兄さん」

少女が言つと俺は背を向け歩きだした

「あつ 名前を聞くのを忘れていたな」

そう思い振り向くと少女はもう居なかった まあいい、もう逢う事はないだろうそう思っていたが

しかし数日後、少女とは以外な形で再会する事をまだアヴェンジャ
ーは知らなかった

聖杯戦争開幕

1月31日

伊織が教会に連絡した所まだセイバーとアーチャーが現界していないらしいので聖杯戦争はまだ開始されていない言っていた　ランサーの襲撃の事を話してみた、だが教会側は開始されてないだけで戦闘するのはルール違反では無いらしいと返答してきた　ランサーのマスターはこの事を知っていたのだ、だからランサーに諜報活動を徹底させ宝具の使用をやめさせたのだ　俺達が開始までは油断しているだろうと言う所を狙ったまさにルールの裏をかいた奇襲だ　とにかく聖杯戦争が始まる前にこの地の調査を完了させなければならぬ　そう思い朝早くから町を散策していると少し先に学園が見えたと遠坂の家と同じ奇妙な感覚に気が付いた　眼鏡を外し学園を見ると数は少ないが所々に魔力が見える　結界魔術か？と思い凝視していると

「あれ　アヴェンジャーじゃないか！」

聞き覚えのある声が聞こえた　振り返ると以前、商店街の公園で逢った衛宮士郎がいた

「こんな所で逢うなんて奇遇だな　学園に用事か？」

以前と同じで気さくに話しかけられていると士郎の後ろから紫色の髪をした気の弱そうな女性が

「先輩・・・こちらの方は？」

「ああ 桜この人は商店街で知り合ったアヴェンジャーだ。 アヴェンジャー紹介するよこの子は俺の後輩の・・・」

「はじめまして 間桐桜です」

桜と名乗る少女が深くお辞儀をすると

「これはご丁寧に アヴェンジャーと申します 以後お見知りおきを」

挨拶を返すと士郎が質問してきた

「どうしたんだ こんな朝早くに？」

「なあに 天気がいいから気晴らしの散歩さ」

「気楽だなあ 俺達学生は学校なのに羨ましいな あっそう言えば今何処に住んでるんだ よかったら何か差し入れするよ」

言うべきか悩んだが まあ大した問題はないだろう

「すぐそこの柳洞寺に居候しているんだ」

「柳洞寺で？ じゃあ一成が言っていた親戚ってアヴェンジャー達の事だったのか」

「一成君を知っているのかい？」

「一成とは生徒会の用事とかでよく話すんだ 今日もこれから備品の修理を頼まれて一成と合流する所なんだ 桜は弓道部の朝練で一

緒になっただ」

「仲がいいな 恋人か」

少しからかって見ると桜は顔を赤らめ士郎はよく分からない表情をした

「いや 桜の事は好きだけど恋人じゃないよ」

「せ・・・先輩!!」

桜は嬉しそうな表情をしていた だが同時に少し落ち込んでいた 恐らく友達以上だがそれ以上は無いと言う事だ

「こんな場所で立ち話していいのか 用事があるんじゃないか」

「そうだった 桜急ごう アヴェンジャーまた後でな」

「アヴェンジャーさん 失礼します」

士郎と桜は学園内に入っていった 学園の魔力は気になったが自分では解除できないしこんな昼間では人目の付く今回の事は伊織に報告して立ち去るか そう思い学園から離れたがアヴェンジャーは知らなかった桜が疑わしい目でアヴェンジャーの背を見つめていた事を

1月31日 - 深夜 -

柳洞寺に戻り鍛錬していると伊織が駆け寄ってきた

「アヴェンジャー、新たなサーヴァントが召喚されたようです．．
．クラスは分かりませんが此処から南西の方角です」

「確かあの辺りは遠坂の家があつたな　では遠坂が聖杯戦争に参加したと言つ訳か」

「でしょうね　．．．それにしても迂闊でした遠坂がまだサーヴァントを呼んでいなかったとは　てつきり御三家はもうサーヴァントを召喚していると思ひ手を出さなかった事が裏目になってしまった」

「俺も遠坂の家には偵察にいったがサーヴァントの魔力を感じなかった　俺はマスターと同行していると思つていたがそう言う訳だったのか」

「今から攻めても相手は工房にいるからあちらが有利です　しばらく様子を見ましょう」

「そうだな　聖杯戦争開始まであと一人か．．．」

暗い夜の空を見上げながら呟いた　そうすぐ聖杯戦争が始まろうと
していた．．．．．

2月1日

遠坂がサーヴァントを召喚した為今日は柳洞寺で待機していた　此
処なら余程の事がなければ襲撃はされないだろうと思つてしていると伊織が

「アヴェンジャー 昨日貴方が言っていた学園の魔力について判った事があります あれは恐らく血の結界と呼ばれる宝具でしょう」

「血の結界？ 聞くからにまともな結界じゃないな」

「はい 血の結界は魔力吸収をする為の結界です しかしその代償は中にいる人間を溶解させ死に至らしめる事で そして残った魔力を使用者が吸収する仕組みなのです」

「まずいな 学園の中には学生が山ほどいる、格好の餌食だな なんとかならないのか」

「私がいけばなんとか解除できますが 罠に嵌りに行くような物です 他のマスターの意向が判らない今へたに動くは危険です」

確かにその通りだ、だが無視すれば何の罪の無い学生達を犠牲にしてしまう どうすればいいか悩んでいると

「まだ希望はあります 遠坂のマスターはその学園の生徒だという情報があります 最悪彼女が解除してくれる事を祈りましょう」

これはまさに神のみぞ知る所だな そう思ったがやはりやり切れない そう考えていると

「アヴェンジャー あなたに学園の偵察を命じます 結界を張った者が現れる可能性があります 可能なら遠坂のマスターとサーヴァントの援護をしてください」

「正気か 敵を助けるなど・・・」

「可能ならです あくまで目的は偵察です、うまくいけば結界を張った者と遠坂のサーヴァントが何者か判明できるでしょう 援護と撤退の判断は私がします」

「わかった 指示にしたがおう」

そして学園に移動し学園を見渡せる場所の近くで気配を消して陽が沈むまで隠れた

- 深夜 -

学生たちが帰り学園に人気が無くなりしばらくした頃屋上で赤い影が見えた

目を凝らし赤い影を見るとそれは女性だった

恐らく遠坂だろう暗い夜でも目立つ赤いコートが夜の闇に映える、遠坂が魔術が施してある場所に近づく和給水塔の上にランサーがいたランサーが何事か話しかけると遠坂は踵を返し校庭に跳んだ

地面に激突する寸前、何かに抱えられた様に着地し校庭に走ったが難なくランサーに追いつかれてしまった

すると遠坂の前に赤い外套を着た男が現れたどうやら霊体化を解いたようだ 赤い外套の男はランサーと睨み逢うと

戦闘を開始した

ランサーと赤い外套の男はしばらく膠着していたが突然ランサーが離脱した

何事かと思いランサーの先を見ると必死に走る人影が見えたどうやら戦闘を目撃した一般人だろう 運がなかったなと言えなかった

自分の姿を見られる訳にはいかない為、助ける事は出来なかった心苦しいが偵察に徹しようと思いついた赤い外套の男を見ると男は弓を自分に向けて構えていた

「！！」

慌てて外套で体を守った 次の瞬間 強烈な衝撃が襲かかってきた
カランと言う音と共に足元に剣が落ち崩れる様に消えた

（剣を飛ばしたのだと？）

なんとか外套に千鳥を流し防御力を上げたがあと少し反応が遅れて
いたら体を貫かれていただろう

とにかく急いでこの場から立ち去った

柳洞寺に戻るとどっと汗が出た

外套が無かったら今頃、体を貫かれ死んでいただろう この外套を
くれた伊織に初めて感謝した

「大丈夫でしたかアヴェンジャー」

伊織が声を掛けた 視覚は共有していたので戦闘もあの出来事も知
っている

「あの男は何者なんだ」

「分かりません 恐らくアーチャーでしょうが剣を飛ばす弓兵など
聞いた事がありません」

九死に一生を得て一息つこうと思った瞬間 東南の方角で光の柱が
現れた

「なに！ あれはサーヴァント召喚の光！！ 7人目が現れたのか」

「遠坂がアーチャーだとすれば あれはセイバーですね」

「サーヴァント中、最優と言われるセイバーが相手にとって不足はないな」

そしてこの光が合図となり聖杯戦争が開幕した

バーサーカーとの遭遇（前書き）

ここから衛宮士郎の視点が増えると思うのでご注意ください

バーサーカーとの遭遇

2月2日

衛宮士郎は突然の事に驚いていた。学校で心臓を貫かれた自分が何故生きているのか、なんとか家に帰り物思い耽っていると先程自分を殺した相手がまた現れ命からがら土蔵まで逃げ延びると突然、光が立ち上り消えると目の前に可憐な少女がいた。

「問おう。貴方が、私のマスターか」

「え……マス……ター……？」

「……………」

少女は何も言わず、静かに俺を見つめている。時間が止まったような感覚だった。

「サーヴァント・セイバー、召喚に従い参上した」

そして左手に痣が浮かび

「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。
ここに、契約は完了した」

そしてランサーを退ける事に成功しセイバーの事を問いただそうとした時

「外の敵は二人、この程度の重圧なら数秒で倒せます」

そう言つてセイバーは塀を飛び越えて外に出た

「外に敵？」

自然に体が動き、全力で門へと走り出した　すると見覚えのある赤い男とセイバーが対峙している。

セイバーはためらう事なく赤い男へと突進し、一撃で相手の体勢を崩して剣を振り下ろし　たやすく赤い男を切り伏せた。

トドメとばかりに腕を振り上げるセイバー

そして援護の為に敵が放った魔術を事もなげに消滅させた

敵の魔術師の攻撃は通用せずセイバーは男が動けないと知り魔術師に切り掛かったが魔術師は奇跡的にセイバーの一撃をかわしたものの、敵はそれで動けなくなった

そしてセイバーが”その手”の何かで相手を貫こうとした時

「止めるセイバーーーーー！！！！！！」

力の限り叫んだ、そしてピタリと剣が止まった

「止めてくれセイバー」

「何故止めるのです。彼女はマスターです、此处で仕留めて置かなければ」

「だ、だから待てて！　こっちは何がなんだか解らないんだ。少しは説明してくれ」

セイバーが黙っていると

「・・・で？何時になったら剣を下げしてくれるのかしらね、セイバーさんは」

不意に下から声が聞こえた

「敵を前に下げる剣はありません」

「貴女のマスターは下げると言ってるのに？」

「・・・・・・・・」

そしてセイバーはゆっくりと剣を下げた

「なら立っていいわよね　アーチャー、あなたは傷の治療に専念して」

赤い男は闇に溶ける様に消え、魔術師が立ち上がる　その顔を見てみると知った顔だった

「お、おまえ遠坂！？」

「ええ、こんばんは　衛宮くん」

そしてにつこり、と極上の笑みを返した

そして数分後、家の中で遠坂と話をしていた 聖杯戦争の事を聞き
7人目のマスターに選ばれセイバーが過去の英雄だった人間だと
聞かされた

その後、聖杯戦争の監督役に逢う為に隣町の言峰教会に向かっていた
三十分後 教会に辿り着いた、セイバーは外に残ると言い俺と遠坂
は中に入る事にした
はじめに礼拝堂がありその祭壇に神父がいた

「変わった客を連れてきたな。・・・ふむ、彼が7人目という訳か、
凜」

「たしかマスターになった者はここに届けを出すのが決まりだった
わよね」

「なるほど」

言峰と呼ばれる神父はこちらに視線を向ける

「私はこの教会を任されている言峰^{ことみね}綺礼^{きれい}という者だが。君の名はな
んというのかな？7人目のマスターよ」

「衛宮 士郎だ」

「衛宮・・・士郎」

「え・・・」

神父は喜ばしいモノに出会った様に笑った。

「礼を言う、衛宮士郎。君がいなければ凜は最後まで此処には訪れ

なかっただろう」

そして神父は祭壇から歩み寄り

「では始めよう。衛宮士郎、君はセイバーのマスターで間違いないか？」

「ああ、そうだ」

「では、聖杯戦争の事を説明しよう」

そうして言峰は語った

繰り返される聖杯戦争、十年前の災害、最後に言峰は

「では問おう 衛宮士郎、君は聖杯戦争に参加するか？」

「ああ、マスターとして戦う」

「よろしい それでは君をセイバーのマスターと認めよう。この瞬間から今回の聖杯戦争は開幕された」

この言葉を皮切りに始まりの鐘は鳴った

「決まりね。それじゃあ帰るけど、わたしも一つぐらい質問してもいい綺礼？」

「かまわんよ。これが最後かもしれんのだ、大抵の疑問には答えよう」

「それじゃあ遠慮なく。綺礼、あんた見届け役なんだから他のマス

ターの情報ぐらい知ってるんでしょ。それぐらい教えなさい」

「それは困ったな。教えてやりたいのは山々だが、私も詳しく知らないのだ。今回は正規の魔術師が少ない。私が知りうるマスターは三人だけだ、衛宮士郎を加えれば四人か」

「あ、そう。なら呼び出された順番なら判るでしょう。仮にも監視役なんだから」

「・・・ふむ。一番手はバーサーカー。二番手はアサシン。三番手はアヴェンジャーだな。あとはそう大差ない」

「アヴェンジャー？イレギュラークラスの事？」

「そうだ」

アヴェンジャー・・・一瞬公園で出会った男を連想したがまさかと思う。それに今は自分の事で精一杯だ

「そう。それじゃこれで失礼するわね」

そうして遠坂は背を向け別れの挨拶もなしに出口へ歩きだした。そして遠坂の後に続く。

背後に気配を感じて、振り返った。

いつの間にか神父が何を言うのでもなく俺を見下ろしていた

「な、なんだよ」

こいつは苦手だ。相性が悪いというか、肌に合わないというか、と

もかく好きになれない。

「喜べ少年。君の願いはようやく叶う」

「なにを、いきなり」

「判っていた筈だ、正義の味方には倒すべき悪が必要だ」

「おまえ!!」

この神父は”敵が出来て良かったな”と言っているのだ

「なに、君の葛藤は人間としてとても正しい」

「っ!!」

「さらばだ衛宮士郎。帰り道には気をつけたまえ」

そうして教会を出た

外に出た途端、肩に掛かっていた重圧が消え去った
近くにセイバーが来たが無言だ

「いきましょう。町にもどるまでは一緒でしょう」

さっさと歩き出す遠坂。

それに続いて俺たちも教会を後にした。

三人で帰る途中でこれからの事やセイバーの真名を秘密にするなどを話していた
交差点に差し掛かり遠坂と別れの挨拶をしていると

「ねえ、お話は終わり？」

幼い声が夜に響く。

視線が坂の上に引き寄せられる。

そこには。

在ってはならない異形がいた

「バーサーカー」

遠坂が絶望を含んだ声で呟いた

アレは紛れも無いサーヴァントだ

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

微笑みながら少女は言った。

背筋が凍る、アレは化け物だ

「やば。あいつ、桁違いだ」

遠坂は身構えた　しかし少女は

「あれ？あなたのサーヴァントはお休みなんだ。つまんないなあ、二匹いっしょに潰してあげようって思ったのに」

坂の上で俺たちを見下ろしながら、少女は不満そうに言う。
と。

少女は行儀良く、この場に不釣り合いなお辞儀をした。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンて言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン……」

遠坂がかすかに揺れた。

少女は嬉しそうに笑みをこぼし

「じゃあいくね。やっちゃえ、バーサーカー」

「――！！！！」

鉛色の巨人が吼えた　そして戦いが始まった

アウエンジャー
復讐者のサーヴァントは鉛色の巨人を見据えながら笑っていた

バーサーカーとの遭遇（後書き）

一応、セイバールートを基本にしたいと思います

三強同盟

この場に現れたアヴェンジャーに全員が注目していた 実を言うとアヴェンジャー自身もこの場に來たのは偶然だった、数時間前のセイバー召喚によって聖杯戦争が開幕したがマスターの情報やサーヴァントの能力は殆ど不明なままだ 少しでも情報を探る為にセイバーが召喚された場所を偵察に來たがまさか士郎がマスターで三日前に出会ったあの少女がイリヤスフィール・フォン・アインツベルンだったとは運命を司る神様とやははどれだけ皮肉めいた出会いをさせるのだ、悪態の一つでもつきたい所だがそうも言つてられないようだ

「あら、また逢えると思つていたわ お兄さん いえアヴェンジャーと言つた方がいいかしら？」

イリヤが嬉しそうに笑つていた

「俺も、まさかまた君に逢えるとは思つていなかったよ お嬢さん いやイリヤスフィール・フォン・アインツベルン？」

アヴェンジャーも不敵に笑う

「アヴェンジャー・・・あんたがサーヴァントだったなんて」

士郎が呆然と呟いていた、遠坂とセイバーはそんな士郎を見て同時に問い詰めた

「シロウ、あのサーヴァントを知っているのですか」

「衛宮くん、あいつの事知ってるの？」

そんな二人の問いにあたふたしながら

「あ・・ああ　何度か商店街や学園で話した事があるがまさかサーヴァントだなんて・・・」

「俺も意外だよ土郎、君が魔術師でマスターだったなんて予想外にも程がある」

アヴェンジャーが士郎の方を向きながらため息をついた。まさか自分の知った者がマスターになるなどどんな低い確率だ。そう思っているといリヤが尋ねた。

「ねえ、アヴェンジャーなんで邪魔するの？あなたもサーヴァントが減るのは嬉しいはずじゃないの？」

「俺もそう思うが、何分知った顔を殺されるのは夢見が悪い、それに俺のマスターはあんたに個人的な恨みがあるらしいから邪魔をするのも一興かなつと思つてな」

「ふうん、あなたのマスターの恨みなんて知らないし知ろうとも思わないけどわたしの邪魔をするなら殺すわ　やっちゃんえバーサーカ
ー！！」

! ! ! ! !

先程まで動きを止めていた異形の巨人は吼えながら突進してきた
アベンジャーは眼鏡を外し相手を見据えた

「^{バーサーカー}狂戦士か、理性をなくした攻撃ほど避けやすい」

そう思つてバーサーカーの攻撃を紙一重で避けたが 次の瞬間、外套が裂かれ腕から血が出た

「！！！」

すぐさまバーサーカーから距離を取ると腕の傷を見た、千鳥を流さなかつたとはいえこの外装はそう簡単に破れないと思つていたが

「完全に避けてこの威力か 剣風でも十分凶器だな」

バーサーカーが一息で距離を詰め追撃してきた アベンジャーは草薙の剣を構えすれ違い様に胸を切り裂いたがバーサーカーには何のダメージも無かつた、単純に効いていないのだ

「ふふ・・・どお、わたしのバーサーカーの前じゃそんな剣なんて意味はないわ」

イリヤが笑いながらアベンジャーを見つめていたしかし当の本人は

「やれやれ、まともに戦り合つたら勝ち目は無いな」

何故か絶望した様子もなく不敵に笑つていた 状況はアベンジャーが圧倒的に不利なのに本人は気にした様子はない 誰もがアベンジャーの敗北を予想した、そしてアベンジャーは

「しかたないこんな序盤でアレを使うのは気が進まないが・・・」

アベンジャーは何か諦めた顔をするとうつくりと左眼を閉じた

誰もが驚いた、戦闘中に片目とはいえ目を閉じるなど自殺行為だと皆思った

実際バーサーカーの猛攻が始まりアヴェンジャーは避けるのが精一杯なのだ

そして攻防の均衡が崩れバーサーカーの斧剣がアヴェンジャーに迫ろうとした刹那

アヴェンジャーの目から血が流れ左眼が開かれた

「天照!!!!!!」

そして次の瞬間、バーサーカーの体から黒い炎が噴出した

「————!!!!!!」

バーサーカーが苦痛を込めた声を出した

黒い炎は全身に回り鉛色の巨人を焼いた

その光景に誰もが目を疑い恐怖した、バーサーカーの体はランクの低い攻撃は無効化されるそして高威力の攻撃を当ててもビクともしなかった化け物が悲鳴を上げているのだ

あの黒い炎は宝具クラスの威力があるだろうでなければバーサーカーに効くはずがない、しかし頭で判っているも目の前の光景には吐き気を覚えた、それ程の恐怖が全身を包んでいた

そして数秒後、バーサーカーは灰になった

アヴェンジャーもバーサーカーが死んだと思いイリヤに向き合うとイリヤは相変わらず笑っていた

その笑みを見た瞬間アヴェンジャーの後ろから先程死んだはずのバーサーカーが斧剣を振りかざし迫ってきた

「く!!!」

慌てて飛び上がり寸での所で攻撃を回避したが剣の切っ先が脇腹を掠った

掠った場所の肉が裂けおびただしい量の血が出た

「驚いたわ、まさかバーサーカーを一回殺すなんて　でも残念ねバーサーカーを殺すには後11回殺さないと」

「不死性の・・・宝具か・・・まさか・・・肉体その・・・ものが・・・宝具・・・だったとは・・・」

「正解、ご褒美に殺してあげるね」

バーサーカーが迫り動けないアヴェンジャーを両断しようとした時

「はああああー！！！」

セイバーがそのスキを突き接近したが

「なあに、セイバー　あなたから先に死にたいの？じゃあ望みどうりにしてあげる　バーサーカー！」

イリヤがバーサーカーに命令すると斧剣がセイバーに向かった

セイバーは先程の怪我が直つておらず明らかにスピードが落ちていたそして斧剣がセイバーに当たろうとした時

「やめろおおおー！！！」

衛宮士郎が割り込んだ、セイバーを突き飛ばしてバーサーカーの一撃から助けたが

「が……は」

代わりに衛宮士郎が切られた

「!？」

全員が驚いた声を出した

衛宮士郎の怪我を見ると胸から下の肉がなかった

「はは……そうか。なんて間抜け……ごふ」

そして衛宮士郎は血を吐きながら倒れた

「なんで………？」

ぼんやりとイリヤが呟いた

少女はしばらく啞然とした後

「……もういい。こんなの、つまんない」

俺とセイバーにトドメをささず、バーサーカーを呼び戻した。

「……リン、アヴェンジャー。次に会ったら殺すから」

そう言ってイリヤは立ち去った。

2月3日

懐かしい夢を見ていた 五年前の親父が死んだ時の夢だ、親父が死ぬ前に語った正義の味方の夢そして親父と約束した俺が正義の味方になると そして親父が死んだ……

「っ!」

夢から覚めると空気を求めたが代わりに口の中で血の味がした

「うつ……」

立ち上がろうとしたらふらついた なんとか壁に手をつきとにかく顔を洗って目を覚まさなければと思い洗面所に向かった

「いた……いたたた……」

ようやく洗面所にたどり着き顔を洗った、完全に目が覚めたが今度は腹が鳴った

どうやら体が栄養を欲しているようだ
何か作ろうと居間に向かうと

「あら、おはよう 衛宮くん」

「邪魔しているぞ、士郎」

そこに居たのは遠坂とアヴェンジャーだった 突然の光景に危うくこけそうになるが何とか踏み止まり

「なんでさ」

疲れた様に呟いた

「・・・よし、少しは落ち着いた」

深呼吸をして事情を聞いた

なんでも俺がきを失った後、バーサーカーは立ち去ったらしい。

その後、よく見れば俺の体は勝手に治り始め、十分もしたら外見は元通りになったらしい。

傷は治ったものの意識が戻らない俺を遠坂とアヴェンジャーがここまで運んで、あとは今に至る訳だとか

「なんで俺、生きているんだ？」

「あなたの怪我が治った理由は恐らくセイバーのおかげね、セイバーの魔力が強力で召喚の際に手違いが生じて何らかのラインが繋がったんでしょね」

「ラインが繋がった？」

「たぶん、セイバーの自然治癒力の力が貴方に流れているんじゃないかしら」

「そうなのか？」

「判らないわ、とにかくあまり無茶はしない事。今回は助かったからいいけど、次にあんな傷を負ったらまず助からない筈だから」

「分かったよ。保障はできないけど・・・」

「まあいいわ　じゃあ衛宮くん、これから真面目な話があるんだけどいいかしら」

「遠坂とアヴェンジャーがここに残った本題ってヤツだろ。いいよ、聞こう」

「衛宮くん、貴方これからどうするつもり？」

「・・・正直、判らない。あのイリヤって子に狙われてるからどうすればいいのか見当も付かない」

「じゃあ、提案なんだけど　わたしと衛宮くんとアヴェンジャーで手を組まない？」

「て、手を組むって、俺と遠坂とアヴェンジャーが!？」

「そう、わたしのアーチャーは致命傷を受けて目下治療中、完全に回復するまで時間が掛かる。アヴェンジャーも同じ理由で治療中、一応マスターの許可も取ってあるそうよ」

「現状で最も効率いい方法は怪我を治しつつ敵の情報を調査する事だがこの怪我ではそれも難しい、そこで遠坂　凜と協力関係を結んだと言う訳だ」

「で、そっちはサーヴァントは申し分ないけどマスターが半人前」

「むっ。俺そこまで半人前なんかじゃないぞ」

「三回も死にそうになったのに？」

「ぐ．．．分かった 同盟を組もう」

「決まりね。とりあえずバーサーカーを倒すまで味方同士って事で」

そして三人は握手をした

三強同盟（後書き）

千鳥関係はアサシン戦で出そうかと思っています。

血の結界（前書き）

原作の要点だけを絞りセリフを少なくしたので分かりにくい所があるかもしれませんがご迷惑をお掛けします。

血の結界

遠坂、アヴェンジャーと同盟を組んだ事で戦力的には申し分ない、ある意味サーヴァントが三人も居るのだこれなら例えバーサーカーが相手でも十分勝機はあるだろうそう思っていた矢先に

「では、俺は柳洞寺に帰るとしよう 戦闘になったら呼んでくれ」

アヴェンジャーはそう言っ立ち上がった そのまま帰ろうとすると

「待ってくれ、どうやって連絡を取ればいいんだ 携帯でも持っているのか？」

「まさか、サーヴァントがそんな文明の利器なんて持っている訳ないだろう ちゃんと考えてある、ちよつとした冗談だ」

笑いながら士郎に近づく懐から巻物の様な物を取り出した

「俺に連絡したい事が出来たらその巻物を開いて魔力を流すと俺と擬似的にラインを繋げて会話が出来る だが気軽に呼ぶなよ俺は戦闘以外はからつきしなんだ」

「ああ、でも巻物なんて珍しいな アヴェンジャーの正体は日本に縁のある英雄なのか」

「さあ どうかね」

「へえ 珍しいわねこんな魔術品なんて見たことないわ、それに自分の正体を隠さないなんて驚きね」

「別に俺の真名が判つても弱点が判ると思えないからな」

「スゴイ自信ね、まあいいわそれは追々調べるとして それじゃあ衛宮くん、わたしも戻るわね」

「ああ、お疲れ様 アヴェンジャーもありがとう」

「協力関係になったといつても、わたしとアヴェンジャーとはいずれ戦う関係にあるわ、だからわたし達を完全に信用しないほうが楽よ、衛宮くん」

「そういう訳だ、今は同盟を結んでいるがいずれは敵になる それを忘れない事だ 土郎」

そう言う二人は出て行った

遠坂とアヴェンジャーが去って、緊張の糸が切れたのか居間でぼんやりしているとセイバーの事を思い出した

急いで家の中を探し道場まで来るとセイバーを発見した。

その後セイバーに昨日の事でこっぴどく怒られた

そしてセイバーの安否をきずかっていると。

入り口の方で何か重い荷物が落ちる音がした。

「どすん？」

はてな、と振り返る。

そこには、大きなボストンバックおいた遠坂の姿があった。

「はい……？」

思考が停止した

なんでも協力するからこの家に住むらしい　さすがにこれは不味い
と思うが当の本人は気にした様子もなく我が物顔で

「じゃあ　士郎、わたしはセイバーと一緒に部屋に行くわね」

すでにこの家の主導権を握られてしまった　悲観しながら自分の部屋に戻るとセイバーがいた、なんでも話があるらしい
とにかく話を聞いてみると自分の真名を秘密にして欲しいそうだから暗示に掛けられたら簡単に喋りそうだから了承した
次に魔力の消費を抑える為に食事と睡眠を多く取る必要があるらしい
これも了承すると

「では、睡眠をとります、夕食時に起こしてください」

そしてセイバーは隣りの部屋に行き、襖をとじた

その後、夕食をとり今後の方針を遠坂と相談した、当面は普段通りの生活を守りなるべく他のマスターを探す事になった
夕食後にセイバーと他愛ない話をして皆が寝静まった頃に土蔵に行き夜の鍛錬をしながら土蔵で寝た

2月4日

土蔵で目を覚まし朝食を作る為に居間にいくと
遠坂と桜が鉢合わせていた

マズイと思い必死に打開策を考えていたが両者の空気が重くなり桜
が尋ねた

「先輩・・・これはどういう事ですか？」

「あ・・・いや・・・これはだな・・・話すと長くなるんだが・・・」

「長くないわよ。単に、わたしがここに下宿する事になった
けどもの」

きつぱりと。

要点だけを言った

世界が止まったような時間が流れた

「・・・・・・・・」

桜は俯いて口を閉ざしていた

そして桜は何かを決意した顔をして

「先輩、お台所お借りしますね」

そう言って台所に向かった

その後。

桜の作った朝食を食べていた 相変わらずギスギスした雰囲気をして
いたがなんとか落ち着いていたが藤ねえが来た事で場が更に混乱
した

数分後、暴れまくった藤ねえを遠坂が論破してこの場はなんとか切

り抜けた

そして学校に行く準備をして登校した

朝から様々な視線を向けられ校門に着いたら慎二と一悶着あって、あつという間に昼休みになった

朝に遠坂から昼休みになったら屋上に来るようにと言われたので屋上に行く

寒さに震えながら遠坂が吼えた

「遅い！何のんびりしてるのよ土郎！」

開口一番にそう言った

「遅れて悪かった、それでこんな所に呼び出してどんな話なんだ」

「それじゃあ言うけど 土郎。貴方、放課後はどうするつもり？」

「放課後？いや、これといった予定はないよ」

「じゃあ、学校の結界を解除する手伝いをしなさい」

「・・・？」

学校の結界？

「待て、学校の結界って、それはまさか」

「まさかも何も、他のマスターが張った結界だつてば、発動すれば学校の敷地をほぼ包み込む」

確かにここ数日、学校で違和感があつたがまさか結界の影響だったとは

「識別は結界内にいる人間から血肉を奪うタイプ。アヴェンジャーの話だと血の結界と呼ばれる宝具らしいわよ」

「アヴェンジャーはこの結界の事を知っていたのか？」

「ええ、でもこれで気が付いたでしょ」

「学校にマスターがいる・・・？」

「そう、確実に敵が潜んでいるってわけ」

「・・・それで。そのマスターが誰なのか判っているのか？」

「いいえ。心当たりはあるけどまだ確証が取れてないの、まあ違うと思うんだけど」

「そうか、遠坂が判断したなら間違いはないだろう」

「それにこの結界を張ったのはサーヴァントの仕業だと思う、この結界は発動したら最後、結界内の人間を一人残らず”溶解”して吸収する代物よ」

「なんだって！！」

「この結界が起動したら、学校中の人間は皆殺しにされるのよ。分かる？こんなふざけた結界を準備させるヤツがこの学校にいるマスターなの」

「話は解った。俺はどうしたらいい？」

「あなたの強化の魔術を応用して結界の基点を探して欲しいの」

「分かった、俺に出来る事なら喜んで協力するよ」

「よろしい、今日は準備があるからそのまま家に帰っていいわ
明日から行動開始よ」

そして丁度良く昼休み終了のチャイムが鳴った

血の結界（後書き）

ゲームをメインにするかアニメをメインにするか迷っています。
よかったら感想を聞かせて下さい！

アサシンとの戦い

士郎と遠坂が屋上で話していた頃、アヴェンジャーは柳洞寺で怪我の療養をしていた。受肉している為肉体の損傷は治り難く、完治にはまだしばらく掛かるが軽い戦闘なら問題ない程度までは回復していた。そんな折に裏手の池で奇妙な気配を感じた、結界が反応しない所を見ると一般人かと思ったが気配が妙だったまるで幽霊のような・・・

そこで気が付いたサーヴァントは英霊、つまり幽霊なのだそれに霊体化すれば気配は消えるので感知は無理だつまり柳洞寺の結界はサーヴァントには無意味だと、急いで外套を着込むと裏手の池に向かったするとそこには全身をロープで覆い顔には白い髑髏の面をした異様な男が佇んでいた

「・・・どうやら、私の出した気配をちゃんと感じたようだ。アヴェンジャー？」

「はじめて見る顔だ・・・アサシンのサーヴァントだな」

「いかにも・・・」

「背後からの暗殺が得意なサーヴァントが俺に何か用か」

「マスターの命令で・・・怪我が完治していない今の内に・・・おまえの実力を知りたいそうだ・・・」

「俺は相当有名なようだ、おまえのマスターに気に掛けてもらえて光栄だよ」

「・・・安心しろ・・・可能ならそのまま殺せだそうだ・・・」

「そうかい!!」

眼鏡を外し写輪眼を発動させ草薙の剣で横薙ぎに切り裂いたがアサシンはそこにいなかった

「そういえば奴は気配を遮断できると聞いたそれに霊体化をプラスして完全に気配を絶ったか」

確かに暗殺に特化した能力だ、サーヴァント相手には大した意味はないがマスターである人間や受肉した俺には脅威だな、ここは外套で攻撃を防ぎ相手が姿を現した瞬間を狙うしかないな

「隠れてばかりでいいのかアサシン？ 俺の実力を測るんじゃないのか」

「・・・では、そうさせてもらおう」

自分の耳元で声が聞こえた 外套と写輪眼の死角である後頭部は唯一の弱点だ急いで背後を振り向いたがアサシンは見えなかった

「・・・この程度か？アヴェンジャーのサーヴァントよ・・・次は殺すでしょう」

再び声が響いたがどこにいるか見当も付かない状態だ 次は必ず殺しに来るだろう、現状を打破するにはもう賭けをするしかない
アベンジャーは決意した、そして外套を脱ぎ捨て草薙の剣を放り投げた

「・・・どういづつもりだアヴェンジャー？自らの鎧と剣を捨てる
とは・・・」

「なあに、こんな世に未練がなくなっただけさ 殺るんならさっさと
しな」

「・・・いいだろう、その潔さに免じて我の宝具で楽にしてやろう・
・死ぬがいい」

気配を絶っていたアサシンが目の前に現れ

「喰らうがいい、我の宝具”妄想心・・・」

「待っていたぜ、この瞬間を！」

アサシンを視認し千鳥を地面に突き立て

「千鳥流し！！」

無数の電撃がアサシンを襲った

「ぐうううう・・・き・・・貴様・・・これを狙っていたのか・・・
」

アサシンは全身を痺れさせながら倒れた

千鳥流しは千鳥を全方向に放出し相手を痺れさせる技だが外套に電
気を吸収されるので外套を着ている状態では技である千鳥流しが使
えない だがあえて外套を捨て防御力下げた様に見せかけて相手の
油断を付き自分の周囲に現れる様に仕向けたのだ まさに賭けだった

「まさかおまえが真正面に現れてくれるとは思わなかったな　どんな宝具かは知らないが俺に接近したのがお前の敗因だ　接近せず離れた所で俺をなぶり殺しにすればおまえが勝っていただろう残念だったな」

「・・・貴様という男は・・・どこまでも・・・異常な奴だな・・・」

「それは褒めているのか、貶しているのか」

「・・・さあな・・・我はここまでようだが・・・貴様はいつまで勝ち残れるか・・・な」

「無論、最後まで・・・」

そう言つて千鳥を叩き込んだ

2月5日

一夜明けた後。

遠坂と二人で学校に着く。

正門には登校する生徒たちの姿があり、学校ではいつも通りの日常を迎えている。

「・・・」

にも関わらず、確かに違和感があった。

昨日は気づかずに校門をくぐったが、注意していれば確実に気が付く程の違和感

「・・・本当だ。外と中とじゃ空気が違う。甘い蜜みtainな空気じゃないか」

「へえ、士郎にはそう感じるんだ。・・・貴方、魔力感知は下手だけど、世界の異状には敏感なのかもしれないわね」

ふうん、と遠坂は何やら考え込む。

「とにかく、この結界を張ったマスターとサーヴァントを探し出して結界を解かないと不味いな、断わる様なら倒さないとな」

「そういうこと、ちゃんと理解していてくれて安心したわ」

「じゃ、わたしは結界を張ったヤツを搜してみるから、士郎は不審な場所をチェックしといて」

「ちよつ・・・そんなこと言われても困る・・・！不審な場所ってどういう所だよ」

「貴方風に言えば空気が甘い所よ、じゃあチャイムが鳴るからまたあとでね」

そのまま、遠坂はあつという間に校舎へと消えていった。
昼休み。

「・・・よし。今なら歩き回ってもヘンに思われない」

昼飯を数分で済ませて廊下に出る。

「・・・まずは人気のない所が基本かな・・・」

その後、一通り校舎を回った後、念の為に外に出た。

グラウンドや校舎裏に異状はなかったが弓道場の一带は毛色が違った

「まさか、ここか？」

校舎の中にもおかしい場所は多々あった。

けれど、ここは違う。

人目が付かないどころか、毎日人が集まる場所だ。

「・・・どうして気が付かなかったんだ、異常って言えば、ここが一番異常じゃないか」

胸を押さえながら呟く。

「・・・結界には基点があると遠坂は言ってたな。何カ所あるか知らないが、最初の基点がこのあたりにあるって事か・・・」

中に入り魔力の基点を探してみたがダメだった。

魔力の感知に疎い俺では、基点なんて見える筈がない。

「・・・ふう」

しょうがないな。とりあえず遠坂にここの事を報告して・・・

「なんだ。捜し物かい、衛宮」

「！」

突然の声に振り向く。昼休み、人気の絶えた弓道場の前に立っているのは……

「……慎二」

そこにいたのは親友だった間桐慎二だった

「……なるほどね、君が遠坂と一緒にいた理由はそれが。そうだよねえ、マスター同士手を組んだ方が効率がいいだし」

「！！……慎二、おまえ」

「そう警戒するなよ衛宮。僕と君の仲だろ。お互い隠し事は無しにしようじゃないか まあ君もマスターなんて酷い役目を押し付けられたんだろう？」

何をはばかりる事もなく、慎二はきっぱりと口にした。自分がマスターだという事を

「……まさか。おまえがマスターなのか、慎二」

「だからそうだって言ってるだろ」

クスクスと慎二は笑う。

「ま、こっちも衛宮がマスターだって知って驚いているんだ。意外なのはお互い様って事で、少し話し合わないか」

「話し合う・・・それは構わないが、何を話し合っつていうんだ」

「そりゃ今後の事さ。僕は戦うつつもりはない。けど他はそうでもないだろう？」

「・・・・・・・・」

「ま、こんな所で話をするのもなんだろう。誰に聞かれるとも判らないし、場所を変えよう。・・・そうだね、僕の家がいい。あそこなら遠坂の目も届かないし、襲われても安心だ」

それは逆に言えば俺の危機には遠坂が助けに入れないという訳だ、そう警戒していると

「いいから行くよ。遠坂に見つかったら僕も君も只じゃ済まないんだから」

それだけ言っつて慎二は歩き出した

「・・・・・・・・」

・・・付いて行くしかないか。

慎二の話にも興味はある、午後の授業は諦めよう。

坂を上がり人目を避けるように間桐の屋敷に入った

・・・昼だというのに、屋敷の中は薄暗い

「衛宮、こっちだ。居間にいるから早く来いよ」

声がる方向に視線を投げる。

そこには椅子に座った慎二と

・・・黒い、闇が結晶したような女性の姿があった

「紹介しよう。僕のサーヴァント ライダーだ」

柳洞寺での戦い

「・・・二人だけで話をするんじゃないかったのか、慎二」

間桐家の屋敷で慎二と話し合う為にここに来たがサーヴァントであるライダーを見た途端、まるで黒い刃物を押し付けられた気分になった

「・・・ライダーは俺のサーヴァントへの牽制か。あまりいい気分じゃないな」

「ゴメンゴメン。何分こっちは素人だからさ君のサーヴァントが恐いんだ」

「・・・ふん、まあいいさ、それで話って何だ」

「そうだね、本題に入ろう、さっきも言ったけど僕と協力しないか衛宮」

「待った。その前に俺も訊きたい事がある。返事はそれからだ」

「なに、僕がどうしてマスターになったかって事？」

ああ、と頷く

すると慎二は語りだした

自分の家が魔術師の家系で今はもう枯れ一般人と同じで聖杯戦争の知識だけを持っていたが勝手にマスターにされたと

「さ、これで判ったる衛宮、勝手にマスターにさせられた者同士、

協力しようよ」

「それは構わないが。確認するけど、それは身を守る為なんだな、慎二」

「いや、それもあるけど当面の敵を叩かないとまずいんじゃない、例えば遠坂に柳洞寺のマスターとサーヴァントとかさ」

「遠坂とアヴェンジャーを倒すって言うのか、だとしたら俺は断わる。二人を倒すなんて相談にはのらない 第一、あいつらは何もしてないだろう。あいつらとはいずれ戦う事になるけど今は信頼できるし、していたいんだ」

「・・・ふん。何かあつてからじゃ遅いと思うけどね。まあそう言うならいいさ、僕も君と同じく様子を見るさ」

意外な事に、慎二はそれで諦めてくれるらしい。そう安心しているとクスクス笑いながら慎二が

「・・・よし、一ついい事を教えてやるよ衛宮。最近、人が次々と昏睡して倒れている事件は知ってるか」

「ああ、今朝もニュースで話題になっていたな、なんでも全員何かの中毒症状だつて言ってたな」

「その事件の犯人は寺にいるよ」

「！？ 寺って、まさか柳洞寺か！？」

「ああ、僕のサーヴァントが言うには、大規模に魂を集めているそ

うだから、早めに叩かないと厄介らしい」

「な……………」

そんな馬鹿な、アヴェンジャーとそのマスターがそんな事をするなんて

「話はそれだけだよ。それじゃあ僕は失礼するよ」

そう言つて慎二は奥の部屋へと引つ込んでしまった

「ちよつと待てよ慎二、話はまだ終わつて……………」

慌てて慎二を追おうとしたがライダーが割り込んだ

「……………」

ライダーは無言で俺を見つめていた、これ以上は進めないらしい
サーヴァント相手では引き下がるしかなかった。

後ろ髪を引かれるがここで自棄になつてもしかたがない、そう考えて間桐邸を離れた。

家に戻る頃には、陽が沈みかけていた。

「……………慎二から聞いた話は、桜と藤ねえが帰つてからにするか」

そう言つて夕食の支度をした。

夕食後、居間に集まつた遠坂とセイバーに慎二から聞いた話を訊かせた

マスターとサーヴァントの家に単身で行った事に二人は呆れていたがアベンジャーの話をしたら真剣な顔になった

最近の昏睡した人々の事件はアヴェンジャーのマスターの仕業だと言ったら

遠坂はきつぱりと嘘だと断言したが

セイバーは本気にしたようだ、セイバーは戦うべきだと進言したが

「いや、俺も遠坂と同じだ、あのアヴェンジャーがそんな事を許すとは思えない、恐らく慎二の嘘だろう」

「な・・・貴方は敵のサーヴァントを信じるのですか！？ いずれ敵になる以上、打って出るべきです、それが戦いと言うものでしょう」

「それは分かってる。けど待つんだセイバー。アヴェンジャー達がそんな事をしている確証は無いが今は同盟中だ、同盟が終わるまで手を出したら駄目だ セイバーも約束を破るのは本意じゃないだろう」

「う・・・しかし、士郎！」

「とにかく、こっちから仕掛けるのはまだしないぞ、この件は真相がはっきり判るまで保留にしよう」

そう言って、居間を離れた

風の無い、静かな夜だった。

時刻は零時を過ぎている。

沈殿した闇。

地上は無風。

されど遙か上空では轟々と大気がうなり、幾重にも連なる雲を泳がせていた。

「・・・風が出るな」

空をにらみ、音もなく庭に佇むのはセイバーと呼ばれる少女である

「・・・」

一度だけ、庭の隅に視線を送る。

そこには古い土蔵があり、彼女の主が眠っている。

「・・・貴方が戦わないというなら、いい」

七人のサーヴァント中、最高の能力を持つという剣の英雄。
そんな彼女が初めて主の命に背いた

「貴方は甘い。それでは他のマスターに殺されるだけだ」

マスターが戦わないというのなら剣である自身が戦おうと決めた

「傷は癒えていない。マスターからの魔力供給も期待できない」

だが、それでも戦闘に支障はない。

月が陰る。

一際大きな雲塊が夜空を覆ったと同時に、セイバーは屋敷の塀を飛び越えた。

闇を駆ける。

寝静まった町並みを、銀色の剣士が駆け抜けていく。

峠道を越え、柳洞寺へと続く参道を駆け抜ける。

山道を抜けた先に待っていたものは、物々しい石の階段だった。

セイバーは躊躇う事無く長い階段を駆け上がった。

そうして頂上

あと僅かで山門に至るという時

その者は現れた

「こんな夜中に何用かなセイバー？」

「アヴェンジャー……」

そこに佇んでいたのはバーサーカー戦の時に戦闘に介入してきた復讐者のサーヴァントだった

「その様子では、暢気に話し合いをするって訳じゃないな……」
「応同盟中故に理由を聞こう」

「貴様に言う必要はない　サーヴァントが対峙する時それは聖杯を巡って戦い合うのみ」

「そうか……なら仕方ない、士郎には悪いがみすみす倒される訳にもいかないからな」

「では、はじめましょうか……」

「丁度いい、サーヴァント随一と言われるその剣技、しかと見せてもらおう」

アヴェンジャーはお馴染みの武装を展開し草薙の剣を構えセイバーは不可視の剣を構えそして
銀光がはねる
あまりにも異なる剣士の戦いは、月光の下で口火を切った

風王結界

胸が焼けるような痛みで目を覚ました。

「・・・なんだ・・・胸が、痛い・・・」

・・・何か、不吉な夢を見た気がする。まるで誰かが戦っていたような・・・

妙な不安に駆られセイバーを起こしに来た。

「セイバー、いるか・・・!?!」

襖を開けて、セイバーの部屋に駆け込む。

「・・・いない。アイツ、まさか」

いや、まさかも何もあるもんか。

ここにいないって事は、アイツ・・・一人で柳洞寺に乗り込んでいたのか・・・!

「バカ野郎、なんで・・・! 体だって治りきってないのに、どうしてわざわざ!」

俺はただ、セイバーを傷つけたくなかったただけだっていうのに・・・!

「くっ・・・!!」

嘆いていても始まらない。

今からでも柳洞寺に急がないと。
セイバーとアヴェンジャーを戦わせるなんて出来ない、そう思っている

「士郎。何かあったの？」

遠坂が異変に気づき起きてきた

「セイバーが一人でアヴェンジャーを倒しに行ってしまったんだ」

しかし遠坂はこの事態を予測していたらしい

「まずいわね。いくらセイバーでも今の状態じゃ、アヴェンジャーにやられるわ」

いくら同盟中でも、命の危険に晒されては反撃してくるだろう

「アーチャー。出てきて」

遠坂が言うと、隣りに赤い外套を着たアーチャーが現れた。

「アーチャー。士郎と一緒にセイバーを止めてきて、士郎一人じゃ危険だわ」

「・・・了解した。では、一足先に行ってくる」

遠坂が指示するとアーチャーは走り出し、そして塀を飛び越え見えなくなった。

「じゃあ、俺もすぐに向かう」

「ええ、アーチャーも万全とは言えないけど戦いを止める事ぐらいは出来るはずよ」

「ああもう、セイバーめ・・・女の子なんだからもうちょっと大人しくしてろってんだ・・・!」

着替えもせず外に飛び出て、玄関近くにあつた自転車を担ぎ出して、全速力でこぎだした。

切っ先が交差する。

幾重にも振るわれる剣線。

幾重もの太刀筋。

弾け、火花を散らしあう剣と剣。

数十合を越える立ち合いは、しかし、一向に両者の立場を変動させない。

上段に位置したアヴェンジャーは一步も引く事なく、セイバーは一步も詰め寄る事が出来ず徒に時間と氣力を削^{いたす}っていた。

「は・・・!」

数十回目となるセイバーの踏み込み。

対するアヴェンジャーは剣を受け流しそのスキを狙い反撃する、しかしセイバーはその一撃を紙一重で攻撃をかわす。

セイバーの剣が稲妻なら、アヴェンジャーの剣は疾風だった。

直線的なセイバーの剣筋に対し、アヴェンジャーの剣筋は曲線を描く。

「くっ……！」

気が付けば、数段後退していた。

卓越した敵の技量と、絶対的に不利な足場。

ここが平地であつたのなら、これほど苦戦する事もない、とセイバーは唇を噛む

「……さすがにやりにくいな。視えない剣がこれほど厄介とは思わなかった」

「……あなたもわたしの動きを読んでくるその秘密は恐らくその魔眼の力によるものでしょうね」

「たしかにこの写輪眼は相手の動きを驚異的な洞察眼で先読みできる力がある、他にも催眠や幻術を掛ける事もできるがおまえには効かないようだ、まあ今はその不可視の剣が一番の脅威だな……」

今までアヴェンジャーの剣戟を防げたのは、偏にこの剣のお陰なのだ。

不可視の剣は攻め込むにも受けに回るにも、相手の感覚を狂わせる。故にアヴェンジャーは深く追撃はしない。

だがそれも終わりに近ずいていた、なぜなら

「さて、もういい頃合だぜセイバー？ いい加減、手の内を隠すのよせ」

「……アヴェンジャー。わたしが貴方に手加減しているとでも」

「していないとも言つのか？ 何のつもりは知らないが、剣を鞘に

収めたままで戦うとは舐められたものだ。俺程度では、本気を出すまでもないという事か」

「・・・・・・・・」

「ふん。それでも応じないという顔だな。……いいだろうおまえが出し惜しみをするなら、先に俺の技を見せよう」

そう告げて。

アヴェンジャーはゆつくりと剣を構えた。

「構えろよ。でないと死ぬぞ、セイバー」

さらりとしたその声に、セイバーの直感が反応した。

「く・・・・・・・・！」

咄嗟に視えざる剣を構える。

躊躇している暇などない、アヴェンジャーがその技を出す前に、己が剣を打ち込めばいいだけの話・・・

「ふ・・・・・・・・」

両者の間合いは三メートル弱。

それは。

この戦いが始まって以来、見せた事もない剣士の殺気。

「唸れ・・・・・・・・」

セイバーは踏み込む、だが

「・・・千鳥刀」

剣に稲妻が見えた気がした

「っ・・・！！！」

咄嗟に、直感だけに任せて、セイバーは石段を転がり落ちた。
逃げるように転がり落ちる。

受け身も何もない。

セイバーはただ必死に体を倒し勢いを殺さずに階段を転がり落ちた。

「く・・・！」

落下を止め、体を起こすセイバー！。

その視線の先には、悠然と佇む剣士だけがある。

「ほう。かわしたか、騙されと思ったがさすがはセイバー、最優
と言われる事はある」

「・・・今のは、まさか」

「なに、そう大した事はない、ただ触れればしばらく痺れるだけの
技だ」

それはつまり触れた瞬間に動けなくなること、まさに防御不
可の攻撃

「・・・なるほど。確かに、手加減など許される相手ではなかった
ようだ」

両手を下段に。

視えない剣を地に突きつけるように下げ、セイバーは歩み寄る、アヴェンジャーを睨む。

「ほう・・・？そうか、ようやくその気になったかセイバー」

「ならば、我が一撃、受けきれるかアヴェンジャーのサーヴァント・・・！」

セイバーは自らの枷を解いた。

大気が震える。

剣は彼女の意味に呼応するかのように、大量の風を吐き出した。

「く・・・！」

わずかに後退するアヴェンジャー。

セイバーから放たれる風圧は尋常ではない。

アヴェンジャーばかりか堅固な山門の木々さえも震え、軋んでいる。

それは、爆発に近い風の流れだった。

密閉された大気が開放され、四方に吹き飛ぶ。

人間の一人や二人などたやすく吹き飛ばす列風は、セイバーに剣から放出されている。

それが彼女の剣の力。

風王結界とは、その名の通り風を封じた剣である。

圧縮された風を纏う剣は、光の屈折角度を変貌させ剣を透明に見せていた。

解き放された空気は逃げ場を求め、無秩序に周囲に発散する。

・・・その合間。

吹き荒ぶ風を自在に操る事が、彼女の剣に掛けられた戒めの魔術である。

「・・・ふん。さながら台風と言った所だな」

吹き荒ぶ風の勢いは収まりそうにない。

セイバーの剣から放たれる風は、今まさにアヴェンジャーを呑み込もうと鎌首をもたげていた。

「ならば、こちら奥の手を出しましょう」

目を潰す列風の中、アヴェンジャーは剣を掲げた、すると膨大な魔力が剣に集約され刀身が碧色に変化した、そしてその瞬間に大気が揺れた。

さながらセイバーは台風、アヴェンジャーは地震のようだ

「・・・・・・・・」

セイバーとアヴェンジャーの腕が動く。

全身を許さぬ強風の中、悠然と歩を進めるアヴェンジャーを迎撃しようとする

風を巻いた剣が唸りをあげようとしていた。

風王結界（後書き）

セイバールートを中心に所々で凜や桜のルートを合わせたいと思います！

理想を抱いて溺死しろ

「なんだ、アレ・・・!？」

柳洞寺に着いた俺を迎えたのは、台風じみた風の音と唸るような振動だった。

「セイバー・・・だよな、あそこにいるの」

階段の上、山門の前にはセイバーらしき鎧姿と黒い外套姿のアヴェンジャー、そしてセイバーから少し離れた中段の所にアーチャーがいた。

風はセイバーを中心に渦巻いており、木々はセイバーに押されるようにぎしぎしと軋んでいる。

「ちよっ・・・くそ、近ずけるのかよこれ・・・それにしても何でアーチャーは戦いを止めないんだ」

無然としてアーチャーを睨むがあまりの突風に目を開けていられない。

俯いたままなんとか階段の中段まで近寄ったものの、風は更に強くなっていく。

「だめだ、これじゃ・・・」

セイバーに近づけない。

遙か上空、セイバーとアヴェンジャーが戦っているのが見えるっていうのに、何もできない。

いや、そもそもこんな風の中でセイバーの近くまで行っても、足手

まといになるだけ・・・ならば！

「おい、アーチャー」

同じ中段にいるアーチャーに声を掛けた」

「セイバーとアヴェンジャーを止めてくれ」

「・・・断わる」

「な・・・！」

「少なくともサーヴァントが一人脱落してくれるんだ、こんな嬉しい事はない」

「おまえ・・・！」

「何を怒っている、それが聖杯戦争のルールだろう まったく凜も甘いな、衛宮士郎などという未熟なマスターを仲間に引き入れた為にこんな絶好の機会をみすみす逃すとは、セイバーには同情するよ」

「・・・今、判った。」

俺はこいつが嫌いだ、言峰とは違った意味で肌に合わない

「ああ、そうかよ、ならそこで勝手にしている！」

そう言つて、アーチャーに背を向ける。
そこへ。

「そうか。なら勝手にさせてもらおう」

氷のような殺気が、真後ろから放たれた。

「・・・なに？」

振り向きざまに飛び退くのと、アーチャーの短剣が一閃したのは、まったくの同時だった

「あ・・・ぐっ・・・？」

肩口から袈裟に斬られた感触。

ドポドポと流れ落ちる血と、気を抜けば一瞬にして消えそうな意識。

「は・・・あ」

よろよろと後退する。

逃げよう、としての事じゃない

ただ力が入らず、倒れようとする体をこらえようと、足が後ろに流れるだけ。

「お、おまえ・・・」

「外したか。殺気を抑えられなかった私の落ち度か、咄嗟に反応したおまえの機転か・・・まあ、どちらでも構わないが」

俺の血に塗れた短剣を手に、アーチャーが歩み寄ってくる。

「あ・・・ぐっ・・・！」

殺される。

殺されると直感して、懸命に階段を登った。
階段に至る山門を目指して、後ろ歩きのまま、よろよろと後退して
いく。

「・・・・・・・・」

・・・これが致命傷だと判っているのか。
ヤツは慌てた風もなく、ゆっくりと歩いてくる。

「はっ・・・・・・・・あ、あ・・・・・・・・！」

気が遠くなる。

自分が何をしているのか分からない。

何を思つて山門を目指しているのか、どうして自分が斬られたのか、
そのあたりの意思が、血液と一緒にだらだらと流れていく。

「あ・・・・・・・・」

「最後だ。戦う意義のない衛宮士郎はここで死ね」

剣が上がる。

白い陰剣が、断頭台のように掲げられる。

「な・・・・・・・・戦う・・・・・・・・意義、だつて・・・・・・・・？」

「そうだ。自分の為ではなく誰かの為に戦うなど、ただの偽善だ。
あまえが望むものは勝利ではなく平和だろう・・・・・・・・そんなもの、こ
の世の何処にも、有はしないというのにな」

「な・・・・・・・・んだ、と」

消えかける意識で、アーチャーの言葉に抵抗する。
だがもう、体も心も消えかけていた。

「・・・さらばだ。理想を抱いて溺死しろ」

憎しみの籠もった声。

迫る陰剣莫耶。

もう一度袈裟に振り落とされた剣は、完全にこの体を断とうとする。

・・・その直前。

激突する刃と刃。

・・・閃光のような迎撃。

割って入った刃はアーチャーの剣を受け流し

そのまま宙に跳んだアーチャーの首を断ちに行く・・・！

「人がせつかく死合っているのに水を挿すなよ、アーチャー？」

「っ・・・！アヴェンジャー、貴様・・・！」

身を捻って石段に着地するアーチャー。

赤い外套の騎士は同じく黒い外套のサーヴァントに阻まれ、近づく
事が出来ないでいた。

「シロウ・・・！」

倒れ込んだ俺のそばで聞き間違えようのない声がした。

「・・・セイ、バー・・・？」

「シロウ、しっかり・・・！」

彼女らしからぬ切迫した声で、セイバーは俺の体を支え起こす。

「すみませんでした、わたしが命に背いたばかりにこのような傷を負わせてしまうとは」

「い、い・・・いいから、セイ、バー」

「黙って・・・！まだ間に合います、シロウの回復量ならこのまますぐに帰還すればまだ助かります」

セイバーが俺を抱えようとしていると

「邪魔をするつもりか、アヴェンジャー」

アーチャーは双剣を構え、アヴェンジャーのサーヴァントと対峙する。

それを前にして、アヴェンジャーは何事もなかったように切っ先を上げた。

「それはこちらの台詞だ。人がせつかく奥の手を出そうと言う時に知人を殺されては、興が冷める」

「ふん、サーヴァント風情が人間らしい事を言うじゃないか」

「なあに、俺は、普通のサーヴァントとは少し違うのでな・・・セイバー、早く行け、今日の事は夢でも見ていたという事にしておこう」

「アヴェンジャー・・・恩にきます」

そしてセイバーは士郎を抱えて柳洞寺を離脱しようとしたが、アーチャーの殺気を浴びで迂闊に動けなくなった。

「さて、アーチャーよ、どうする？このまま戦りあうか、まあ同盟の事もあるしこのまま見逃してやってもいいぞ」

「よく言った、セイバーに傷一つ付けられなかった貴様が、このオレと戦うと？」

「貴様こそ、慢心して手負いの男一人殺せないとは、失望したぞアーチャー？」

向き合ったのはほんの一瞬。

両者の間には、目を張るほどの剣戟が繰り広げられていた。

「・・・・・・・・」

その光景に目を奪われる。

アヴェンジャーの剣筋は、まさに疾風。

多少は心得がある程度の俺の目では、もはや速いだの鋭いだのといった次元の問題ではなかった。

だが・・・・だからこそ、ヤツの剣舞に見惚れたのだ。舞うような双剣の軌跡。

俺では理解できないアヴェンジャーの太刀筋を、俺でもなんとか届きそうな技量で、アーチャーは対抗していた。

才能や天武の物に左右されない、鉄に意思で鍛え上げられた技量だけで、ヤツはアヴェンジャーと鬨ぎあっている。

「・・・・シロウ、今のうちに。どちらにせよ、貴方の体を早く休ま

せなければ」

セイバーの声で我に返る。

セイバーに抱えられる形で柳洞寺を後にする。

背後には、止む事のない、アヴェンジャーとアーチャーの剣戟が響いていた。

自己封印・暗黒神殿

家に戻ってくる頃には、傷はほとんど塞がっていた。

”セイバーと繋がってるから、セイバーの治癒能力が付いてきているんじゃない？”

という遠坂の意見は正しいのか、セイバーと触れていると傷の治りは目に見えて速かった。

「それで、一体なにがあつたというのですか、シロウ」

傷の手当を終え、道場に移った途端、セイバーは説明を求めた。出来るだけ要点をまとめて話す。

説明を終えるとセイバーは申し訳なさそうに

「・・・そうでしたか。やはりわたしの性で怪我を負ってしまったわけです」

「いや、セイバーは俺の為に戦ってくれただけで、この怪我は俺の油断が招いたんだセイバーの性じゃないよ・・・でもこれで判った、俺は弱い、こんな事じゃセイバーを守るなんて口先だけだ、だからセイバー、俺に剣を教えてくれないか」

「え・・・あ、はい。シロウがそう言うのでしたら構いません、わたしとしてもマスターが自分の身を守るなら気兼ねなく戦えます」

よし、セイバーに師事できるのなら足手まといにはならない筈だ。今夜のような失態は繰り返させないし、逃げるだけというのも性に合わない。

そう考えながら静に夜が明けていった。

2月6日

朝から妙な夢を見た

無限の荒野に剣が刺さっておりふと自分を見ると体が剣になっていたと言う夢を見たが気にせず朝食を作っていると

「おはよう、士郎・・・その」

居間に遠坂がやって来た、妙によそよそしいが寝不足か？

「ああ、おはよう遠坂、早いな朝飯はまだしばらく掛かるから顔でも洗ってこいよ」

「・・・ごめんなさい、昨日の事アーチャーから聞いたわ」

「そうか・・・あいつよく遠坂に報告したな、てつきり黙ったままかと思っただが」

「アイツが傷だらけで帰って来て魔力が空だったら事情くらい聞いわ、アイツ嘘が嫌いみたいで素直に白状したわ、なんでも敵は少ない方がいいだって、だからアーチャーには令呪を使つといたから」

「遠坂。それは、つまり」

「・・・ええ。協力関係にある限り、絶対に士郎を襲うなって令呪で命令したわ。今後は昨日みたいな事は起きないと思うから・・・ごめん」

そういつて遠坂を頂垂れた
明らかに落ち込んでいた

「そうか。けど、それは遠坂が謝る事じゃないだろう。アレは、アイツが勝手にやった事だ。遠坂だってアイツの考えが全て判るって訳でもないだろう？だから気にするな、そんなの遠坂らしくないぞ」

「・・・ありがとう、やさしいのね、士郎」

「よ、よせよ、照れるだろ」

いつもと違いしおらしい遠坂に顔を赤めながら朝食を作った。

朝食後、遠坂は先に学校に行き俺は道場でセイバーと竹刀を合わせ
ていた。

響き渡る竹刀の音。

夢中になっている内に時計は八時を指している。

セイバーと打ち合いを始めて、気が付けば一時間が経っていた。

思いの他、体がセイバーの竹刀に反応してくれた分、興が乗って時間
を忘れてしまった。

セイバーが言うには、アーチャーの動きを真似している為、シロウ
の技量が上がっているとの事だ・・・まあセイバーにしてみたら敵
のサーヴァントを師と仰いだ事に若干不満をこぼしたが強くなるな
らとしぶしぶ納得した。

一時間遅れで登校する。

教室に入り自分の席に向かうと

「やあ。随分と遅い到着だね」

と、愛想のいい笑みを浮かべた慎二が声を掛けてきた。

「慎二？どうしたんだよ、あまえどっかヘンだぞ。寝不足か？」

素直な感想を口にした。

「っ・・・・・・・・」

一転して睨んでくる・・・・かと思えばまた笑う。
明らかに様子がヘンだった。

「大丈夫か慎二、昨日の話し合いの事ならすまなかった。遠坂とは手を組んでるから昨日は断わったけど聖杯戦争ではお互い正々堂々戦おう」

「・・・・勘違いするなよな。遠坂と手を組んだ所でお前が強いつて訳じゃない、いくらセイバーを引いたからってあまり調子に乗るなよ」

慎二はじろじろと睨み付けてくる。

その様子は、いつもと違ってあまりにも余裕がない。

「まあいい、君が来てくれてよかったよ。ほら、衛宮が来ないんじゃないさ、面白みに欠けるだろ」

それが言いたかったのか、慎二はクスクスと笑いながら、自分の席

に戻っていった。

昼休みになって弁当を食べようとしたらなにやらクラスが騒がしいので視線を向けると廊下に遠坂の姿を見かけた

遠坂は目に見えて不機嫌な顔をしていた、教室ではクラスメートが口早に

・・・「2Aの遠坂だよな」・・・「さりげなく、しかし大胆に教室を覗いているぞ」・・・「ありやイライラしてるね」・・・「待ち人来たらずというより、待ち人気づかずというところだな」・・・

などと、うちの男どもは言いたい放題言ってる。

「・・・・・・・・」

恐る恐る、もう一度、遠坂に視線を送る。

・・・・・・・・怒ってる。

さて。

どうしよう？

結局、後が恐いので遠坂に話しかけた

遠坂は怒りながら昨日のお詫びとして屋上でお昼をご馳走するそうだ
断わる理由も無かったので屋上に行く

寒い風が体に当たる、しかしなんとか我慢できるレベルなので、そのまま昼飯を食べ終わる

と、慎二の事を思い出し朝の事を話すと遠坂はあっけからんと

「今朝、慎二の方から話しかけてきたのよ。そしたら、二人で手を組まないかって言ってきたの」

悪い予感がしてきた

「それで、どう返事したんだ・・・」

「どうも何も、当然断わったわ。・・・だっていうのにあいつ、しつこく食い下がってくるんだもの。だから一発殴って、つい、士郎がいるから間桐くんはいらないって言っちゃった」

あははー、と楽しげに語る遠坂。

「・・・・・・・・」

慎二のヤツがどこかおかしかったのは、それが原因だろう、だとしたら

「まずいんじゃないか、学校の結界は慎二のサーヴァントが張っているんだろ、アイツ逆上して結界を発動させるんじゃないのか」

「・・・・・・・・え？」

遠坂の動きが止まる。

そしてその顔が見る見る青くなっていく。

すぐさま立ち上がり、出口を睨む遠坂。

その瞬間。

まるで計ったかのように結界が発現した。

「結界・・・！」

赤く染まった空。

学校の敷地を包む、赤い空気は、吸い込むだけで意識を麻痺させよ

うとする。

「遠坂・・・！」

「わかってる。急ぐわよ士郎！」

屋上の扉を開け、階段を下りた先には

血のように赤い廊下。

血のように赤い空気。

とにかく、階段に一番近い教室に飛び込んだ。

・・・教室に起きている人間はいなかった。

かろうじて全員に息があつた。

一刻も早くこの事態を收拾する為に令呪でセイバーを呼ぶ事にした。
令呪の使い方を遠坂に教えてもらい

「・・・頼む。来い、セイバーーーーー！！！！！」

躊躇なく、左手の令呪を開放した。

同時にすぐ真横に異様な重さを感じ取り、その重い”歪み”から、
銀色の騎士が出現した。

「セイバー・・・！」

「召喚に応じ参上しました。マスター状況は・・・？」

「・・・見ての通りだ、サーヴァントに結界を張られた。一秒でも
早くこいつを消去したい」

「承知しました。リン、アーチャーは呼べないのですか、彼がいれ

ば打開策を教えてくださいるはずですよ」

「・・・駄目みたい、この結界に遮断されて連絡が取れないみたいなの」

「そうですね・・・シロウ、以前アヴェンジャーから貰ったという通信手段はどうですか」

「分かった、試してみよう」

もしもの時の為に身に付けておいた巻物を取り出した
そして巻物を広げると奇妙な術式が書かれていた、その中心に丸い円がありそこがこの術式の基盤らしいので手を置き魔力を通わすと頭の中で声がした

『どうした・・・俺を呼ぶなんてよっぼどの事か？』

「アヴェンジャー！よかった繋がったらしいな、急いで学校に来れるか？」

『・・・よほど、切迫した状況らしいな、よし、早くて三分でそこらに着くだろう』

「本当か！急いでるんだ、とにかく早くしてくれ」

『そう急かすな、こっちは柳洞寺にいるんだ、地上を移動するんだからどうしても時間が掛かる、だから先に行ってくれ必ず合流する』

「ああ、頼んだぞ、アヴェンジャー」

そうして連絡を終えると同時に遠坂が相手の居所を掴んだらしい

「アヴェンジャーは三分後に到着するそうだ、だから俺達は先にライダーと戦おう」

「分かったわ、結界の基点は一階にあるから、恐らくライダーはそこにいるはず」

「では、行きましょう。シロウ、リン、わたしが先頭を勤めます」

セイバーは先頭に立ち廊下に出た、その後続くように俺と遠坂は移動した

階段を駆け下り一階にたどり着くと短剣が飛んで来たすかさずセイバーが迎撃した

そして廊下には慎二とライダー、そして気を失った桜が慎二に抱えられていた

それを見た瞬間、頭が沸騰しそうな怒りを覚えた

関係ない桜を人質に取り聖杯戦争に巻き込んだ事は許せないが、もっと許せないのは妹を盾にしている慎二がうすら笑いを浮かべている事が我慢できなかった

「慎二！桜をどうするつもりだ、妹を盾にするなんて正気か！」

「黙れよ衛宮！この僕に恥をかかせた報いを受けてもらおうか、なあに桜は保険さ、遠坂に邪魔されたらかなわないしさ、お前も分かっているよな、抵抗したら桜の身の保障はしないぜ」

「間桐くん・・・あなた最低ね、桜を人質にしないとまともに勝負もできないの」

「遠坂！お前は黙ってる、僕は衛宮と話してるんだ、そこで大人しくしている」

「・・・慎二・・・桜を離して結界を止める」

「はあー、なんで僕に命令してるわけ。お前はそこで動くなよ、抵抗したら桜がどうなっても知らないぞ」

「・・・最後の忠告だ・・・桜を離せ、そして結界を止める」

「いやだね、お前が僕に命令する限り絶対に聞くものか ライダー、衛宮を可愛がってやれ。衛宮のサーヴァントと遠坂は其処を動くなよ」

セイバーと遠坂は桜を案じて動けなかった、俺は慎二のライダーにボコボコにされたがなんとか持ちこたえたがライダーが短剣を取り出した

どうやら止めを刺すつもりようだ、セイバーが助けに入ろうとするのを手で制した、そしてライダーの短刀が俺に振り落とされる寸前、窓を破って一人の男が乱入した。

突然の乱入者にライダーと慎二が驚いていると男は素早く慎二を殴り飛ばし桜を救出した

「よう、生きてるか、と。そんな事言ってる場合じゃないな、ライダー、マスターの命が惜しいならこの結界を解除してもらおうか」

「ひ・・・ライダー！！ブラッドフォートを止める、僕の命が最優先だ」

慎二に剣を当てると、ライダーは何事か呟くと赤い空気が消えてい

く、どうやら結界を解いたようだ、そう安心しているとライダーが
凄いいスピードで慎二と桜を抱えて廊下の後方に下がった。

「ら・・・ライダー・・・お前・・・なににおめおめと逃げてるんだよ、
さつさとあいつらを殺せ」

「・・・そのつもりです・・・あなたと桜を私の宝具に巻き込ませ
るわけにはいきませんので大人しくしてください」

「気を付けてください、ライダーは結界に使った魔力を開放するつ
もりです」

セイバーが叫ぶとライダーの腕が上がった。

アヴェンジャーとの間合いは四メートル。セイバーは八メートルだ。
それだけの距離を保ったまま、黒いサーヴァントは自らの顔に手を
掛け

その黒い封印を排除した。

「・・・瞬間、全てが凝固した。」

ライダーの裸眼。

それは数ある魔眼の中でも最高位に属する、”ヒトならざる”眼”だ
った。

灰色の眼

水晶細工とさえ取れるソレは眼球というには異質すぎた。

光を宿さない角膜。

四角く外界を繋ぐ瞳孔。

虹彩は凝固し、眼を閉ざす事はできなかった。

ライダーの瞳を見たアヴェンジャーは手足が石化し始めていたがま
だなんとか動けるようだ。

「くっ……俺と同じ特殊な眼か……写輪眼でも進行を遅らせるのが限界か……」

セイバーは自身の対魔力で石化はしていないが動きが明らかに低下していた

「こ、これは……石化の魔眼^{キュベレイ}か!？」

油断してはいなかった。

油断していなかったからこそ、”それ”をまともに見てしまった。

二人とも明らかに魔眼の影響下に囚われている。

動きに精彩を欠いている。

彼女の瞳は最高クラスの石化の魔眼だ

いくらセイバーとアヴェンジャーでも動きの鈍化はさけられない

「驚きましたか?これが私の宝具”自己封印・暗黒神殿”^{フレイカー・ユルゴーン}です、そして特別に私のもう一つの宝具を見せてあげましょう」

するとライダーは短刀を取り出しいきなり自分の首に短剣を付きたてた、そこから大量の血を吹き出し飛び散ったはずの血が一箇所に集まりだしている、そして集まった血が形を作る。

幾何学な模様や呪文で構成された円形の図形……魔法陣。

しかも、魔法陣に魔力が流れ込んでいる。

ただ事ではない魔力量だ。

そして次の瞬間……何か白い光が放出され駆け抜けた。

自己封印・暗黒神殿（後書き）

これからストーリーをまとめたりするので更新が不定期になるかもしれません。ご迷惑をお掛けしてすいません！！

対軍宝具（前書き）

更新が遅れて申し訳ございません！ストーリーの思案と仕事を立て込んでしばらくは不定期になると思われますのでご了承ください。

対軍宝具

巨大な光の矢じみたものが、とてつもないスピードで廊下を駆け抜けていった。

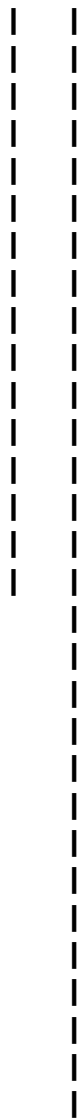
全員がなんとか床に伏せ、その閃光に眼を瞑っていた。

閃光が止み静に目を開けると、そこにあっただのは無残な破壊の跡だった。

廊下には慎二とライダーの姿はない

・・・今の光は俺達を狙ったものではなく、あくまでここから離脱する為だけの物だったらしい、桜の姿もないのでまた人質として利用するつもりなのだろう。

一刻も早く後を追わなければならないと言う時に全身が全く動かない、それと同時に石化の影響で意識は、そのまま白い闇に落ちていった。



2月7日

「・・・・・・・・」

・・・目を開けると、そこは見慣れた居間だった。

外を見てみると太陽が沈み辺りは夕方になっていた。
体を起こす。

時計は六時を回っていた。

まだ頭がふらふらしていたがふと学校の事を思い出した、日付けを見るとどうやらあれから二十四時間以上経っているようだ。

「どんだけ気を失っていたんだ・・・そうだ、学校は!？」

と、慌てて頭を切り替えると

「学校は!？じゃないわよ、この恩知らず。目が覚めたらまず言うべき事があるんじゃないの！」

俺の傍らには軽い癇癪を起こした赤い悪魔がいた。

「と・・・遠坂。いたのか・・・」

「いたのか、じゃないわよ。アンタの真横でずっと看病してやったのに、随分な態度じゃない」

(・・・そうだったのか。それは悪い事をしてしまったな)

「すまない・・・とにかくありがとう、遠坂。またおまえの世話になっちまった」

「っ・・・ま、まあ別に大した事じゃないからいいけど・・・」

何故か顔を赤らめながら俯いていたが

「士郎もあの石化の影響でずいぶん長く気を失っていたから心配するのも当然よ」

そして、すぐにいつもの調子に戻っていたが俺には先に聞きたい事があった

「遠坂、学校はどうなったんだ!？」

「大丈夫、みんなの事は安心なさい。学校には綺礼がフォローにいったから、あれでも神職なんだしこれくらいさせなきゃバチが当たるでしょ」

「・・・あいつが？それじゃあ、学校の方は」

「大事にはなっていないわ。みんな二、三日病院で休む程度だって」

「そうか、良かった・・・」

安心した途端、全身から力が抜けた。

「・・・そういえば、セイバーとアヴェンジャーはどうしたんだ？」

「セイバーは部屋で待機してるわ、アヴェンジャーはさっさと柳洞寺に引き上げていったわね」

「そうか・・・アヴェンジャーには礼を言わないとな、あそこでアヴェンジャーが乱入しなかったら俺はライダーに殺されていたかもしれないしさ」

「なに言ってるのよ、いつか敵になるんだからこれくらい役に立つてもらわないと割りに合わないわよ」

「はは・・・きついな遠坂は・・・」

と、相槌を打つ

だが今は当面の敵である慎二とライダー、そして桜の事が気がかりだ意識が戻ったとはいえ、体はまだ少しだるい感じするのでまだ全快

ではないのだろう

それにまた桜を人質に使うかもしれないのだ、慎二との決着は一日でも早くつけなければならぬ。

慎二は躊躇なくあの結界を発動させた。

そんなマスターを野放しにする事がどれほど危険かは俺にだって判っている。

だからこそ・・・俺は慎二を放っておく事は出来ない。

「遠坂、俺は慎二を捜す、手伝ってくれないか」

「慎二を捜す・・・？別に文句はないけど、ちゃんと勝ち目があつて言ってるんでしょうね」

「ああ、基本的には昨日と一緒にまず慎二を抑えるのが得策だ、もし桜を人質にしたらまた不意を付いて桜を助ける、もしくはライダーを一気に倒すのがいいと思うんだが」

「ちょっと、石化の魔眼の事を忘れたの、アレの前じゃいくらサーヴァントでも動きが制限されるわ、それじゃあ昨日の繰り返しじゃない」

「一応対策も考えてあるんだが、それには遠坂の協力が不可欠なんだ」

「私の協力・・・？」

「昨日はアヴェンジャーが不意を付いたから有利になった、だから今回はアーチャーに協力してもらうのが一番なんだ」

「アーチャーを？・・・そうね、アイツの狙撃ならライダーの石化

も届かないから効果的にダメージを与えられるし不意も付けるわね」

「ああ、だが問題はライダーの居場所と宝具だな、遠坂はアレが何なのか判るか？」

「残念だけど私も解らないわ」

「そうか・・・困ったな・・・」

と、考え込んでいるとセイバーが居間にやって来た

「シロウ、目が覚めたのですか・・・？」

「ああ、いま目が覚めたんだ。セイバーも怪我がなくて安心したよ」

「はい、ライダーの宝具は離脱を最優先にした為わたし達は無傷でした、恐らくあの場所では不利と悟ったのでしよう」

「そうだ、セイバーは近くで宝具を見たんだからアレの正体は判るか？」

「・・・面目ありません、わたしも避けるのに精一杯でアレがなんであるか確認する事はできませんでした・・・予想ですがアレは瞬間的な攻撃力に特化した対軍宝具なのでしょう」

「対軍宝具？」

「ええ、サーヴァントは対人、対軍に優れた宝具を所持している事があります、対人宝具はわたしやランサーのような”人を倒す”事に優れた武器に事を言い、対軍宝具は回数や魔力消費の制限があり

ますが” 広範囲”と” 強力な破壊力” に優れた武器なのです、ですからライダーの宝具に対抗する為にはそれを上回る攻撃が防御が必要なのです」

「な……！」

ちよつと待て。

そんなデタラメな宝具の前では、勝負にならない

「……つまり。ライダーと戦うなら、宝具を使われる前に倒せて事か」

「でしょうね。だから戦いを長引かせるだけこちらが不利になるわ、それだけは覚えておかないとね」

「そうだな……セイバー、これから慎二とライダーを捜しに行くんだが来てくれるか」

「もちろんです、わたしは貴方の剣ですから」

「よし、遠坂はどうする。イヤなら無理強いはしないけど」

「……そうね、セカンドオーナーとして慎二は放っておけないわ、それに桜の事も心配だし、いいわ、協力しましょう」

「ありがとう、遠坂。後はアヴェンジャーが協力してくれれば万全だな、ちよつと連絡してみるよ」

すぐに巻物を開きアヴェンジャーと連絡を取った

『今度はなんだ、士郎・・・？』

すぐに連絡が付いてこれまでの事を話すと

『・・・悪いが、今回は断わる』

「え、なんでだ」

『はつきり言つて、俺とライダーの相性は最悪だ、それに今回はアーチャーが居るんだろう、なら俺が居なくても大丈夫なはずだ』

「・・・わかった、あんたには世話になりっぱなしだから無理強いはいしないよ、また何かあったら連絡するよ」

『・・・一つ忠告しておこう、もうすぐ俺の傷は完治する、だから俺を味方と考えない事だ。恐らく次に逢ったらもう敵同士だと言う事を忘れるな』

「そうか・・・だけど礼は言わせてくれ、俺はアヴェンジャーのお陰で何度も助かった、ありがとう」

『・・・』

「聖杯戦争ではお互い悔いのない戦いをしよう、じゃあ、またどこかで逢おう・・・」

『・・・待て、良い情報を提供してやる・・・ライダーの居場所だ』

「なんだって！何故アヴェンジャーがライダーの居場所を知ってるんだ」

『・・・俺のマスターは感知などの能力に優れているらしくてな、不思議な事にお前に連絡をもらう丁度一時間前に判明したそうだ』

（一時間前？タイミングが良すぎやしないか、それに感知だつて？魔力を持つているマスターなら判るが慎二は魔力を持っていないはずだ、ならサーヴァントの魔力を感知したのか・・・まあ、今はあれこれ考えるヒマはないな、それにしても疑問だな）

「何故、俺に教えるんだ？」

『一応まだ同盟中だしな、それに俺が持っていてもしようがない情報だ、なら役に立つ奴に渡した方が良いと判断しただけだ』

「恩に着るよ、アヴェンジャー、それでライダーは何処に居るんだ？」

『ああ、奴らの潜伏先は言峰教会の近くにある外人墓地に隠れているらしい、脱落者を匿う教会の近くはマスターが近寄らない、その事を逆手に取った正に盲点の場所だな』

「外人墓地・・・そこに慎二とライダーが・・・」

『俺からは以上だ、まあ、頑張ってくれ幸運を祈るよ、士郎』

「ありがとう、アヴェンジャー・・・ところで気になっていたんだがお前のマスターはアイザックさんなのか？」

『ふ、敵だと判った途端に情報収集か、お前も抜け目のない奴だ』

「ち、違う、本当に気になったただけだ、あの人はなんか不思議な感じの人だったから」

『まあいい、確かに俺のマスターは自称アイザックと名乗っているあの男だ』

「自称？偽名なのか」

『そうだ、お前に名乗った偽名が気に入ったらしくてな、今ではその名を呼ばないと怒り出す始末だ』

「そ・・そうか、大変だな・・あの人はとても魔術師に見えないから不思議だよ」

『それを言うならお前もだ、しかし、奴は謎が多い事は確かだな、ある意味奴の行動はお前を手助けをしている様に感じる時がある、まあ俺の思い過ごしかもしれないが・・さて、そろそろ終わりするか』

「ああ、助かったよアヴェンジャー、アイザックさんによろしくと言っといってくれ、じゃあな」

『ああ、また逢おう士郎』

そして、巻物を閉じた

この事をみんなに話そうと遠坂の顔を見ると何故か若干引いていた。

「あんた、端から見ると一人で巻物に向かってぶつぶつ独り言を零す変人みたいですよごく気味が悪かったわよ」

「な、誤解だ！お前分かってていつてるんだろう！」

「あははは、冗談よ、ちょっとからかっただけじゃないの」

しかし、当の本人は腹を抱えて笑っていた

とりあえず数分後、ひとしきり笑った後で遠坂は尋ねた

「それで、アヴェンジャーはどうだった」

多少気落ちしたが遠坂にアヴェンジャーの事を話すと

「ふーん。まあ、アイツは怪我が治るまでの契約だったし、ライダーの居場所を教えてくれただけでもめっけもんよ、まあ細かい事はライダーを倒した後で考えましよう」

「・・・そうだな、とにかく今は桜の安全と慎二を倒す事を優先しよう、じゃあ、外人墓地に行こうか」

「はい」

「ええ」

「（・・・・・・・・）」

そして、俺、セイバー、遠坂、アーチャーの四人は新都の外人墓地に向かった

対軍宝具（後書き）

最近文才が無くなったなあと思う今日この頃です、もしよかったら設定の矛盾やどこがおかしいと思われる所などがありましたら、是非お教えください。

偽・螺旋剣

慎二とライダーがいる外人墓地に向かう中、月の光に照らされた冬木大橋に差し掛かるうとした時

「アーチャー、そろそろ狙撃できる場所で待機して、私が合図するまで絶対に攻撃しちゃ駄目だからね、それじゃあ頼んだわよ」

「了解した、マスター」

アーチャーはそう言うところへと飛び去っていったがその途中で俺を見た、そしてその顔には意味深な笑みを浮かべていたがすぐにその姿は夜の闇で見えなくなった

「大丈夫よ士郎、令呪であなた達には攻撃できないから安心して」

「あ、ああ、今は桜の事を優先しよう」

アーチャーの笑みは気になるが今は戦いに集中しなくてはならない雑念を捨て、外人墓地へと急いだ。

墓地に到着すると間髪入れずに、ライダーの短剣が飛んできた

セイバーが素早く短剣を叩き落とすとライダーが姿を現した

ライダーはそのままセイバーと斬り合う

「よう、衛宮。よくこの場所が判ったな、その猟犬並みの嗅覚には僕でも勝てる気がしないよ」

暗闇から慎二のあざ笑う声が響くが暗くて場所が特定出来ないでい

た。

「答える慎二！桜は無事か」

「ああ、無事だとも、僕はやさしい兄貴なんだぜ、大事な妹を傷つけるわけないだろう」

「よくもまあ、どの口でいえるわね、間桐くん？」

「と・・遠坂！お前も来ていたのか」

「当然でしょ、私達は手を組んでいるんだし、冬木のセカンドオーナーとして間桐くんみたいな魔術師でもない一般人にこれ以上被害を出させる訳にはいかないしね」

「お・・お前まで僕を馬鹿にしゃがって！ライダー、こいつらを一人残らず殺せ」

暗闇で慎二の怒りの声が響く
冷静さを欠いた慎二が桜に何をするか判らない

「待て、慎二。桜はこの戦いに関係ないはずだ、だからここから開放してやってくれ」

「うるさい！偉そうに僕に命令するな！だいたい桜なんて人質にしてな・・・あ」

どうやら桜はここに居ないらしい、慎二は怒りのあまり自ら墓穴を掘ったようだ、これでなんの気兼ねなく慎二を倒せる

「セイバー。桜は無事だ、だから遠慮はいらないぞ」

セイバーはそれに答える様にライダーを切り伏せた
ライダーは血で魔方阵を出そうとするがそれよりも早く

「終わりだ、ライダー」

不可視の剣を構え、ライダーを断ち切ろうとした時

「……え、アーチャー……？離れろってどういう事……？」

首を傾げる遠坂の声と遙か遠くから向けられた殺気に気が付いた、
この殺気は以前感じたアーチャーの物だ
背後。

何百メートルと離れた場所、屋根の上で弓を構えるアーチャーの姿
を見た。

ヤツが構えているものは、弓だ。

なら、そんな物に脅威を感じる必要など……

だが、悪寒が止まらない。

ヤツが弓に添えているものは”矢”ではなく、もっと別の物であり。
その殺気の標的はライダーだけではない、そう感じた途端。

「セイバー……！……！……！……！……！」

気が付いていたら飛び出していた。

「ちよつ、待……」

遠坂の制止を無視して全力でセイバーへと走る。

「な、シロウ・・・！」

「話は後・・・！いいからこっち・・・」

セイバーを抱き寄せて、そのまま跳んだ。

・・・”矢”が放たれる。

だが、その刹那

「何物であれ、我が疾走を拒むことはできません、食らいなさい」
ベルレ・騎英・・・”」

ライダーは俺達に背を向け、全力で迫り来る”矢”を迎撃し・・・

・・・瞬間。

あらゆる音が失われた。

「っ・・・！！」

セイバーを地面に組み伏せ、ただ耐えた。

聴覚が麻痺したのか、何も聞こえない。

判るのは体を震わせる大気の振動と、肌を焦がす熱さ。

烈風で弾き飛ばされた様々の破片は四方に跳ね飛ばされ、ごっ、と
重い音を立てて、俺の背中にも突き刺さった。

「くっ・・・！！」

歯を食いしばって耐える。

白い閃光は、その実一瞬だったのだろう。
体はなんとか致命傷を受けずに、その破壊をやり過ごせた。

「な………」

俺の下で、セイバーは啞然とソレを見ている。
何が起きたのかは判らない。

ただ、アーチャーが放った”矢”によって墓地が一瞬にして炎上しただけ。

爆心地であつたろう地面は抉れ、クレーター状になっている。

それほどの破壊をアーチャーは巻き起こし。

クレーターにはライダーだった物がいたが、風に吹かれ光となって消えていった。

火が爆ぜる音だけが耳に入る。

このままでは大きな火事になる、と思った矢先。

「え………」

カラン、と硬い音をたてて、おかしい物が転がってきた。

「……剣………」

否、それは”矢”だった。

豪華な柄と螺旋状に捻れた刀身を持つ矢。

……たとえそれが剣であっても”矢”として使われたなら、それは矢だった。

「・・・・・・・・」

それが、どうしてそこまで気になったのか。
しかし、捻れた矢は、炎に溶けるように消えていった。

「・・・・シロウ、今は」

「・・・・アーチャーの矢だ。それ以外は判らない」

顔を上げ、遙か遠くのアーチャーに視線を移す。

見える筈がない。

見える筈がないというのに、確かに見た。

やつは口元を歪ていた。

狙ったのはライダーだけではない、と俺に見せ付ける様に笑ったのだ。

「あいつ・・・・！」

頭痛がする。

背筋に走る悪寒が止まらないが唐突に

「ひっ・・・・！」

暗闇から悲鳴が聞こえた。

声のした方を見る、そこには慎二と火が付き、今にも灰になっていく本が見えた。

「あ・・・あ、ああ・・・・！燃える、令呪が燃えちまう」

慎二はひきつりながら、それを見つめていた。

「・・・慎二」

「ひ・・・！は、あは・・・」

ライダーが倒され、自分の不利を悟ったのか。

慎二は俺の目から逃れるように背を向け、そのまま逃げ出した。

「まで、慎二・・・ぐ！」

急いで慎二の後を追おうとした瞬間、背中から焼けるような痛みが奔る。

「シロウ？どうしました、気分でも・・・シロウ、その背中は・・・！」

切迫したセイバーの声。

・・・この頭痛ほどじゃないにしろ、わりとハンパじゃない痛みが背中であざ打っている。

「・・・ひどい状態ですがシロウの回復力なら問題ないでしょう、しかし破片が体に残るといけないので抜き取ります、我慢してください」

「え・・・ちよつ、破片ってセイバー」

ズチュ・・・！

どうやら背中に刺さった破片とやらを、セイバーが強引に引き抜いてしまったらしい。

「あ……つ、この、乱暴、もの……」

想像を遥かに超える痛みが走るが、しばらくすると自然と傷が修復された

「士郎、無事？」

……遠坂が駆け寄ってくる。

それに一応無事だと手をあげて応えた。

「そう、無事でなによりね、それにしてもアーチャーの奴、令呪の事を忘れたのかしら」

多分それはないと思う。

確かに殺気はあったが以前ほどの強さはなかった。

あわよくば巻き込まれて倒れてくれれば僥倖と思っていたのだろう。

「まあ、とにかくここに長居は無用よ、ライダーも倒したし慎二も令呪がない今なら人畜無害でしょうから問題ないわ」

「そうだな、さっきの炎で人が集まる前に家に帰ろう」

「そうね、アーチャーには後でたっぷりお説教しなきゃ」

こうしてライダー戦を終えた俺達は岐路へと向かっていった

それは鉄を叩くような音だった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・！」

荒い息遣いのまま、彼「間桐真二」はその場所に訪れた。
彼は扉を開け放したまま、前のめりに倒れそうになる体に引かれるように前に通んでいく。

「あ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・！」

乱れた吐息と定まらない目線。

枯れ木のように震える四肢は、逃走者のそれに近い。
それもそのはず、彼はここに非難してきたのだ。

「戦いが始まって六日。ここに足を運んだのは君が始めてだな」

「・・・！」

地に這いかけていた体を起こす。

いつのまに現れたのか。

祭壇には神父がいた。

錯乱する彼の話をつなぎめると、彼は助けを求めているらしい。

つまりは保護だ。

サーヴァントを失ったマスターは戦いを放棄するという条件で保護を求める事ができる。

その避難場所、最後の守りがこの教会であり。

その主が言峰綺礼という神父だった。

「・・・では戦いを放棄するのか、少年」

「あ、あたりまえだ、僕に死ねていうのか・・・！いいか、サー

ヴァントがいらないんじゃないし、マスターなんてやつてられない・・・ぼ、僕は普通の人間なんだ、そうゆづのを狙ってさ、一方的に殺すなんて不公平じゃないか・・・！」

「・・・・・・・・」

神父は答えず、ただ敗北者を見据えている。

「・・・なんだよ、何か文句あるのかよ、おまえ」

「意見などない、君は我が教会始まって以来の使用者だ。管理者としてここに根付いた父に代わり、丁重にもてなそう」

「くそ、みつともない・・・ああ、それもこれもお前たちのせいだぞ・・・！ライダーなんてカスを掴ませやがって、あんまりにも不公平じゃないか！」

忌々しげに地を叩く。

神父はほう、と興味深そうに口元を緩ませた。

「では、ライダーは役に立たなかった、と？」

「そうだよ！・・・ったく、大口たたきやがって。アイツ、この僕があんなに手を貸してやったのに、あっけなく死にやがった。あれなら他のサーヴァントの方がよっぽど役に立ってたんだ！」

「・・・・・・・・」

「ああ、準備は万全だったんだ！だって言うのにあいつら、そろって邪魔しやがって・・・！二対一だぞ、そんなの勝ち目なんてない

じゃないか。・・・そうだ、負けたのは僕のせいじゃない。単にサーヴァントの質の差なんだ。それをあいつら・・・偉そうに勝ち誇った顔しやがって・・・くそ・・・くそ、くそ、くそ、くそ・・・
・！！！！」

繰り返す暗い吐露。

その中で・・・

かつん、と。

凍った空気を砕くように、神父の足音が響き渡った。

神父はゆったりと彼の肩に手を置く。

「・・・つまり。君はまだ、戦う覚悟はあるという事だな」

「え・・・？」

彼には神父の言葉が理解できない。

黒い聖職者は、口元に慇懃な笑みを浮かべたまま

「君は運がいい。ちょうど一人、手の空いているサーヴァントがいてね」

神父は悦びを押し殺すように、新たな救いを告げていた。

アーチャーとの激突（前書き）

またしばらくアヴェンジャーの視線に戻ります

アーチャーとの激突

「ああ、また逢おう士郎」

パスによる通信を終え、柳洞寺に静寂が戻る。

士郎からの連絡を受け、ライダー討伐の協力を断わったアヴェンジャーは静に外に出た

山門まで来ると外人墓地の付近を見つめる

俺の写輪眼は白眼の様に視力に優れていないが戦闘の光くらいは見えると思いい足を運んだが案の定、夜の闇とあまりにも遠い場所の光景など見える筈ないと思っっている

「士郎君達の事が気になりますか？」

声のした方を振り向くと山門の影に伊織もといアイザックが佇んでいた

「・・・いや、あいつらがどうやってライダーを倒すのか興味があるだけだ」

「そうでしたか・・・でも大丈夫です、士郎君達は勝ちますよ」

「何故そんな事が判る？」

「それは・・・秘密です」

伊織は、はぐらかす様に目を逸らした。

俺がサーヴァントになって二ヶ月間、こいつの元に居て分かった事がある

伊織はとにかく運がいいというか勘がいいというか、とにかくその行動が裏目に出ない

この柳洞寺や俺の怪我也まるで予想していたかの様な感覚がある更に不思議な事に士郎達に対しては相当入れ込んでいる節がある同盟の際は怪我を報告したら真っ先に手を組めと連絡したり

血の結界の際も士郎から連絡を受け伊織に許可を貰いに行こうとしたら口頭一番に「許可する、早く行け」とまだ事情を説明してないのにもう話の内容を知っていた

そして先ほどのライダーの居場所を俺に教えた一時間後に士郎から連絡を受けたなど、色々と怪しいが不思議な事に不快にはならなかった

「まあ、文句を言いたい所だが、その様子じゃ言っても仕方がないからな、だがいずれ話して貰うぞ」

「いいでしょう・・・いずれ、あなたにも言うべき時が来ます、それまで待っていてください」

「まったく、変なマスターに引き当てられたものだ」

そう嘆願していると

新都の冬木センタービルの屋上から一筋の光が墓地に向かって飛翔した

その光が墓地に着弾すると、ここからでも分かる程の爆発が起こり墓地の一部が炎上していた

「どうやら、終わったようですね」

「今の光は・・・アーチャーの狙撃か？」

「そうですね、あの威力ならライダーは即死でしょう」

「アーチャーか・・・あいつは得体が知れないな、おまえと同じで」

「ふふ、それは手厳しい」

実際、アーチャーは奇妙な所が多い

一度、手合わせしたから判る

あいつに剣の才能はない、どれだけ行っても二流止まり

アーチャーはおそらく弓の腕前だけは一流以上、だがほかの才能は一流に近づくことはできても決して一流にはなれない二流の域を超えられない。

セイバーや俺のように天武の才に恵まれた剣とはまったく違う。

無骨で、実戦の中で磨かれてきた技術だというのが良くわかる剣だ

二流のアーチャーが、俺と渡り合える理由。

それは、極限までその二流を極めたからだ。

誰でも行ける領域。

だが、そこに辿り着くのは奇跡の領域

それだけにアーチャーはこの英霊が気になるがこの世界に疎い俺では見当もつかない

「とにかく、あいつらと戦う覚悟だけはしておくか」

「・・・・・・そうですね、歴史が変わればそれも有り得ますね」

「・・・・まあいい今日は聞くだけ野暮だな」

軽口を叩きながら柳洞寺に帰ろうとすると

「おや、雑談はもういいのかね」

この場に違わぬ声がした、背後を振り向くとそこにいたのは赤い外套を着た弓兵がいた

「アーチャー・・・セイバー同様、何様かな」

「なに、私の噂話が聞こえたので相伴に預かろうと思ってな、それより其処に居られる御仁が君のマスターかね」

「・・・答える義理はないな」

アーチャーは皮肉そうに口元を歪めていたが伊織の放った言葉で態度が一変した

「なるほど、あなたがアーチャーですね・・・いや、此处では”錬鉄の英雄”と呼びましょうか」

「な！・・・貴様、私が誰なのか・・・」

「知っています。と言ったらどうします？」

「・・・なるほど、この聖杯戦争のイレギュラーの元凶は貴様が・・・私の知る聖杯戦争にアヴェンジャーなどと言うサーヴァントは居ないはずだと記憶していたが、まさか歴史を改竄できる者が居たとは予想できなかったよ・・・という事は私の目的も知っていると言っ事かな」

「ええ、大よそ見当が付きませんが今は手を出す気はありませんから安心してください」

「・・・そうか・・・なら、私が次を取る行動も知っているかな」

「さあ、私も万能ではありませんので未来なんて分かりませんよ」

「ならば、教えよう・・・おまえの未来は・・・」

《死だ》

ランサーを越える程の殺気を放ちアーチャーが肉薄する

アーチャーが双剣を携え、伊織を両断すると思われた刹那

「勝手に人のマスターを殺すなよ」

ガキン・・・と金属の鳴る音が響き

アーチャーの双剣は、同じ双剣で止められた

「アヴェンジャー！！！！其処を除いて貰おう、今日の私は阿修羅すら凌駕する存在だ、先日と同じとは思わない事だな！！」

「へえ、ずいぶんな変わりようだな、あんたはもつと冷静に物事を進めるタイプと思っていたが、こんな感情を出した戦いが出来るなんて俺の洞察力もまだまだだな」

「除けといっている！！オレの目的の為にその男はここで始末しなければならんだ！！！！」

アーチャーの連撃を小太刀で受け止めた、続けてアーチャーが双剣を手放し後方に跳んだ、どうやら接近戦は分が悪いと考え距離を取ったようだ、両者の距離は十メートルは離れていたがアーチャーは

元々弓兵だ、弓による攻撃に切り替えるつもりなのだろう、そしてアーチャーは呟いた

「I am the bone of my sword・《我が骨子は捻じれ狂う》」

身に纏う殺気が更に増した。

そしてアーチャーはどこから取り出したのか弓を構え、螺旋状の剣を添えた

剣から溢れる魔力は空間を捻らせながら打ち出されるのを待っていた
込められた魔力量から宝具だと思われる
恐らく貫通力に特化した剣なのだろう

本能が警告する、アレは危険だと

小太刀を捨て、草薙の剣に切り替えた
そして、剣を掲げ魔力を通す

剣が碧色に輝き振動を始め、大気を震わせた

「おまえのその宝具、この俺が断ち切つてやろう!!」

「おもしろい、貴様の剣とオレの剣、どちらが勝つか勝負しようじゃないか!」

両者の殺気がぶつかる、どちらも空間を震わせ必殺の時を待っていた

風が吹く……そして止んだ瞬間

「偽・螺旋剣！！」
カラドボルグ

「天叢雲剣！！」
アマノムラクモノツルギ

弓から剣が射出され

天叢雲剣が振り落とされ

空間を歪ませながら、二つの宝具が衝突した

アーチャーとの激突（後書き）

天叢雲剣は草薙の剣の別名だが神話では十握剣を越える強度と切れ味を誇る事からアヴェンジャーが命名した

故に概念武装【語り継がれる伝承などにより付与された概念】に依って特定の能力を発揮する強力な武装になった

能力はあらゆる物質、魔力の切断が可能で使い方しだいで相手の攻撃を打ち消す事が出来る

須佐能乎

アーチャーとアヴェンジャーの宝具が激突した。

言葉にすれば簡単だが、実際に目にした者の見解はそんな生易しい物ではなかった。

例えるなら二つのハリケーンが衝突した様な物だ

カラドボルグ

アマノムラクモノツルギ

カラドボルグ

偽・螺旋剣は空間を螺旋状に突き進み、天叢雲剣は偽・螺旋剣を両断する為により一層輝き闇ぎあっていた

そして、あっさりと均衡は崩れた。

ガキン・・・と甲高い音を響かせ、偽・螺旋剣は両断された。カラドボルグ

誰の目にもアヴェンジャーの剣の勝利だと疑わなかった。

だが、アヴェンジャーは見た。

アーチャーが己の宝具が両断された事に何の驚きも見せずいた、む

しろその顔は確かに笑っていた

そしてアーチャーは呟いた。

ブローケン・ファンタズム

「壊れた幻想」

それを呟いた瞬間。

カラドボルグ

両断された偽・螺旋剣が大爆発を起こし。

爆風と爆音がアヴェンジャーの姿を包んで光の中に消し去った。

爆発に呑み込まれたアヴェンジャーを見て、アーチャーは内心ほつとしていた。

偽・螺旋剣には相当の魔力を注ぎ威力を数倍にまで高めたが

あの碧色の剣によって両断された時は肝を冷やした、だが代わりに

フロックン・ファンタズム

壊れた幻想の爆発力も跳ね上がったので生きてはいまい

未だ黒煙が立ち込める山門の奥にアヴェンジャーのマスターが居た。

「さて、イレギュラーのマスターよ、そろそろご退場頂こうか？」

並の人間なら気を失う程の殺気をぶつけマスターに近づくことすると

「そうだな、お前もご退場願おうか、アーチャー？」

黒煙からアヴェンジャーの声が発せられたと同時に巨大な手が私の体なぎ払った

「がつ……！！！」

全身を強化して耐久性を高めて防御したがダメージは深刻だった。

所々の骨にはひびが入り、魔力も先の偽・螺旋剣カラドボルグであまり残ってお

らず状況はこちらが不利なのは明白だ

不意打ちを喰らいながらも敵意を込めて黒煙を見つめると、其処には思いもよらない物がいた。

黒煙が晴れた先に居たのはアヴェンジャーを中心に悪寒を感じる異常な魔力と人の三倍はある不気味な骸骨がアヴェンジャーの頭上に現れていた

「その威圧感……まだ宝具を持っていたのか……その力……貴様は一体何者だ……」

「はぁ……はぁ……お前こそ、宝具を爆発させるとは……何者なんだ……」

「く、貴様の・・・マスターにでも・・・聞け・・・だが・・・その宝具・・・大した威力だ・・・恐れ入ったよ・・・アヴェンジャー」

「はあ・・・お前もな・・・アーチャー・・・須佐能乎スサノオを・・・発動させるのが・・・もう少し・・・遅かったら・・・死んでいたぜ・・・バーサーカーより・・・厄介だ」

お互いが相手の強さを認めた瞬間だったが同時にこの英雄の真名が判らないので、どう戦うか思索していると

「そこまでにしましょう。お互いこれ以上の戦いは無意味です！」

伊織が高々と宣言すると

「ふざけるな・・・貴様の様な・・・不安要素を・・・見過ごす事は出来ん・・・」

「そうだな・・・オレも宝具を晒した以上・・・此処で決着をつけなければ・・・」

アーチャーとアヴェンジャーは反論するが

「アヴェンジャー・・・私に令呪を使わせる気ですか」

アヴェンジャーはいままで見せた事のない伊織の気迫に押され

「アーチャー・・・あなたも此処で倒れるのは本意ではないでしょう、それにこの事をあなたのマスターは承知しているのですか？今

後の為にもマスターに不信感を与えるのは得策ではないはずです」

アーチャーはまともな正論に反論できない為、しばらく悩んでいたが「・・・それを踏まえても、貴様は危険だ、排除するに越した事はない」

「ふむ・・・では、取引をしませんか？」

「取引だと・・・なにが目的だ」

「なに、私は事を荒立てたくないだけです」

「・・・いいだろう、聞くだけ訊こう」

「簡単です、今から私が令呪で『アーチャーとは戦うな』とアヴェンジャーに命令します、替わりにあなたは時が来るまで私達に手を出さないで貰いたい。これでいかがでしょう」

「ほう・・・」「な・・・!」

なんだ、その破格の条件は、こんな取引アーチャーに分がありすぎるこちらは令呪を失い更にアーチャーには手出し出来ない上、解除する為にまた令呪を消費するがアーチャーには何の制約もなく、その気になれば簡単に俺達を殺せるのだ

「随分な条件だな、何か裏があるのかね」

「いえ、但し、あなたが私達に攻撃した場合、あなたの秘密の公開とアヴェンジャーの令呪を解除します」

口ではああ言っているが、アーチャーが伊織を狙撃すれば何もせず
に全てが終わるのだ

啞然として事の成り行きを見ていたが流石にこれは不味い

「おい、幾らなんでも無茶苦茶だ、そんな事しなくても今からオレ
が・・・」

オレが言うより早く、伊織は腕の令呪を掲げ

「アヴェンジャーよ、令呪によって命ず”アーチャーとは戦うな”
！！」

令呪が光り、無くなると同時に全身に紫電が奔り動けなくなった

「ぐううう！！！！伊織・・・お前・・・」

須佐能乎の発動で体中の細胞が悲鳴を上げている最中にこの紫電を
喰らってアヴェンジャーは意識がなくなりかけていた

「これで、信用していただけましたか、アーチャー？」

「・・・一つ訊きたい事がある」

「質問によりますが・・・」

「・・・貴様は何者だ」

「それは、まだ秘密です・・・ですがしいう言うなら未来を変えた
い者と言って置きましょう」

「く、なら私と貴様は似た者同士と言っわけかな」

「かもしれませんが、あなたとは目的こそ違いますが気持ちは同じのようです」

「なら、くれぐれも私の邪魔をしないことだ、ではこれで失礼する」

そう言っアーチャーは姿を消した

そして残されたのは今にも倒れそうなアヴェンジャーと悠然と佇む伊織だけだった

「須佐能乎を解除しないと貴方の体が持ちませんよアヴェンジャー」

アーチャーは去ったのでこれ以上、須佐能乎を発動しても体の痛みと魔力を消費するだけなので解除したがアヴェンジャーの心中は穏やかではなかった

「どう言っつもりだ、貴重な令呪を使いあまつさえアーチャーと戦っうなだと！」

怒りを込めて詰め寄ると伊織は真剣みを帯びた目で

「落ち着いてください、予定が早まりましたが今から全てをお話します」

「・・・以前、言っていた歴史がどうかとかの事だな」

「はい、全てはあなたが召喚される一月前の事です・・・・・・・・・・」

伊織は静に語った、その内容を知ると同時に
アヴェンジャーは驚愕の真実を知るのであった

須佐能乎（後書き）

またしばらく衛宮士郎の視点に戻ると思います、感想やご意見があったらどんどん言ってください。

ステータスを付けました、参考にしてください。

【クラス】アヴェンジャー

【マスター】伊織

【真名】うちはサスケ

【性別】男性

【身長・体重】168cm 57kg

【属性】中立・悪

【筋力】B+

【耐久】B-

【敏捷】A+

【魔力】A

【幸運】C

【宝具】A++

【クラス別能力】

対魔力 D

魔術に対する守り。無効化は出来ず、ダメージ数値を多少軽減する。

単独行動 A+

マスター不在でも行動できる能力。

【保有スキル】

魔眼 A +

最高レベルの魔眼・写輪眼を所持。相手の動きを驚異的な洞察力と透視力で動きを先読みする洞察眼、相手を幻術に掛ける幻術眼、相手を催眠に掛ける催眠眼の三つの能力があり、さらに体の中の筋肉の伸縮を読み取り技や攻撃を完全に先読みし先手を取る事ができる。

魔力放出 A

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出することによって、能力を向上させる。

直感 B +

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力、写輪眼と併用することで、もはや未来予知に近い。

【宝具】

アマノムラクモノツルギ

『天叢雲剣』

対人宝具ランク A

草薙の剣の別名。高周波振動を纏わせる事で鋼をも両断する切断力を可能にし。あらゆる物質、魔力の切断が可能で使い方しだいで相手の攻撃を打ち消す事が出来る。

『天照』

対軍宝具ランクA

写輪眼よりさらに上位の瞳術”万華鏡写輪眼”の開眼者のみが使用可能。

ピントが合うだけでその視点から太陽の如き高温の黒い炎が発生する。

その黒い炎は対象物が燃え尽きるまで消えない。

『須佐能乎』

結界宝具ランクA++（完全体時はEX）

使用すると人間の骸骨のような像が浮かび上がり、その骸骨の像はあらゆる物理干渉に対して強大な防御力をほこる。魔力を膨大に消費する術であり、なおかつ全身の細胞に負担がかかるというリスクがあるが、術者をあらゆる干渉から守りきり、その状態で攻撃も出来る。

八人目のサーヴァント

2月8日

ライダーとの戦いを終え、帰宅した俺達は疲れを癒すように就寝した翌朝、居間には俺と遠坂が今後の方針を決める為に集まっていた。

「で、士郎はこれからどうするか決めてるの？私はバーサーカーを倒すのが良いと思うんだけど、あなたと協力関係にある以上あなたの意見も訊かないとね。けど士郎、判ってるわよね・・・」

遠坂の問いは、あなたが協力しなきゃ手を切ると言っているようなものだ。

だが、冷静に戦況を考える

残りのサーヴァントはセイバー・アーチャー・ランサー・バーサーカー・アヴェンジャーの五人だ

アーチャーはまだ手を組んでいるからいい。

アヴェンジャーは手を切り、もう味方ではないが不思議と敵対したとは思えない。

残りはランサーとバーサーカーだが、ランサーのマスターがまだ判明していない以上

バーサーカーのマスターであるイリヤが一番の敵と言う事になる

「正直気乗りしないな・・・確かにイリヤには殺されかけたけど、かと言って街や人を襲っている訳でもないから戦う理由が無いんだ」

「馬鹿ね。マスターは聖杯を賭けて戦う、いわば殺し合いだって言っただでしょ！士郎も戦いを止めたいならイリヤからマスターの権利を奪っちゃえばいいのよ、そしたら聖杯戦争も早く終わって余計な犠牲も出ないはずよ。だから私と協力しなさい」

遠坂の意見は正しい、マスターの権利を奪えば殺し合わなくて済むし協力すれば相手より有利になって早く戦いが終わる、正義の味方を目指す為にも聖杯戦争は終わらせなければならぬ

「・・・判った、遠坂と協力する。けど、どうやってあの子を見つめようか。あれ以来出てこないけど、あれだけ魔力を持ってるなら隠れてようと見つけ出せるだろ。なのに見つからないって事は、この街にはいないって事じゃないか」

「でしょうね。イリヤスフィールはずっと遠くから聖杯戦争を眺めて愉しんでるんでしょ」

「・・・ずっと遠く・・・？遠坂はそこが何処か判るのか」

「・・・昔、父さんから聞いた事があるのよ。アインツベルンは郊外の森に別荘を持ってるって」

硬い声で言い捨てる。

「・・・郊外の森に立つ別荘。

それがどれほど危険な場所なのかは遠坂の様子だけで十分すぎるほど感じ取れた。

「とにかく、いきましょ。一応場所にあたりは付けといたから、半日ぐらいで見つけられる筈よ」

遠坂は俺の返事も聞かずにポストンバックに荷物を詰めて準備を始めていた。

俺は呆れながらも遠坂とまだ協力関係にいる事が嬉しかった。

俺は部屋にいるセイバーに事情を話した。

セイバーは特に反論はしなかった、俺も部屋に戻り準備をしていると

「ちょっと、アーチャー！愚かってどういうことよ」

遠坂の部屋から怒鳴り声が聞こえた。

何事かと思い部屋に入ると、そこには目を吊り上げて怒っている遠坂とアーチャーがいた。

何故怒っているのかと思ひ話を聞くとアーチャーが言った言葉が最大の原因らしい

なんでも「衛宮士郎とバーサーカーを倒しに行くだと。リンも愚かだなわざわざ死に行くとは、衛宮士郎に毒されて君まで陽寄ると思わなかったよ、自殺願望でもあるのかね」と言われたらしいのだ恐らく俺と同じでアーチャーに事情を話してみたがアイツが遠坂だけではなく俺にも皮肉を言った事に激怒しているらしい人としては正しいのだが、魔術師としてはどうだろうと思うが俺はそんな遠坂が好きだった。

準備を整え、タクシーで街の郊外へと向かうこと一時間。

延々と続く国道を走り、幾つかの山を越えて森の入り口に辿り着いた。

気持ちを切り替えて森に入ろうとすると、静電気のような痛みが奔った。

「つ……なんだ、ビリツときたぞ……！？」

「……識別だけだろうけど、森全体に管理が行き届いているみたいね」

どうやら森全体に防犯ベルの様な物が張られているらしい。
だが、ここまで来た以上、進むしかないと言悟を決め森に踏み入った。

・・・森に入ってから、既に三時間。

正午はとうに過ぎ、切り開いている風景さえ判らなくなりだした頃。

「・・・見つけた。・・・って、聞いてはいたけど呆れたわ。本気でこんな所にあんなモノを建てるなんて」

遠坂の視線を追う。

木々の隙間。

注意しなければ見失うほどの隙間の向こうに、ひどく場違いな物がある。

「・・・なんだあれ。城、か」

森を抜ける。

あれほど果てがなかった森はあっさりなくなっていた。
そして、その先には古い城が佇んでいた。

「・・・・・・・・」「・・・・・・・・」

・・・ともあれ、ここで怯んでいても始まらないと思うと。

「シロウ、様子が変わです」「リン、どうやら先客がいるようだ」

セイバーとアーチャーが城の異変に気が付いた。

見ると城の正門は見るも無残に破壊されているのに気が付いた

その後、それを測ったかのように

「……………!!!!!!」

バーサーカーの雄たけびが聞こえたと同時に幾つもの剣戟の音が響いた。

剣と剣が打ち合う音。

だが……こんな嵐みたいな剣戟がありえるだろうか。

今まで最も激しかった剣同士の戦い……セイバーとバーサーカーの打ち合いでさえ、こんな音は立てなかった。

「……………あ」

そこで、不意に思い立った。

これは剣戟の音なんかじゃない。

一対多数の戦い……文字通りこの城のどこかで”戦争”が起きている。

その一方はバーサーカーに間違いない。

戦闘が起こるとしたら、バーサーカーが侵入者を迎え撃つ時のみである。

考えるより早く駆け出した。

音は広間から響いている。

「士郎、あなた達は正門から様子を見て、私達は裏から侵入するわ」

遠坂はアーチャーを連れて裏手に向かった。

俺とセイバーは正門を潜り広間のテラスから覗きみる。

と、そこにいたのは

「し、慎……………!?なんだってあいつ、こんなところに……………!」

？」

瓦礫の上。ロビーの隅で、慎二は楽しげに様子を見ている。
いや、違う。

驚くのはそんな事じゃない。

今、真実認めなくてはいけないのは、慎二が見守っている”戦い”
だった。

「・・・・・・・・！！！！」

黒い巨人が雄叫びを上げていた。

以前と何も変わらない狂戦士の姿。

巨人の背後には白い少女の姿がある。

バーサーカーのマスター、イリヤスフィール。

たえず、無邪気な笑みをうかべていた、殺し合いには到底似つかわ
しくない少女。

その少女が。

今は肩を震わせ、泣き叫ぶ一歩手前の顔で、自らのサーヴァントを
見つめていた。

その口は”誰か助けて”と、震える唇でそう訴えていた。

「・・・そんな」

吹き荒れる旋風。

バーサーカーの斧剣はことごとく弾かれる。

広間の中央。

瓦礫の王座に君臨する、一人のサーヴァントの”宝具”によって。

「な・・・あの男は・・・」

傍らにいたセイバーがそのサーヴァントを見て息を飲む。

無数の剣が舞う。

男の背後から現れるそれらは、一つ一つが紛れもなく必殺の武器だった。

「……………!!!!!!」

貫く。

それこそ湯水の如く。

底無しの宝具はバーサーカーの斧剣を弾くだけでは飽き足らず、その体を蹂躪していく。

剣は巨人の胴を断ち、頭部を撃ち抜き、心臓を串刺しにする。

……だが、それでも死なない。

巨人は即死する度に蘇り、確実に敵へと前進する。

それを、あの”敵”は楽しげに笑って迎えた。

「……バカ、な」

あの男……あのサーヴァントがあまりにも馬鹿げている。

次々と繰り出される数々の宝具はその全てが本物。

それを限りなく保有する英霊とは何者なのか。

いや、そもそもサーヴァントは七人の筈。

ならばあいつは八人目……規格外の、有ってはならない存在ではないか……

……だが。

その、あまりにも規格外の敵を前にして、黒い巨人はなお最強だった。

全身を貫かれようが切り裂かれようが、その歩みは止まらない。

「・・・・・・・・!!!!!!」

バーサーカーが吼える、しかし今の方法では、黒い巨人に勝機などない。

・・・恐らくは。標的されているバーサーカー自身も、とうにそれを知っているだろう。

「・・・・・・・・!!」

だというのに、巨人は愚鈍なまでに歩を進める。

「・・・フ。所詮はバーサーカー、同じ半神として期待していたが、よもやそこまで阿呆とはな!」

宝具が奔る。

失笑をあげ、男は背後の宝具に指令を下した。

「では、そろそろ引導を渡してやろう。これ以上近かづかれては暑苦しい」

・・・号令一下、無数の宝具が巨人を襲う。
だが。

「・・・・・・・・!!!!!!」

咆哮があがる。

十度目の死を越え、黒い巨人が駆けた。

巨人は迎い来る宝具を弾き返し、宝具の主へと肉薄する・・・
ついに斧剣が唸りをあげて一閃され・・・

「・・・天の鎖よ・・・！」

現れた無数の鎖によって、黒い巨人は捕らえられた。

「・・・！！」

鎖はバーサーカーの全身に巻き付き、その張力で絞り切ろうとしていた。

そうして。

終わりを示すように、男は片腕で巨人を指さした。

そして、二十を越える宝具が巨人の命を消す様に降り注いだ。

「あ・・・」

呆然とする少女の声。

・・・終わった。

今度こそ、本当に終わった。

鎖に繋がれ、無防備なままに宝具を受ける事、二十二回。

黒い巨人は遂に沈黙した。

巨人の体は光に還るかのように粒子になっていく。

・・・そうして、両者の戦いは終わった。

「やだ・・・やだよう、バーサーカー・・・！！」

墓標となった黒い巨人に、白い少女が駆け寄っていく。
それを。

男は手にした剣で、斬りつけようとしていた

固まっていた体が弾けた。

・・・俺には、あの子を放っておく事はできない・・・

男は、白い少女に剣を振り落とそうとする、それを見た瞬間

「止める、テメエーーーー！！」

俺は駆け出した、そして絞った声で叫ぶ。

渾身の思いであげた静止の声。

「・・・・・・・・ほう？」

男は振り落とそうした腕を止め、ゆらりと新しい獲物を見つけた死神のように広場の入り口に立つ俺へ振り向いた。

その背後には、俺の乱入に驚く慎二の姿がある。

男の口元には不吉な笑み。

だが、そんな事で。

あの男が止まる筈がなかったのだ。

男は笑みを貼り付けたまま、剣を振り落とした。

哀れなマスター

ガキン……と言う音が響き、男の剣は止められた。

剣の切っ先は、セイバーの不可視の剣によってそれ以上の進行を許さない。

男はセイバーの姿を認めると嬉しそうな顔をした

「おお、十年ぶりだなセイバー、この日が来るのを待ちわびたぞ」

男の目はセイバーにしか向けられていなかった

「……なぜ、貴方がまだ現界しているのですか、アーチャー。御身は十年前の聖杯戦争のサーヴァントの筈」

「なっ！？この男を知ってるのかセイバー！」

「シロウ、この男は前回の聖杯戦争で呼び出されたアーチャーです。気を付けてください、あのサーヴァントは……私よりも強い」

あのサーヴァント中、最も優れたセイバーが初めて弱音を吐いた。そんな状況をアーチャーと呼ばれた男は愉快そうに楽しんでた。

「くくく、セイバーよ。我はあのとき聖杯の中身を浴びそれをわが物とし受肉した。そして我は十年間ずっとここで過ごしていたのだ。さて前に我が言ったことを覚えているか？その返事を聞かせてもらおうか」

「……冗談はほどほどにしてもらいたいものですねアーチャー。私はあなたのものにもなる気はない」

「くく、それでこそセイバーだ。そう簡単に手に入れられるとは思ってはいいない。やはり、女というものは力づくで奪い、屈伏させるものであるう。だがセイバー、今は生憎仕事があつてな、その人形から聖杯の器を取り出さなければならんのでな」

愉悦に歪んだ紅い瞳がバーサーカーに駆け寄るイリヤを捉えた所で。

「まあ、待てよギルガメツシュ、そいつのマスターが僕の知り合いでさあ、ちよつと挨拶しておきたいんだ」

ロビーの隅で乱入者に驚いていた慎二が男の背後で肩に手を置き、存在をアピールした。

ギルガメツシュと呼ばれた男は一瞬だけ不快そうな顔をしたが、それはすぐに消えた。

「よう、衛宮。昨日は世話になったな、お陰で僕はこの通りさ。ああ、紹介しようコイツは僕の新しいサーヴァント、ギルガメツシュだ」

「.....」

驚いて声が出ないとはこの事だろう、聖杯戦争で最も重要な意味を持つ真名を自分から明かす者が居ると思っていなかったのだ。

だが、ギルガメツシュは気にした様子はない。

ギルガメツシュ・・・確か、古代バビロン、ウルクの王にして人類最古の英雄王、だとしたらあの無数の宝具にも納得できる。

「おい、なにシカトしてるんだよ、今一番偉いのが誰か判ってるの

「なんだよ！僕が戦えって言ったら死ぬ気で戦うんだよ！！聞いてるのか、オイ」

「シンジ、気が変わった。セイバーだけならまだしも、汚らしい偽者どもが居たのでは興が削がれる」

「お前の都合なんかどうでもいい！！僕は殺れと言ってるんだ、だつたら黙って従え！！！」

「・・・黙れ下郎。王に命令するとは何事か、分を弁えよ」

「なんだと！僕はマスターなん・・・だ・・・ぞ・・・」

唐突にその言葉が途切れた。

いや、言葉が紡げないのだ。

ギルガメッシュの真紅の槍に貫かれて。

ごふっ・・・と血を吐いて慎二は自分の心臓に刺さっているゲイ・ボルクに酷似した魔槍を見つめていた。

「我に命令したのだ、死ぬ事で詫びるがいい」

「あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

慎二は糸が切れた人形のように倒れた。

その光景を俺と遠坂が啞然として見ていた。

「ふん、ここはひいてやろう。小僧、しばしセイバーを預けておく。けっしてセイバーを退場させるでないぞ？」

そういつて英雄王は去っていった。

英雄王が去り、残されたのは俺達四人。

そして消え行く黒い巨人のバーサーカーと白い少女のイリヤだけだった。

「バーサーカー………」

イリヤはバーサーカーの傍で泣いていた。

バーサーカーの体はほとんど消えかけていた。

だが、それはいかなる奇跡か。

なんとバーサーカーの手がイリヤの頭を撫た、最後の氣力を振り絞り残された主を見守る。

イリヤはその手を優しく抱きとめ泣いた。

そして最後の瞬間、俺を見た。

その目は”お前が守れ”と訴えていた、俺はその目に強い意志を持つて答えた。

俺の目を見ると、黒い巨人は役目を終えたかの様に消え去った。

だが、消えたバーサーカーに続くように、イリヤが倒れた。

その後、俺達は倒れたイリヤを家に匿う為に城を出たがそこで思わぬアクシデントが発生した。

森が開けた場所に出た先には蒼い槍兵がいた。

「よう、いつぞや夜以来だなお二人さん、お互いしぶとく生き残ってなによりだな」

「ラ・・・ランサー・・・!?」

現れた男は紛れもなくランサーだった。

6日前の夜、俺はあの男に胸を貫かれた。

「シロウ、下がってください」

セイバーが臨戦態勢に入るが

「ああ、悪いなセイバー、あの金ピカ野郎からお前とは戦うと言われてるんでな、今日は相手を指名させてもらっぜ」

「なっ!? 貴方はギルガメッシュと手を組んでいるのですか!」

「俺としてはあのいけ好かない野郎を仲間とは思いたくねえがマスターの意向なら仕方がねえんでな、なあに、あんたらも手を組んでるだから珍しいて訳でもないだろう?」

確かに遠坂と手を組んでいる以上、同じ事が相手にも起きているのは仕方がないが。

「指名するって、誰と戦うんだ?」

最もな疑問を投げ掛けると。

「バカか、消去法で考えたら其処のアーチャーしか居ないだろ」

すると、アーチャーが現界した。

アーチャーは無言でランサーを見ていたが、その顔は何かを考えている様だった。

セイバーはそんな提案は受けられないと叫んだが。

「ほう。騎士王様は他人の決闘を邪魔するのが誇りなのか」

「ランサー・・・貴様、私が誰なのか知っているのか」

「ああ、あの金ピカ野郎が教えてくれたぜ、だがまあ安心しろ他人の真名を口にするほど野暮じゃねえからよ」

セイバーは悔しそうに押し黙った。

アーチャーは何かを決意した様に遠坂を見た。

「リン、ご指名のようだがどうする」

「いいわ、やっちゃってアーチャー！」

「では、ご期待に添えるでしょう」

アーチャーは含みのある笑みを浮かべていたが俺達がその本当の意味を知ったのはそれから数日後の事だった。

残ったものは刃物のようなランサーの殺気と。

それを平然と受け止めるアーチャーの殺気だけだ。

「・・・・・・・・」

・・・間合いは5間。

十メートル近く離れた距離で対峙する青と赤の騎士の姿は、まさにあの夜の再現だった。

そこで不意に思い出した。

あの夜、何故助かったのか。

だが、今なら判る、ランサーと戦っていたのはアーチャーだった。なら、俺を助けた魔術師は遠坂と言うことになる。

あの夜に拾ったペンダントは今もお守り代りに持っている。

それを遠坂に返そうとした所で見た。遠坂に手にまったく同じペンダントがある事に、問いただそうと声を掛けようとした時に戦闘は始まった。

・・・交差する二つの凶器。

双剣と長槍、両者の得物は互いの首を断とうと繰り出された。

黒い影

- カキン -

- ヒュン -

- ギン -

「っ………！」

朱色の魔槍が、自分の領域を侵犯する。

繰り出される槍は回を増すごとにアーチャーの守りを崩す。

あの夜防ぎきつたランサーの槍を、アーチャーはさばききれないでいた。

それも当然。

これは二度目の戦いだ。

ランサーにはある令呪が働いている。

敵マスターの戦力を知る為、彼のマスターはランサーにこう告げた。

「おまえは全員と戦え。だが倒すな。一度目の相手からは必ず生還しろ」

自身に科せられたただ一つの命令。

そんな馬鹿げた命令に従った彼に、ようやく訪れた”何の縛りもない戦い”がこれである。

故に、前回と同じである筈がない。

ランサーを縛るものは何もなく、アーチャーはここにきて、サーヴアント中最速の英霊と戦う事になった。

- ヒュン、ヒュン、ヒュン、ヒュン -

- カキン、キン -

「ぬっ……！」

二度、アーチャーから苦悶が漏れる。

もとより点にすぎない槍の軌跡。

それが、今では閃光と化している。

得物を振るう腕の動き、その足捌きさえ、既に不可視の領域に加速しつつあった。

「……っ」

それをここまで防ぎきったのは、前回の戦いでランサーの槍を知ったからだ。

赤い外套の騎士は、自ら致命的な隙を作る事で攻撃を限定させる。

前回に得た情報を元にした行動予測と、培ってきた戦闘経験による状況打破。

それが『心眼』と呼ばれる、修練によって得られる鉄の心だ。

それは非凡な物などでは断じてない。

彼の持つ唯一の技術^{スキル}。

セイバーやアヴェンジャーが持つ『直感』のような先天的な物ではなく、愚直なまでに修練を重ねれば誰にでも手が届く、凡人故の武器だった。

- ヒュン -

- ガキン -

「くっ……！」

「づっ……！」

一際高い剣戟。

舞い散る火花と共に、両者の体が後退する。

自身に叩きつけるようなランサー渾身の一撃は、同じくアーチャー渾身の一撃によって相殺された。

離れた距離は五メートル弱。

ランサーならば一息もかけずに攻め込めるその間合いで。

「解せんな。貴様、これだけの腕を持っているのにもかかわらず、貴様の剣には決定的に誇りが欠けている」

立ち上がる闘気。

それを前にして、赤い弓兵はなお、愉快げに笑っていた。

「ああ、あいにく誇りなどない身だからな。だがそれがどうした。は、笑わせないでくれよランサー。そんな余分なプライドはな、そこいらの狗にでも食わせてしまえ」

「……………」

瞬間。

わずかに弛緩していた空気が一変した。

……大気が凍り付く。

放たれる殺気は今までの比ではない。

その、呼吸さえ困難な緊迫の中。

「狗と言ったな、アーチャー」

森の鴉を払う声で、青い槍兵は言い放った。

「事実だ、クー・フリーン。英雄の誇りなぞ持っているのなら、今の内に捨てておけ」

「・・・よく言った。ならば、オマエが先に逝け」

そして大きく後退するランサー。

槍を突き出す、どこの間合いではない。

一瞬にして離された距離は百メートル以上。

ランサーはそこで、獣のように大地に四肢をつく。

「・・・・・・・・」

全員の五感が凍る。

恐怖か、畏怖か。

そのどちらであれ、彼は即座に理解した。

ランサーの後退の意味。

敵が打ち出すであろう次の攻撃が、文字通り必殺であるという事を。

「・・・オレの槍ゲイ・ボルクの能力は聞いているな、アーチャー」

地面に四肢をついたランサーの腰が上がる。

その姿は、号砲を待つスプリンターのようだった。

「・・・・・・・・」

アーチャーに答える余裕などない。

赤い騎士は両手に持った双剣を捨て、最速で自己の裡に埋没する。
だが間に合うか。

ランサーのあの姿勢。

彼の魔槍が伝説をなぞるのなら、防ぐ宝具は生半可な物では済まされまい。

「・・・行くぞ。この一撃、手向けとして受け取るがいい・・・！」

青い豹が走る。

ランサーは突風となってアーチャーへと疾駆する。

五十メートルもの距離を一息で走り抜けた槍兵は、あるうことが、そのまま大きく跳躍した。

宙に舞う体。

大きく振りかぶった腕には”放てば必ず心臓を貫く”魔槍。
ぎしり、と空間が軋みを上げる。

「・・・突き穿つ^{ガイ}」

紡がれる言葉に因果の槍が呼応する。

青い槍兵は弓を引き絞るように上体を反らし。

「死翔^{ボルク}の槍・・・！！！！！！！！」

怒号と共に、その一撃を叩き下ろした・・・

それは、もとより投擲する為の宝具^{モノ}だった。

狙えば必ず心臓を穿つ槍。

躲す事なぞ出来ず、躲し続ける度に再度標的を襲う呪いの宝具。

それがゲイボルク、生涯一度たりとも敗北しなかった英雄の持つ破壊の槍。

ランサーの全魔力で打ち出されたソレは防ぐ事さえ許されまい。
躲す事も出来ず、防ぐ事も出来ない。

・・・故に必殺。

この魔槍に狙われた者に、生き残る術などあり得ない。

魔弾が迫る。

一秒に満たぬその間、赤い騎士は死を受け入れるように目蓋を閉じ。

「I am the bone of my sword・《体は
剣で 出来ている》」

衝突する光の棘。

天空より飛来した破滅の一刻が、赤い騎士へ直撃する刹那。

「ロー・アイアス
”熾天覆う七つの円環”！！」

大気を震わせ真名が展開された。

激突する槍と盾。

あらゆる回避、あらゆる防壁を突破する死の槍。

それが、ここに停止していた。

暴風と高熱を残骸として撒き散らしながら、必殺の槍はアーチャー
の”宝具”によって食い止められる。

何処かより出現した七枚の花弁はアーチャーを守護し、主を打つ抜
こうとする魔弾に対抗する・・・！

花弁の如き守りは七つ、その一枚一枚は古の城壁に匹敵する。

投擲武具、使い手より放たれた凶器に対してならば無敵とされる結
界宝具。

だが。

それを、必殺の槍は苦も無く貫通していく。

「・・・・・・・・つ・・・・・・・・!!!!!!」

六枚の花弁が四散する。

残り一枚。

魔槍は決して貫けなかったと言われる7枚目に到達し、なおその勢いを緩めない。

殺しきれぬ魔槍の一棘。

それを直前にし、

「ぬ・・・・ぬあああああ・・・・・・!!!!!!」

裂昂の気合を以って、アーチャーは全魔力を己が宝具に注ぎ込む・
・!

パリン、と言う音と共にカラン、と言う音が響く。

「・・・・・・・・」

地に降りたランサーは、ただ目のサーヴァントを凝視する。

アーチャーは満身創意だ。

突き出していた腕は朽ち木の如く。

苦痛に歪む貌は腕の傷だけでなく、想像を絶する頭痛に耐えてのも
のだった。

「・・・・驚いたな。アイアスを貫通しうる槍がこの世にあるとは
恐れ入ったよ」

赤い騎士は心から青い槍兵に賛辞を送る。

「・・・・・・・・」

そのようなもの、ランサーに届く筈がない。
最強の一撃。

自らを英雄たらしめた一撃を防がれたのだ。
その憤怒たるや、視線だけで呪い殺せよう。

だが、その怒りも強い疑問に打ち消されつつあった。

・・・解せないどころの話ではない。

恐らくこの場にいる者は、全員そう思うだろう。

確かにアーチャーは正体不明のサーヴァントだ。

何処の英雄とも知れず、弓兵でありながら双剣を持ち、そして今、
ランサー最強の一撃を防ぐほどの盾さえ見せた。

それは異常だ。

そのような英雄、この世のどこを探しても見あたるまい。

「貴様・・・何者だ」

「ただの弓兵だが。君の見立ては間違いではない」

「戯れ言を。弓兵が宝具を防ぐほどの盾を持つものか」

「場合によっては持つだろう。だが、それもこのあり様だ。魔力の
大部分を消費したというのに腕をやられ、アイアスも完全に破壊さ
れた。・・・まったく、私が持ち得る最強の守りだったのだがな、
今のは」

「・・・・・・」

軽口を叩くアーチャーを、ランサーはただ睨み続ける。
だが、その空気が唐突に終わりを告げた。

森が暗くなった、まだ陽が沈むには早いのも関わらず、闇が周囲を覆い隠す。

そして、なんの前触れもなく”ソレ”は現れた。

それはまさに黒い影としか形容出来なかった。

知性もなく理性もなく、おそらく生物ですら在り得ない影は動こうともせず、蜃気楼のように立ち続ける。

影に魅入られたかのように、その場にいる誰もが動こうとはしないいや、二人だけその影に魅入られていない者がいた。

それは衛宮士郎とアーチャーだ。

彼らだけは影を見て違う境地を抱いた。

それは十年前の災害で見た黒い太陽を彷彿させ、同時に良く知っている後輩を思い出させた。

皆が凍りつく中、影から伸びる触手が遠坂を襲った。

「え……」

遠坂は影に呆けてその触手に対応出来なかった。

ランサーもセイバーも影の不気味さに反応が遅れてしまっている。

アーチャーも遠坂とは離れた場所にいる。

遠坂に触手が迫ろうとした瞬間。

「……おさか、危ないっ……！！！」

影から伸びる触手は遠坂を突き飛ばした俺に触れた。
同時に。

頭に死のイメージが流れ込んできた。

死ね 死ね 死ね 死ね 死ね 死ね 死ね 死ね 死ね 死ね

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死

「ぐっ………!!」

襲い来る死の奔流に衛宮士郎は意識を失った。

その直後に影は消え去り、森には普段の静けさが戻った。

デート

2月9日

・・・朝だ。

時刻は7時を過ぎている。

陽射は白く、外は気持ちのいい快晴らしい。

「・・・半日眠ってた訳か、俺もまだまだ修行不足だな」

はあ、と溜息をついて反省する。

体を起こして背筋を伸ばす。

体調はいたって良好。

昨日の影による影響はないようだ。

手足は動くし、頭痛だって微塵もない。

素早く着替えて居間に向かった。

居間に到着すると遠坂とセイバーがいた。

セイバーは不動のまま正座をしている、遠坂はどうやら朝食を作っているようだ。

二人は俺に気が付くと。

「おはよ。士郎、台所借りてるわよ」

「おはようございます。シロウ」

「ああ、おはよう。二人とも」

俺はセイバーの隣りに座ると、朝食が出来るのを待つことにした。

朝食後。

「ところで士郎。アンタ、あの子をどうする気よ」

・・・と。

唐突に、遠坂はこちらを睨んできた。

「え・・・どうするって・・・何をだよ」

「だから、部屋で寝てる物騒な子供の事よ。此処に連れて行くって言ったのはアンタじゃない」

「それについては私も言いたい。バーサーカーを失ったとはいえ、イリヤスフィールは危険なマスターだ。それを保護するなどシロウはどうかしています」

「そうそう、あんなのは綺礼に預けちゃえばいいのよ」

「う・・・」

二人はここぞとばかりに息を合わせて俺を睨む。

・・・そうなのだ。

バーサーカーが消えて、イリヤは気を失った。

目覚める様子がない彼女を放っておけず、家に連れて行こうと言ったのは自分だ。

サーヴァントを失ったマスターは、他のマスターに殺される前に逃げるか、教会に保護されるしかない。

遠坂は言峰神父に預けると言うが、あの神父がイリヤの面倒を見てくれるとは思えず、家に匿おうとした次第だ。

直も二人の猛攻は続くが。

そこへ。

「・・・ほんと、同じレディとして恥ずかしいわ。わたしよりずっと年上なのに、たしなみってものがないんだから」

と。

眠っていた筈の、問題の少女が現れた。

「・・・・・・・・イリヤスフィール・・・!」

セイバーはイリヤの姿を見据えると警戒を露にした。

「まあ、それも怒らないであげる。今はあなたたちにかまってる場合じゃないもの」

言って、イリヤはくるりとこっちへ振り向いた。

「え・・・イリ、ヤ?」

「礼を言います、セイバーのマスター。敵であつた我が身まで気遣うその心遣い、心より感謝いたしますわ」

「あ・・・う?」

啞然とイリヤを見つめる。

あまりに予想外だったのか、セイバーも同じ様に黙り込んでいる。
遠坂はと言うと、いかにも胡散臭そうにイリヤを眺めていた。

・・・と。

イリヤはにっこりと笑顔を浮かべると、

「なーんてね。うん、やっぱりシロウはお兄ちゃんだー！」

一直線に俺の首ったまに抱きついてきた。

「ふっ・・・！？」

「・・・」「・・・」

ぴきり、と真顔でこめかみのあたりに効果音を鳴らすセイバーと遠坂。

そしてこれから始まるであろう喧騒に一人頭を抱えるのであった。

イリヤ、セイバー、遠坂の三竦みの戦いが終わり安心した矢先に。

「ところで、あの黒い影について、どうするか考えてある？」

空気を壊すように遠坂が言い放った。

「・・・」

俺とセイバーが口を紡ぐ、イリヤはあの影を見ていないので不思議そうに事の成り行きを見ている。

あの影を思い出す。

触手に触れた時に見せられたあのイメージ、それだけでもあれは危険だと判断できる。

「・・・とりあえずあの影は最優先で倒すとして、問題はランサーとギルガメッシュだ」

自分でもあの影の事を先送りしていると判っているが、どうにもあの影とは関わり会いたくない。

アイツを見た瞬間、十年前の火事や何故か桜を思い出させた事が苦手意識を生んでいるようなのだ。

「そうね。結局ランサーのマスターは不明のままで、ギルガメッシュのマスターだった慎二も死んじゃうし、黒い影が何なのか判らないわで前途多難ね」

「とにかく、第一にあの黒い影、第二にランサーのマスター、第三にギルガメッシュを探す事にしよう」

俺が提案すると三人は納得したようだ。

「よし、黒い影は夜に巡回するとして、まずはマスター捜しだな、俺は新都を探すけど遠坂はどうする？」

「んー、やめとくわ。この家にイリヤを残すのも気が引けるし、聞きたい事もあるのよ」

イリヤは若干不満そうだが特に反論はしなかった。

「では、シロウ。私もご同行しますので仕度をしてください」

セイバーはマスターを捜す気満々だが。

これは見方を変えるとデートとも言えないか。

そう意識した瞬間、顔が赤くなった。

遠坂はきしし、と笑いを抑えている。

イリヤは不貞腐れて、機嫌が悪そうだ。

セイバーはそんな俺達を見て首を傾げていた。

準備を整え外に出る。

「それで。具体的にはこれからどうするのですか、シロウ」

「どうするって、とりあえず隣町に出る。交差点からバスが出てるから、それに乗って行こう」

坂道を下り、バスに乗る。

バスに揺られながら隣りに座るセイバーを盗み見た。

「っ……………」

どくん、と一際高く心臓が鳴る。

「・・・・・・・・」

心を落ち着かせて、気持ちを切り替える。

バスは橋を渡りきって、ビルが立ち並ぶ開発地区に入っていく。
聴き慣れたアナウンスが、次は新都駅前と告げていた。

さて、時刻は午後四時。

一言で表すと、嵐のような六時間だった。

マスター搜しと言っても歩いて回るだけなのでセイバーを連れて色々な店に入った。

骨董屋やルールを教えながらボウリング場に行ったり、公園で鳥に餌をやったりもした。

昼には遠坂が教えてくれた喫茶店で昼食を食べた。

午後になって町で一番品揃えのいいぬいぐるみ屋に入った。

「なっ・・・・・・・・」

ガガーン、と立ちつくすセイバー！。

「ま、せっかく来たんだから見て回ろう。セイバー」

セイバーの手を取る。

セイバーは黙ったまま俺に腕を引かれて店内を見て回った。

そして、慣れない一日は慌ただしく過ぎていった。
印象に残るほど楽しい出来事があった訳ではない。
言ってしまうえば、なんでもない事だったのだ。
それでも、この一日は悪く無かった。

帰り道は徒歩だった。
バスで帰ろうとした矢先、

「帰りは歩いていきましょう」

とセイバーが提案した為である。
鮮やかな夕日が橋を赤く照らしている。

「セイバー。今日は楽しかったか」

「そうですね。新鮮でないとえば嘘になります」

「そうか」

セイバーの目を見据えたまま頷いて。

「ならまた行こう。こんなの、別に今回限りって訳じゃないんだから」

「・・・・・・・・」

セイバーの表情が固まる。

彼女は俺をはつきりと見据えたまま、静かに首を横に振った。

「・・・・それは、何故だ」

「何故も何もない。サーヴァントは戦う為に存在する者だからです」
闘志の籠もった目で見つめてくる。

「・・・なんだよそれ。そんなに戦いたいのか、おまえは」

「当然でしょう。私にとって・・・戦闘は何よりも優先すべき事です」

「だけど、俺にだって判る。おまえは戦いを嫌っている。・・・ハッキリ言っぞ。おまえは戦いになんて向いていない。本当は剣を取る事だって嫌だった筈だ」

「・・・シロウ。いくら貴方でも、それ以上の侮辱は許しません」

ぎり、と言う音。

セイバーは怒りをかみ殺して俺を睨む。

「図星だから怒っているんだろ。・・・おまえは此処にいるんだ、昔のおまえとは違う・・・！なら・・・これからは自分の為に生きなきゃダメだ。間違っても聖杯を・・・どうでもいい他人の為なんかには使っな。此処に居るなら、セイバーは此処で幸せにならなきゃダメだ」

風の音が耳に響く。

セイバーは答えない。

頷きもしない。

ただ、まっすぐ俺の目を見返して、

「・・・その言葉には領けない。私は貴方に従うと契約した。だが心まで預けた訳ではありません、マスター」

そう、強い声で返答した。

「・・・セイバー。たとえどんな酷い結末だろうと、起きてしまった事を変えるなんて出来ない。出来なかったからやり直しがしたいなんて、そんなのは子供の我が儘と同じじゃないか・・・！」

・・・そこで言葉は途切れた。

セイバーは何も言わず、俺も言うべき言葉はない。

ひゅう、という風の音。

頬に風を感じたその時。

「・・・シロウなら、解ってくれると思っていた」

冷たい声。

「今日一日を無意に過ごし、言いたかった事はそれだけですか」

そこには、もう拒絶しか残っていなかった。

「・・・セイバー、おまえ」

「・・・そんなに戦うのが嫌ならば、貴方は遠くで隠れていればいいでしょう。どうせ貴方は聖杯を必要としない、そんな貴方程度の人間に、私の何が解ると言うのです。そんな貴方に、私に踏み入る権利などない」

「セイバー・・・それは本気で言ってるのか」

震える声で問う。

「当然です。私の目的は聖杯だけ。それ以外の事など余計だ。・・・シロウ。それは貴方も例外ではありません」

息が止まる。

目の前が真っ白になるのを堪えて。

「この分からず屋・・・！いい、そんなに戦いたいってんなら勝手にしろ！」

逃げ口めいた事を怒鳴って、そのままセイバーから駆け出した。離れていく姿。

ただ、一瞬だけ、ぼんやりと立ちつくすセイバーの姿が見えた気がした。

全力疾走で家に帰り、脇目も振らず部屋に駆け込み、そのまま大の字に倒れた。

「はあ・・・はあ・・・くそ。ああもう勝手にしろ・・・！！！」

ばたん、と仰向けからうつ伏せになる。

だが、セイバーの泣きそうだった顔を思い出す。そして、目を閉じ頭の中を真っ暗にした。

物音が聞こえた気がした。

・・・いつの間にか日が落ちたのか、部屋は闇に落ちていた。

「ちょっと、いつまで寝ぼけてるのよ。もう十時過ぎよ」

不機嫌そうな遠坂の声。

それで、完全に目が覚めた。

「じゅ、十時過ぎ・・・!？」

ガバッ、と体を起こす。

「っ・・・すまん、寝てた」

「それはいいけど。士郎、セイバーは？」

「え・・・道場にいないのか？」

「居ないから聞ってるんじゃない」

遠坂の目は真剣だ。

それで・・・それがどういう事なのか、一瞬で把握した。

「まさか・・・あいつ、帰ってきてないのか・・・!!？」

慌てて部屋を飛び出て外へ向かった。

セイバーが帰ってこない。

・・・考えてみれば当然だ。

あれだけの言い合いをした。

あいつの性格から言って、帰りにくいのは当たり前だ。

・・・だから、真っ先に此処に来た。
そこに、彼女の姿があった。
橋を渡っていく。

無言で歩いていって、セイバーの傍らで立ち止まった。

「セイバー。体、冷えるぞ」

びくん、と震える体。

「・・・シロウ?」

問うように、セイバーは振り返った。

「何してんだよ、こんな時間まで。いつまでも帰って来ないから、心配したぞ」

「あ・・・シロウ」

「家に帰るぞ。こんなに冷えたら風邪を引く。早く戻って、あったかい物でも食べよう」

「・・・あ、あの、ですが、私は」

「それと、言っとくけど俺は謝らないからな。文句があるなら今の内に言っとけよ」

「・・・」

呆然と俺を見つめてくる。

セイバーはいかにも謝りたがっている顔だったが何も言わず俺に手

を握られたまま大人しく付いて来てくれた。

橋を下りて、公園に出る。

・・・時刻は十一時。

「・・・・・・・・」 「・・・・・・・・」

・・・今日一日、色々と波乱が続いた。

けれどその終わりがこの暖かさであるなら、今日から宗旨変えしてあの神父に祈ってもいい、なんて感謝した時。

「・・・何処に行く。勝手に人の物を誑たぶらかすな、小僧」

・・・決して出会ってはならないモノに、俺達は出遭ってしまった。

投影、開始

舞い上がっていた意識が一瞬にして凍り付いた。
全身には鳥肌が立ち、喉は呼吸を忘れたように動かない。

「・・・シロ、ウ」

それは後ろにいるセイバーも同じなのか。
重ねた指が強く握られる。

「待たせたなセイバー。約束通り、こうして迎えに来てやったぞ」

「アー、チャー・・・・・・・・」

・・・黄金のサーヴァント。

昨日、バーサーカーを事も無げに始末した人類最古の英雄王・ギルガメッシュ。

その怪物が、俺達の前に居る。
こんな近く。

その気になればすぐにでも斬り合いを始められる距離に、バーサーカー以上の”死”が立っていた。

「どうしたセイバー。我がわざわざ出向いてやったのだ。いつまでも黙っているのは無礼であろう？それとも・・・我の物になる前に少しばかり遊ぶつもりか、騎士王よ」

愉しげに笑いをかみ殺すギルガメッシュ。

その目は俺を見ていない。

あいつはセイバーだけを見ている。

セイバーの気配が変わる。

・・・覚悟を決めたのか。

「・・・シロウ、なんとしても初撃だけは防ぎます。その隙に、貴方だけは離脱してください」

・・・彼女を以ってしても、防げるのは初撃のみ。

・・・恐らく。

彼女自身、あのサーヴァントを打倒する手段がないと判っているが故に。

「・・・違う。逃げるのはおまえの方だ、セイバー」

「な・・・シロウ・・・!?!」

セイバーを庇って、ギルガメッシュと対峙する。

丸腰では不味いと思い、偶然近くにあった箒の柄を強化して立ち上がった。

ギルガメッシュは愉快げに片手をあげ、ゆっくりと指を合わせた。

「- - - - -」

・・・吐き気がする。

今すぐ退かなければ殺される。

そう思った刹那。

ヤツが指を鳴らし、同時に真横から巨大な鉄槌が現れ、自分をゴミのように吹き飛ばした。

「は・・・あ」

体は動かない。

全身の骨がバラバラになったような虚無感。

手足の感覚はとつくになく、自分が生きているのかさえ、よく分からない。

寸前で強化した柄でガードしたがそれすらも意味を成さない。

「殺しはせん。不本意だが、今ここで貴様を潰せばセイバーも消えてしまうからな」

ギルガメツシュが笑う。

「あ……く……」

立ち上がろうと手を動かすが、体は何一つ言う事を聞かなかった。

「シロウ……!」

倒れた俺へ駆け付けようとするセイバー。

「何処へ行く。邪魔者はいなくなったのだ、おまえが向かうべきは、そんな小僧ではなからう」

だが、ギルガメツシュはそれを許さない。

倒れた俺の前に立ち、駆け寄ろうとするセイバーを待ち受ける。

「っ……」

足を止め、ギルガメツシュを睨む、セイバー。

……両者の距離は十メートルほど。

「……ふん。その様子ではまだ我に下る気はないようだな」

「……世迷言を、私は王だ。貴様の軍門になど下らぬ」

「・・・もう一度だけ言うぞセイバー。このまま我の物になれ。この世界で、共に二度目の生を謳歌しようではないか」

「・・・断わる。そのような事に興味はないし、なにより・・・貴様と共に生きるなど、まかり間違つてもありえません」

「く・ふ、はははははははははは」

なにが愉しいのか、ギルガメッシュは腹を抱えて笑い出した。

「いいぞ、それでこそ我が見込んだ女よ！」

ギルガメッシュはセイバーを見据え。

「よし、では力ずくだ。・・・喜べよセイバー、聖杯を手に入れた後、我と同じように中身をぶちまけてやろう」

「……アーチャー。貴様の目的はなんだ」

もはや戦うだけだと踏み切ったのか。
セイバーは最後に聞いたです。

「目的か。さあ、なんだったか。生憎この世の財は全て手に入れた身でな。望むモノなどとうにない。・・・だが、これほど装飾に凝っているが故、この世界は面白い。これならば、再びこの世に君臨

するのも悪くない。・・・そうだな、我の目的といえばそんな所か」

「・・・支配欲か。見下げ果てたな、アーチャー」

・・・セイバーの姿が霞む。

一瞬の閃光の後、セイバーは銀の鎧に包まれていた。

「ほう・・・」

間髪入れず、セイバーの体が奔るった。

「ギン」

「っ・・・！！」

弾かれ大きく後方に跳ぶセイバー！

一瞬の攻防の合間に、敵は武装を済ませていた。

「・・・よいぞ。刃向かう事を許す、セイバー」

敵は、愉しげに死闘の開幕を告げていた。

剣と鎧がぶつかる音。

不可視の剣は、面白いように、鎧に直撃する。

「・・・ふん。流石にこれ以上は、まずいか」

防戦一方だった敵が片腕をあげる。

セイバーは直感で距離を空けた。

「戯れは終わりだ。その身、ここで我に捧げるがいい」

ただ夜が広がるだけの空間に歪みが生じた。

「- - - - -」
ゲート・オブ・バビロン
「王の財宝」

ギルガメッシュの背後で、目に視えない”扉”が開かれた。

・・・ギルガメッシュの周囲には、無数の宝具の柄が浮かんでいた。それはバーサーカーを葬った宝具の原典だ。

それを見てもセイバーは臆さなかった。

「ほう？ 我の財を知った上でまだ抗うか」

「・・・やってみなければ判りません。いかに英雄王と言えど、超えられぬ物がある筈だ」

セイバーの周囲が揺れる。

吹き始めた風は渦を巻き、旋風となって彼女を守る。

「セイ、バー・・・？」

我が目を疑う。

見えない筈の剣が、確かに見える。

同時に現れる黄金の剣。

「黄金の・・・剣？」

恐らくあの黄金の剣は、イングランドに存在したとされる騎士の王の剣だ。

だとしたら彼女の真名もおのずと知れる。

だが。

「・・・だめだ、セイバー」

悪寒がする。

あの敵と対峙した時に感じた予感。

何をして勝てないと。

「・・・ふん。音に聞こえし聖剣か。いいだろう」

渦巻く風は、すでに暴風と化していた。

その中で輝く聖剣を前にしても、黄金の騎士は怯まない。

あまつさえ。

「では、こちらにも相応しい物を出さなければな」

そう言つて、ひどく異質な”剣”を背後の空間から引き出した。

・・・それが、悪寒の正体だった。

現れた剣はどの伝承にも存在しない。

ヤツの背後にあつた宝具、その全ての形状を看破できる自分でさえ、あの剣がなんなのか判らない。

円柱の様な剣。

三つのパーツで作られた刃は、それぞれ別方向にゆっくりと回転している。

その様は、固い岩盤を貫いていく削岩機のようなようであつた。

「これは、この英雄王しか持ち得ぬ剣だ。・・・銘などないのでな。

我はエアとだけよんでいる」

「つ・・・純粹に宝具の力比べをする、と・・・？」

収束する光。

二人の距離はたった十メートル程度。

「そうだ。なに、遠慮する事はないぞ。最強と唄われるその剣、一度味わつてみたくもあつたからな」

押し殺した笑いが響く。

「・・・いいだろう。ならば我が剣、見事受けきつてみるがいい・・・！！」

セイバーの剣が動く。

その唇が、聖剣の真名を紡ぎだす。

「出番だ。起きるがいい、エア」

ギルガメッシュの言葉に呼応して、三つの刃が音を立てて回転する。

「^{エクス}約束された”・・・”」

セイバーはわずか数秒で魔力を臨界まで注ぎ込み、最大の力で・・・

「^{カリバー}勝利の剣”・・・！！”」

一振で大河を断つ聖剣を、セイバーは気合いと共に開放する・・・

！

直前。

「^{エヌマ}天地乖離^{エリッシュ}す開闢の星”・・・”」

まったく同位の光が、エクスカリバーの一閃を受け止めた。

その、凄まじいまでの衝突。

吹き荒れる烈風は木々を薙ぎ払い、ぶつかりあう閃光は爆発する太陽となって目蓋を焼く。

世界を二つに割るのではないか、と危惧するほど拮抗した両者の奔流は、しかし。

「く・・・あ・・・！！」

白い光に包まれていく彼女の姿で、唐突に終わりを告げた。

「――――セイ、バー……？」

そう思ったほど、セイバーはズタズタだった。

遠くでは。

「く、人類最強の聖剣とやらもその程度か！ ああ、そうか、少しは手加減してやるべきだった。なにしろ相手は女子供だったのだ！」

⌈
•
•
•
•
•
•
•
⌋

「セイバー、無事か……!?」

セイバーの唇が開く。

「・・・・・・ああ、そうか。負けたんですね、私は」

ぼんやりとした声で、光のない目で俺を見て。

「・・・・申し訳ありません・・・・どうか貴方だけでも逃げてください、マスター」

血を吐きながら、ふざけた事を言いやがった。

「・・・・・・」

怒りで、視界が真っ赤になった。

不用意な一撃を受けて、俺はまだ立ち上がる事も出来ないのか。

・・・・ガチリ、と唯一動く片腕で、自らの頭を掴む。
撃鉄が下りる。

あいつを守れないなら、衛宮士郎はここで死んでしまえばいい・・・・
！

- ガキリ -

・・・・鉄の音がする。

体中の骨、砕けた箇所を鉄製の魔力が補強していく。

限界など無視してありったけの魔力を生成し回転させる・・・・！

「・・・・なに」

足音が止まる。

あれだけ愉快そうだった男の嘲笑が止まる。

「な・・・シロウ・・・？だめだ、そんな事をしたら体が・・・！」

必死に体を起こそうとしながら、セイバーが叫んでいる。

・・・それで最後の力が灯った。

立ち上がる。

言う事を聞かない体は限界以上に注がれた魔力によって動き出す。
今にも途切れそうな意識を繋ぎ止め。

敵を阻む。

背後には倒れたセイバーがいる。

武器。武器があればいい。

箒の柄なんて急造のものじゃなく鍛え上げられた強い武器がいる。

それも極上、俺には不相応の剣、そうだ、あいつが持っていた武器
でならきつと・・・

「・・・投影、トレース開始オン」

アーチャーの双剣を想像する。

無理でも作る、どんな犠牲を払ってでも作る。

そうだ、考えている余裕はない、なんとしても偽装しろ、偽物だろ
うと文句はない。

たとえこの身が朽ち果てようとも。

次に目を開けた時、両手にはアイツの双剣があった。

ようけかんしょう 陽剣干将・いんけん 陰剣莫耶・ばくや

デタラメに複製された剣は、それでも持ち主に自らの存在を提示する。

剣を構える。

竹刀より遙かに重い剣を両手に握り、目の敵を睨む。

「ば・・・止めてシロウ、この男はそんな・・・」

セイバーの声を振り払って、一歩前に出る。

・・・間合いは四間。

ギルガメッシュはわずかに目を見張った後、くつ、と愉快げに笑い。

「・・・殺すか」

感情のない声でそう言った。

「- - - - -!」

打ち下ろされた剣の一撃を咄嗟に防ぐ・・・!

「・・・・・・・・つつつつ!」

初撃が突風なら、続く連撃は暴風だった。

「は・・・・・・・・く、つ、ぐ・・・・・・・・!」

弾くだけで精一杯だ。

だがそれも長くは続かない。

段々と剣の先見に間に合わなくなる。

「・・・・・・・・雑種。見苦しいにも程がある」

ヤツは腹ただしげに俺を睨み、わずかに後退した。

「あ・・・はあ、はあ、は・・・」

・・・助かった。

あのまま続かっていたら、あと数秒と持たなかっただろう。
大きく息を吐いて、なんとか呼吸を整える。

・・・と。

「薄汚い偽物め。戯れは終わりだ、あの世で我に逆らった事を懺悔するがいい！」

アイツの手に乖離剣が握られた。

「・・・・・・・・」

これではセイバーも巻き込まれる。

なら、せめて守らないと。

セイバーを守ると誓った。

そう、俺はセイバーを守りたかった。

いつも抜き身の剣のような彼女を傷つけないよう、彼女の為にならなければ・・・

気が付けば、右手には、剣の様な物が握られていた。

「な・・・に？」

それは誰の声だったのか。

絶対の勝利者である黄金の騎士が僅かに後退したのと同じ時。

「シロウ、それを・・・！」

セイバーが、俺の手を取っていた。

そして、エクスカリバーを超える、触れる者を全て振り払う光の渦が繰り出された。

・・・巻き起こった光が止む。

傍らには寄り添ったセイバーの姿。

目前には目を見開き、わずかに血を流すギルガメッシュの姿があった。

「・・・・・・・・」

俺が作り出した何かをセイバーが使い、ギルガメッシュの剣を打ち破ったのだ。

光は光を押し返し、今まで無傷だったヤツに手傷を負わせたのか。

だが、致命傷には届かなかったようだ。

「……雑種ごときが……この我の命を脅かしただと。この血の代価、貴様の命ごときであがなえると思うなよ!？」

……恐ろしいまでの殺気。

全てを殺さねば気が済まぬという殺気を放ったまま。

「^{エヌマ}天地乖離す」

俺達に最後の一撃を加えようとした瞬間。

「おっと、こつから先は俺が相手をするぜ、王様」

どこかで聞いた声と共に、ギルガメッシュの顔に誰かが蹴りを入れた。

「ぐふっ……」

蹈躑を踏んでよろめくギルガメッシュ。

その蹴りを入れた人物は俺達の前に着地した。

月光に照らされて現れたのは俺達にも見覚えがある男だった。

「「アヴァンジャー!!!」」

「無事でなによりだ、士郎に死なれちゃあ困るんでね、こうして救援にきた次第さ」

間一髪の所でアヴァンジャーが助けてくれた。

何故、俺達を助けてくれたのかは判らないが、これで多少状況が改

善された。

だが、アヴェンジャーの力を持ってしても、あの男に勝てるかどうか。

足蹴りにされたギルガメッシュは憤怒の表情でアヴェンジャーを睨む。

「おのれ、王の顔を傷つける雑種が二人も現れようとは！その身、屍も残さぬと知れ！！」

ギルガメッシュは”王の財宝”ゲート・オブ・バビロンを展開して、アヴェンジャーに射出する。

無数の宝具がアヴェンジャーに迫ろうとした刹那。

「残念だったな、俺の宝具はおまえにとっては第二の天敵なんだよ！！」

言い終わると同時に須佐能乎スサノオが発動した。

そして絶対防御と王の財宝との戦いが始まった。

再び同盟成立

その戦いは端から見れば異質なものだった。

ゲート・オブ・バビロン
王の財宝から放たれた宝具は須佐能乎スサノオの防御によってことごとく弾かれていた。

「突破できぬだど？」

ギルガメッシュはアヴェンジャーから現れた須佐能乎スサノオの防御を突破できない自らの財宝か、目の前に迸る魔力かに驚愕していた。
対するアヴェンジャーは飄々としながら。

「英雄王さんが誇る、自慢の宝物庫がこの程度か、案外大した事ないな！？」

「貴様・・・その減らず口を閉じろ！！」

アヴェンジャーの挑発じみた物言いに怒りを露にするギルガメッシュ。
ユ。

だが、このままでは埒が明かないと思ったのかギルガメッシュは乖離剣を取り出し。

「天地乖離エヌマす開闢エリッシュの星」

乖離剣から放たれた凄まじい魔力の奔流が迫る。

エクスカリバーをも圧倒した空間断裂が須佐能乎スサノオに直撃した。

この場にいる誰もがアヴェンジャーの敗北を予想したかに思えた。

しかし、土埃が晴れた場所には左手に鏡のような盾を掲げた須佐能乎スサノと傷一つ無いアヴェンジャーが姿を現す。

・・・ギルガメッシュの顔が驚愕に歪む。
自分の最強の一撃を防がれたのだ。

つまり、自分にはこの男を倒す手段が無いと言う事だ。

「雑種ふぜいを我が倒せんだと・・・・・・・・ふざけるな!!」

恥も外聞も無く、ギルガメッシュが吼えた。

アヴェンジャーは須佐能乎スサノオを解除すると。

「・・・今回は士郎を助けるだけが目的なんでな、これ以上戦う様なら俺も全力をもって答えよう」

突然の発言に皆が驚愕とした。

確かにアヴェンジャーは防御をただけで攻撃は一切していない。
即ち全力ではないと言う事だ、だとしたらどれほど破格な英雄なのだ。

だが、ギルガメッシュからすればプライドを傷つけられ侮られたのだ。

素直に引き下がる訳も無く。

「認めぬ!! 我は王であるぞ。背を向けるなど在り得ぬ。貴様などこの世界から消滅させてくれる!!」

再び乖離剣を構え魔力を回転させると。

「やれやれ、仕方が無いな。ならばその命、神に返すがいい」

アヴェンジャーは腰から草薙の剣を抜き掲げる。

剣は碧色に輝き大気は振動する。

両者が同時に踏み出したが先に先制したのはギルガメッシュだった。

「天地乖離^{エヌマ}す開闢^{エリッシュ}の星――！」

先刻と同じ空間断裂がアヴェンジャーに迫る。

今回は須佐能乎^{スサノオ}を発動していない、直撃すればその身は跡形も残らないだろう。

だが、またもや皆の目が見開かれる。

「アマノムラクモノツルギ
天叢雲剣――！」

アヴェンジャーの剣が一閃する。

気合い一閃で振り落とされた剣は空間断裂を切り裂いた。

その光景にギルガメッシュは恐怖を示し、セイバーと士郎は愕然としている。

断ち切られた魔力の渦からアヴェンジャーが飛び出した。

慌ててギルガメッシュは乖離剣を構えるがそれより早く天叢雲剣^{アマノムラクモノツルギ}がギルガメッシュの鎧を断ち切った。

自慢の王の鎧・・・その胸部が斜めに断ち切られている。

そしてその下の体も、同じ太刀筋で切られていた。

「ガフ・・・」

口から血が漏れた。

肋骨まで断ち切られているらしい。

「ちっ、少し浅かったか!?」

完全に必殺の間合いとタイミングだったが、ギルガメッシュの乖離

アマンムラクモノツルギ
剣が寸での所で天叢雲剣を弾いたのだ。

それに加えて、黄金の鎧の防御力がギルガメッシュの命を僅かな所で繋いでいた。

アマンムラクモノツルギ
「まさか天叢雲剣を弾くとは・・・運が良かったな。その乖離剣は俺の秘剣に勝るとも劣らないようだ、使い手は三流でも宝具は一流と言っ事か」

アヴェンジャーは皮肉を口にするが、再び剣を振りぬこうと構える。構えを取るアヴェンジャーを見ながら、ギルガメッシュには何もできなかった。傷が深すぎてまともに動けないのだ。

「それじゃ英雄王さん、縁があればまた殺ろうぜ」

そう言って、アヴェンジャーは剣を振り落とした。

振り落とした剣の先にはギルガメッシュの死体はない。

アマンムラクモノツルギ
天叢雲剣は何も切る事無く、ただ虚空を通り過ぎただけだ。

「逃げた・・・いや、令呪で逃がされたか・・・」

霊体化ではない。

ギルガメツシュの気配は何処にもなくなっている。

そもそも、あのタイミングで霊体化など試みても、完全に霊体化する前に切り伏せていたはずだ。

明らかに、ギルガメツシュの意志以外のものが働いたのだ。

そしてこんな事ができるものは限られている。

マスターが令呪を使ったのだろう。

しかし、ギルガメツシュに致命傷ではないながらもかなりの深手を負わせた。

しばらくは大人しくしているだろうと判断し、残ったセイバーと士郎に振り向く。

「アイツを仕留めそこなったのは痛いが、お前達が無事だっただけでも僥倖だな」

「な、何故私達に加勢を？」

セイバーが尤もな質問を訪ねると。

「なに、今お前達に脱落されては困るんでな。それよりも士郎を治療するほうが先決じゃないのか」

セイバーの傍らに居る士郎を見ると今にも倒れそう顔をしていた。

眩暈に襲われ膝が落ちる。

緊張の糸が切れたのか、体が地面に倒れ込む。

「と、シロウ・・・!!」

咄嗟にセイバーが支えてくれた。

・・・と。

体は、ふわりと柔らかな腕に包まれていた。

「え・・・セイ、バー・・・?」

・・・意識が持たない。

度重なる投影で、磨耗しつくした精神は、いますぐに眠りを欲している。

・・・それは、どのくらいの強さだったのか。

セイバーはより深く腕を回して、ぎゅっと、俺の体を抱きしめ。

「
やっと思いついた。シロウは、私の鞘だったのですね」

・・・そう、深く染み入るような声で、彼女は言った。

その感触が心地よくて、残っていた意識が閉じる。

とにかく助かったと安心して、眠りに身を委ねる。

2月10日

目を覚ますと、日は昇りきっていた。

部屋は薄暗い。

「・・・外は曇りか。どうりで目が覚めない筈だ」

疲れきった体は、部屋の暗さを幸いにと十分睡眠を取ったらしい。
見れば時計は午後一時を過ぎている。

ここまで寝過ぐすと、もはや寝坊ですらない。

隣りで寝ているであろうセイバーを起こさないよう部屋を出た。
今は無理に起こす必要はない。
静に居間に向かうと。

「あら、おはよう 士郎」

「邪魔しているぞ、士郎」

いつかの光景がデジャブした。

遠坂とアヴェンジャーは居間でお茶を啜っていた。
そして俺が呟いた言葉も前回と同じだった。

「なんでさ」

またも疲れた様に呟いた。

「それにしても昨日はびっくりしたわねー、士郎が家を飛び出して一時間後には、ボロボロになったセイバーと士郎と一緒にアヴェンジャーまでいたんだもの」

遠坂は昨日の俺達の様子を聞いて呆れていた。

アヴェンジャーは苦笑しながら話を見守っていた。

説明し終え、話も終わり掛けた頃。

「で、アヴェンジャーはなんで家にいるんだ。俺達はもう敵同士じゃないのか」

今更だが何故アヴェンジャーが居るのか尋ねた。

助けてもらった恩はあるが、戦う気があるかどうか、その所をはっきりさせなければならぬ。

「安心しろ、今は戦う気はない。それよりも今は厄介な問題を解決する方が先決だ。その為にもまた同盟を組みたいのだが、どうだろう」

アヴェンジャーがそう言うと、俺は内心ほっとした。

戦いたくない事はもちろんだが、あのギルガメッシュを圧倒した力を目の当たりした身としては敵にならないだけでもありがたい。

「まあ、戦力が増える分には、私も異論はないわ。けどアヴェンジャー、その判断は貴方個人の意思、それともマスターの指示？」

「・・・一応、自分の意思だ。一度同盟を組んだ分、あんた達の方が信用できるんでな」

質問の意図は解らないがどうやら本気で同盟を組むつもりのようなのだ。

安堵して話を進める。

「じゃあ、現状を整理しよう。アヴェンジャーは俺達の仲間って事で良いとして当初の目的だった黒い影とランサーのマスター、そしてギルガメッシュについて話し合おう」

「ああ、ギルガメッシュは昨日深手を負わせた筈だからしばらくは大人しくするだろうが、俺の懸念は黒い影の方だな、実際には見ていないが、アレはサーヴァントにとっては最悪のモノだ」

「？　なんでそんな事が判るの」

「・・・いや、話を聞く限りそんな印象を感じただけだ」

「そう？それにしてもアヴェンジャー、あんた前に逢った時に比べると雰囲気が変わったんじゃない」

「・・・気のせいだろう。それよりも士郎、この家に空き部屋は在るか」

「ああ？旅館みたいに広いから沢山あるけど、どうしてだ」

「俺もこの家に厄介になろうと思ってな」

「・・・・・・・・はい？」

さらりと、とんでもない事を口にした。

確かに、以前のアヴェンジャーとは何かが違う気がする。

前は誰も寄せ付けない雰囲気放つ一匹狼のような感じだった筈だ。

「や・・・俺は構わないけど・・・理由は？」

「柳洞寺は守りに欠点があつてな、残念だが放棄したんだ。それに黒い影を探索するなら固まった方がいいと思つてな」

「放棄したつて！じゃあアイザックさんはどうするんだ」

「あいつなら黒い影を討伐するまで隠れるそうだ。まあ、それまでよろしく頼むよ」

そう言つて手を差し出すアヴェンジャー。

俺と遠坂はそんなアヴェンジャーの豹変っぷりに啞然としながら恐る恐る手を握つた。

再び同盟成立（後書き）

判る人には判ると思いますが、セリフや文章の中にはあの人・この人のセリフが多々あります。

ですから不快感を感じた方がいましたら言ってください、すぐに修正します。

気にならないと言う方がいましたら、今後同じ場面に遭遇すると思われまので、お気を付けください。

最後に不快感を感じた方に一言・・・すみませんでした！！

アーチャーの裏切り

アヴェンジャーと再び手を組んだその日の夜。

俺達はあの”黒い影”を探す為に町を探索する事になった。

最近、テレビのニュースでこの近辺で意識不明者が続出しているらしい。

遠坂が言うには魔力を抜かれたらしいとの事だ、それが黒い影にしろ、サーヴァントにしろ魔術が関係している事は明白だ。

時刻は午後十時。

搜索は個別に行った方が良くと遠坂が言ったので、今はセイバーと探索中だ。

坂道を下りて交差点に着く。

問題はこれから何処に向かうかなのだが・・・

そうこうしている内に三十分が経過した頃。

突然セイバーが、

「・・・シロウ。サーヴァントの気配です」

「・・・！それ近いのかセイバー」

「距離的には五分ほどです。・・・シロウ、指示を」

追つか様子を見るか、その選択をセイバーは求めている。
が、そんなの考えるまでもない。

「行くぞ。先導してくれセイバー」

こくり、と頷き走り出すセイバー。
その方角は東・・・昨日ギルガメッシュと遭遇した公園に向かって
いるようだった。

「く・・・・・・・・！」

公園に踏み入った瞬間、異様な気配に吐き気がした。
空気が濁っている。

軽い眩暈と、喉元の不快感に意識が割れかける。

「シロウ、アレを・・・・・・・・！」

「っ・・・・・・・・！」

公園を見据えた先には・・・

「し、士郎・・・・・・・・！？」

俺達に背を向けた状態でいる遠坂と、

「ぬ？どうやら新手がきたようじゃな」

見慣れない老人の姿があった。

「・・・・・・・・」

状況は一目で理解できた。

遠坂とあの老人は戦っている。

遠坂の足元には何か、小さくて判別できないモノが何十と散らばっている。

アーチャーの周囲にはその数倍だ。

「ほう。誰かと思えば衛宮の後継者か。いやはや、これはしたり。助っ人を用意しておくとは、遠坂の娘にしては頭が回る、しかしアーチャーとセイバーが相手ではちと厄介だな」

しがれた声で苦笑する。

俺達やサーヴァントの事を知っていると云う事は、この老人も魔術師なのだろう。

「遠坂。この爺さんは何者なんだ？」

この老人を知っているであろう遠坂に尋ねた。

「・・・間桐臓硯。私と同じ始まりの御三家であるマキリであり・・・桜の祖父よ」

間桐・・・慎二と桜の名前。

慎二が死んでなるべく考えないようにしていたが、間桐も魔術師の家系だと慎二も言っていた。

なら、この老人も桜も・・・そんな事を考えていた時。

「ほう。噂には聞いていたがあんたがマキリの吸血虫か」

後ろにはいつの間に来たのかアヴェンジャーがいた。

助かった、なににせよこの事は本人に直接聞くでしょう。

それに今はアヴェンジャーが言った言葉が重要だ。

「吸血虫？」

初めて聞く単語だ、遠坂も同じなのかこちらを見る。

「ああ、人の血を吸って若さを保ち、肉体を変貌させ、数百年を生き抜いたらしい。だが、既に死に体らしいと聞いたが・・・」

アヴェンジャーが老人・・・間桐臓硯を見ると。

「ふふ、貴様が今回のイレギュラーと言われているアヴェンジャーか。ワシの事を知っているとは驚きじゃ」

臓硯の眼光が俺達に向けられる。

「ふむ。隠しておきたかったが仕方あるまい。ワシとて、サーヴァントを三体敵に回しては生き残れんからのう」

そう言う手にした杖で地面を鳴らす。

奇怪な杖がカツン、とレンガ作りの地面を打ち付けた。

瞬間、

白い髑髏の仮面を着けた黒衣の男が老人を守るように出現した。

「アサシン・・・！！くつ、仕留め損なっていたのか・・・！！」

アヴェンジャーは黒衣の男を見ると苦苦しく呟いた。

確か遠坂の話じゃ、アサシンを倒したのはアヴェンジャーだと聞いた。

「ギ、我は必要に応じて精神を分割し個別の身体を得る宝具「妄想幻像^{ニヤ}」を持っている・・・つまり貴様が倒したのは我の一部に過ぎんだ・・・」

白い仮面の男、アサシンが笑っている。

・・・アレが、アサシンのサーヴァント。

白い面を被った、黒衣の暗殺者。

「そうか。つまり、お前を倒すには八十人のアサシンを全て倒すしかないと言う事か」

「ギ！き・・・貴様、何故我の分裂人数を知っている」

笑っていたアサシンが突如驚いた声を発した。

それは俺達も同じ気持ちだった。

一体どうな方法を使えば自分の心の内に隠している弱点が判るのだ。今更ながら、俺達は心底目の前にいるサーヴァントが怖いと思った。得体が知れなすぎる。

「ふ、無駄話はここまでにするか。・・・俺がアサシンを止める、お前達は臓硯の方を頼む！！」

「わ・・・判った」

ぎこちなく返事をするアヴェンジャーはアサシンへと詰め寄った。

「・・・同じ手は二度も効かんぞ。今度こそ死ぬがいい」

いつかの焼き回しで、同じ漆黒の外套を纏った復讐者と暗殺者がぶつかった。

アヴェンジャーがアサシンを引き付けている間に俺達は臓硯へと走り出す。

先頭はセイバーとアーチャーだ。

二人は息を合わせて臓硯に詰め寄る。

「むう。サーヴァントが二人もいたのでは勝ち目はないか・・・ならば！」

手にした杖を再び鳴らす。

するとセイバー達の動きが止まった。

「なっ・・・これは」「むっ・・・貴様」

臓硯の前に広がる黒い沼。

そこから、あの”黒い影”が這い出ようとしている。
・・・間違いない。

アレは以前、森で見た、

呪いの塊としか言えない、正体不明の存在だ。

「士郎・・・！」

「・・・っ、戻れセイバー・・・！」

大声でセイバーを呼び戻す。

その声に反応してセイバーとアーチャーが踵を返して戻る。

・・・目前にはヒタヒタと近寄ってくる”黒い影”と、笑いに歪めた間桐臓硯がいる。

「ふふ。いかなサーヴァントといえど、これの前では赤子同然じゃ」

しがれた声を一際高める老人。

黒い影を見る。

・・・アレはサーヴァントを殺すもの。

いかに強力な英霊であろうと、その身がサーヴァントとして召喚された以上、あの”黒い影”には敵わない。

それを、理由もなく漠然と理解した。

「ふう・・・このままだとオレの目的を果たすことができなくなるな」

ふと、遠坂の前にいたアーチャーが呟くと。

「
トレース・オン
投影開始」

俺と同じ言葉を呟いた。

そして、

「
トレース オフ
全工程、完了」

アーチャーの右手に歪な短刀が現れた・・・ただの短刀でないのはここにいる全員が一目で見抜いた。
禍々しい魔力を歪な刀身に立ち上らせている。

「これは”破戒すべき全ての符”^{ループレイカー}この第五次聖杯戦争にキャスターがいたならそいつの宝具になっていた物だ」

突然訳の判らない事を言い出すアーチャー。

第五次聖杯戦争のキャスター？

今回の聖杯戦争にキャスターはいない筈だ、確かにキャスターの代わりにアヴェンジャーが出ると言うイレギュラーが発生したと聞い

た。

ならアーチャーが言うキャスターとは何の事だ。

「ちょっと、アーチャー！なに一人で話してるの、どういう事なのか説明しなさい！！」

凄じい剣幕でアーチャーに詰め寄る遠坂。

するとアーチャーはいきなり”破戒すべき全ての符”ルールブレイカーで自分を刺した。

同時にアーチャーの体から紫電が迸る。

「いたっ・・・え、嘘、令呪が消えた！！」

「この短剣はあらゆる魔力による強化、物体、契約で繋がった関係、魔力による生成物などを全て“作られる前”の状態に初期化する究極の対魔術宝具。つまり、凜はマスターでなくなっただんだ」

「まさか、アーチャー」

「私は私の目的の為にだけ行動する。だが、そこにお前がいては些か面倒だ」

「やつぱり・・・なんでよアーチャー！アンタ、まだ士郎を殺すつもりなの・・・！？」

「そう、自らの手で衛宮士郎を殺す。それだけが守護者と成り果てた俺の唯一つの願望だ」

そう言って遠坂の首に手刀を入れて意識を刈り取る。
その光景をアヴェンジャーとアサシン、黒い影以外は呆然として見

ていた。

「・・・衛宮士郎。凜を返して欲しければアインツベルンの城まで来い、一日だけ待ってやる。それを過ぎれば凜の安全は保障しない」

俺はその言葉を聞いても何の反応もしなかった。
なんとなくが分かってしまった。

何故自分を殺そうとしていたか、何故こんなに対抗心を抱くのか・
・その明確な理由はわからないとしても。
そんな中、セイバーも分かってしまったのだろう。

「アーチャー、貴方は、まさか」

「・・・そうだ。お前もランサーもいつか言っていたな。オレには英雄としての誇りはないのか、と。無論だ。そんなものがあるはずがない。この身を埋めるのは後悔だけだよ。・・・オレはね、セイバー。英雄になどならなければ良かったんだ」

セイバーも言葉を失っていた。
そんな時。

「ふふ。茶番はそこまでじゃ。なにやら立て込んでいるようじゃが、お前達を逃がす訳にはいかん。マスター共々死ぬがいい」

黒い影が迫る。

セイバーも黒い影を前にして動けないでいる。

アヴェンジャーも何十体に分裂したアサシンの相手で手が回らない。
残ったのは未熟なマスターと老人、そしてアーチャーの三人だけだ。

「・・・しかたない。この場は生き残る事が先決か」

アーチャーは自然体で軽く目を閉じる。
そして27本の魔術回路を起動させ。

I am the bone of my sword. 《体は剣
で出来ている》

Unknown to Death. 《ただの一度も敗走はなく》

Not known to Life. 《ただの一度も理解されな
い》

, unlimited blade works. 《そ
の体は、きつと剣で出来ていた》

アーチャーが詠唱を終えた瞬間。

アーチャーを中心に炎が走った。

世界が作り変えられ、新たな世界が顕現する。

それは一言でいうなら製鉄場だった。

斜陽の荒野、空には大きな歯車が回り、大地は枯れ果てて不毛な姿
を晒している。

墓標のように大地に突き刺さる名剣の群れの間を駆け抜ける乾いた
風が頬を掠める・・・決して幻ではない。

間違いなく今ここにあるのは現実に存在する世界だ。

ヤツが使う干将も莫耶も、もとはこの世界より編み出されたもの。

無限とも言える武具の投影。

その、瓦礫の王国の中心に、赤い騎士は君臨していた。

「これ、は・・・」

当惑の声はセイバーだ。

「・・・固有結界。心象世界を具現化して現実を侵食する大禁呪」
ふるえる声で臓硯が呻く。

「宝具が英霊のシンボルだというのなら、この固有結界こそがオレ
の宝具。武器であるならば、オリジナルを見るだけで複製し、貯蔵
する。それがオレの、英霊としての能力だ」

その言葉に息を呑む。

そしてアーチャーの左腕が拳がる。

ヤツの背後に立つ剣が次々と浮遊していく。

アーチャーの指が臓硯、アサシン、黒い影を示す。

無数の剣が、切っ先を向けていく。

そうして、ヤツは号令を下した。

英霊エミヤ

「・・・同じ手は二度も効かんぞ。今度こそ死ぬがいい・・・」

アヴェンジャーにアサシンが迫る。

今回は姿を現しているアサシン。

その理由は恐らく・・・

すると突然別方向から投短剣^{ダーク}が射出された

「・・・やはりな」

予測していたので剣で叩き落す。

投短剣^{ダーク}が飛んできた場所を見ると。

目の前にいるアサシンと同じアサシンが居た。

あらかじめ分裂させたアサシンをあの場合で待機させていたのだろう。

「ギ、相変わらず異常な奴だ・・・ならば！」

そう言っ^{ザバーニヤ}て前にいたアサシンが数十人に分裂した。

恐らく、妄想幻像^{ザバーニヤ}で分断できる全ての人数を出したのだろう。その数は七十人を超えている。

「・・・いくら貴様でもこの数には敵うまい」

「そうかな。妄想幻像^{ザバーニヤ}には致命的な弱点がある」

「ま・・・まさか」

「そう、分裂すればするだけ個々の能力は・・・」

そう言つて魔力の籠もつた小太刀を投擲する、小太刀はその先にいたアサシンを貫通し、続けて五、六人のアサシンを貫いて魔力の粒子になつて消える。

「魂を細分化するだびにポテンシャルは下がっていく。精々今のお前は人間の少し上程の力しか出せない筈だ」

「ギ！だ・・・だが貴様が不利なのは変わらん！！」

瞬間、前後左右から投短剣^{ダーク}が投擲される。

アヴェンジャーは素早く空中に舞い上がる。

次いで空中のアヴェンジャーに投短剣^{ダーク}が迫るが、投短剣^{ダーク}が外套を貫く事はなかった。

「そんな程度の力じゃ、この外套に傷一つ付けられないぜ」

そしてそのままの状態で。

「千鳥千本！！！！」

投げ針状に形態変化させた千鳥をアサシンの集団に放つた。

千鳥千本は一本一本の威力は低いが広範囲に多数放出する事ができる。

千本はアサシンの体に刺さるが消滅までには至っていない。

だが、千鳥の電流で動きの低下は免れない。

そのまま動きの鈍つたアサシンを火遁で焼き払おうとした時、唐突に周りの風景が変わつた。

見るとアーチャーを中心に剣の群れが地面に刺さっている。

「これが、アーチャーの宝具か・・・」

状況を分析するとアーチャーは此処から離脱するつもりのようなのだ。あの夜を思い出す、アイツはアーチャーの正体を教えなかった。結局、ヤツが何者なのかは自分で知るしかないという事だ。

すると、背後にあつた無数の剣が浮遊し、アーチャーの指が臓硯、アサシンの集団、黒い影を示す。

そしてアーチャーが腕を下ろした直後、切っ先を向けた無数の剣が放たれた。

次の瞬間にはアサシンの集団は全滅していたが、臓硯は剣が体中に突き刺さりながらもしぶとく生きていた。

「ぐう・・・ここまでか・・・だが、桜の刻印虫がいれば・・・」

あまりにも凄まじい生へ執着に言葉を失っている士郎達。

だが、剣の群れから黒い影が現れた事で再び臨戦態勢を取る。

どうやら、サーヴァントの攻撃はあまり効果がないらしい。

セイバーが攻めあぐねていると。

「ふん、やはり一筋縄にはいかんか。」壊れた幻想フロックン・ファンタズム」

いつかの詠唱を紡ぎ剣が爆発する。

剣から離れている俺には幸いダメージはないが、士郎とセイバーは吹き飛ばされ地面を滑る。

爆発したのはアサシンの集団と臓硯、黒い影の周囲にあつた剣だった。それで深刻なダメージはないようだ。

セイバーは素早く起き上がるが士郎は気を失ったようだ。

爆発の影響なのか黒い影の姿はなかった。

アーチャーはセイバーに何事かを言い残し、凜を連れて離脱した。
その直後、展開されていた固有結界が解除され、夜の静かな公園に
戻った。

数分後、セイバーはアーチャーの目的が士郎を殺す事だと教えてく
れた。

セイバーは士郎を抱えると。

「私はシロウを家に連れて帰りますが、貴方はどうしますか」

俺は多少気になった事があったので、それを確かめる為に一緒に同
行すると伝えた。

2月11日

懐かしい夢を見る。

それは正義の味方が口にした矛盾。

”・・・全ての人間を救う事はできない”

自分にとって、全ての人間を救えるだろう男にそう言われた時、真
っ先に口にしたのは反発だった。

”・・・いいかい士郎。正義の味方に救えるのは、味方をした人間
だけだ”

その言葉も嫌いだった。

自分にとって正義の味方そのものの人物に、そんな現実を口にしてほしくなかった。

犠牲なんてださなくてもいい。

切嗣^{オヤジ}だって、それにずっと懂れていた筈だから、

” ああ・・・安心した ”

その最後に背を向ける事はできない。

だが、その在り方は歪だ。

誰も傷つかない世界なんてないし、

誰も傷つかない幸福なんてない。

そんな都合のいい理想郷はこの世の何処にもありはしない。

・・・たとえば、この夢が歪な物であろうと。

これからも信じていくと決めたのなら、決して、自分だけには・・・

「・・・」

目を覚ます。

起きてすぐに時計を見て、いまが六時過ぎだと確認する。

「目が覚めましたか、シロウ」

セイバーは正座したまま、穏やかな声で言った。

俺が意識を失った後、そこでずっと見守っていてくれたのか。

「ああ、起きた。体も問題ないよ」

そう言って起き上がる。

「・・・行くのですか、シロウ」

唐突に、セイバーがそんな事を言ってきた。

判りきった事なんで、無言で頷きを返す。

「・・・判りました。では、私も同行します。ですがシロウ、貴方ではアーチャーを倒せません。アーチャーは私が止めますから、シロウは」

「逆だセイバー。アーチャーとは俺がやる」

彼女は、不安げに俺の視線を受け止め。

「・・・それは駄目だ、シロウ。アーチャーは貴方の・・・」

そう、辛そうに言い淀んだ。

「判っている。アイツが何者なのかは、たぶん、出会った時から解っていた」

顔を合わせた時から、理由もなく反発した。

こいつだけは認めないと、意固地になって嫌ってきた。

・・・それも当然だ。

人間誰だって、自分の過ちを見せられたら目を背けるしかないんだから。

「シロウ」

「・・・頼む、セイバー。アーチャーとは俺がやる。その時、どんなっても手を出さないでほしい」

「・・・いいえ。そのような事をする必要はありません、シロウ。

貴方がそう望むのなら、私はそれに従いましょう。この身は貴方の剣になると誓ったのです。その行く末を、最後まで見届けます」

「ありがとう。セイバーが見守ってくれるんなら、心強い」

「はい。私も貴方がそうであってくれて嬉しい、シロウ」

返ってくる笑顔。

これで、出陣の支度は整ったようなものだ。

衛宮の家を後にする。

すると背後から。

「・・・おい。俺を忘れるなよ」

「え？」

「は？」

二人して振り返る。

そこにはアヴェンジャーが腕を組んで佇んでいる、そしてその傍らにはイリヤの姿があった。

・・・あ

そう言えば、アヴェンジャーとイリヤの事をすっかり忘れていた。

「・・・すまん、忘れてた」

思わず本音が出た。

「おいおい、何度も助けてやった恩人を忘れるなよ」

アヴェンジャーは深いため息を漏らす。

イリヤはと言うと。

「私の城に行くんでしょ、なら案内してあげるね。お兄ちゃん」

笑顔のまま俺に飛びついた。

「アヴェンジャー、イリヤスフィール。貴方達が何を企んでいるかは知りませんが私たちに同行しても得るものはありません」

「ああ、気にするな。ただの観客だと思ってくれ。別にアーチャーと士郎の戦いにも手は出さないから安心しろ」

「私も一人で留守番だなんてイヤよ」

確かにイリヤを一人にするのは危険だ、かと言ってアヴェンジャーは同行する気満々だ。

なら目が届く範囲にいた方が安全だと考え。

「・・・判った、好きにしてくれ」

頭を抱えながら了承する。

「ああ。俺も気になる事があってな、この先の展開は俺でも予測できないんだ」

「シロウの事も気になるけど、何故かアーチャーの事も気になるのよね」

「・・・まあいいか。それよりも行くぞ。出来るだけ早く城に行かなきゃいけないんだからな」

セイバーと二人で歩き出す。

イリヤはアヴェンジャーに抱えられ、俺達と距離を保ったまま、付いてくる。

太陽が頭上に登っていた。

この森を抜けた時、衛宮士郎はその男と対決しなくてはならない。勝算はなく、戦えば敗北するのは必定だ。

ひとたび剣を合わせれば、無残に殺されるだけだという事も判っている。

「・・・・・・・・」

そしてアインツベルンの城にたどり着き城門を抜ける。

この先にある戦いがどんなモノか理解しているのか、セイバーの貌は暗かった。

彼女を悩ませているモノは、オレでありヤツだった。

廃墟となった大広間。

「来たか。随分と遅い到着だな、衛宮士郎」

冷めた声が響く。

聞き慣れた声は二階から。

崩れた階段の上に、その男の姿があつた。

赤い外套は遠く、男の姿は白い情景に霞んでいる。

アーチャーの役割を与えられたサーヴァント。

弓兵でありながら弓兵でなく、多くの宝具を持ち、惜しげもなくそれらを散らしていった矛盾した存在。

手にする宝具は全て複製であり、無限に剣を製造する事があの男の宝具だった。

・・・その真名に、自分だけが気づかなかつた。

英霊はあらゆる時代から召喚される。

過去に該当する者がいないのなら、その英霊は未だ誕生していない未来のモノだ。

「ようやく気づいた。あのペンダントが二つある筈がない。アレは、元々」

「そうだ。アレは命を救われたおまえが生涯持ち続けた物。この世に二つとない、遠坂凜の父の形見だ」

ヤツの言う通り、衛宮士郎があのだ PENDANT を生涯持ち続けたというのなら、それは。

「英霊の召喚には必ず触媒が必要となる。凜は何も触媒を持っていなかったが為に私とは何の関係もないと思いこんだ。だが、偶然で呼び出される英霊はいない。必ず物質的な縁が必要となる。凜が触媒を持っていないのなら・・・呼び出された英霊がそれを持っていたということだ」

・・・だから、それが答えだ。

ヤツが遠坂の PENDANT を持っていた以上、その正体は一つだけ。

・・・英霊エミヤ。

未来の自分。

未熟な衛宮士郎の能力を完成させ、その理想を叶えた男が目の前にいる英霊の真名だった。

赤い外套の騎士・・・アーチャーは階段からオレを見下ろしている。

「アーチャー。遠坂はどうした」

「凜ならそこにいる。持っていくがいい。」

アーチャーの示した先、階段の奥に凜は気を失って倒れていた。その姿を見て安心した。

瓦礫を踏み碎いて前に進む。

向かうは階段の下、この広間の中心だ。

セイバーとアヴェンジャーは一步も動かず、俺とヤツの戦いを見守る。

「手出しはしないか。それは有難い。ここまで来てセイバーやアヴェンジャーに邪魔されるようでは、凜と契約を切った意味がないからな」

「俺はこの戦いの結果が気になってな、世界は怨嗟と希望のどちらを選ぶのかを知りたいだけだ」

「・・・・・・」

アヴェンジャーは何やら問答をしているようだ。がセイバーは目を伏せていた。

彼女はわずかに息を呑み、遠く階段に佇む男へと声を返した。

「ええ、私も手出しはしません。何があるうと、貴方とシロウの戦いの邪魔はしない」

「それは結構。ならば安心して小僧を始末できるというものだ」

「しかし・・・ひとつ聞かせてください。どうして貴方はシロウを殺そうとするのです?」

「どうしてもこうしてもそいつがオレを認められないのと同じようにオレもそいつを認められないだけだ」

「そんな筈はない!! 貴方はシロウだ。エミヤシロウという人物の

理想、英雄となった姿が貴方ではないのですか。ならどうして自分を殺すような真似を！！」

「何故そう思う。いまそこにいる未熟な衛宮士郎とエミヤと呼ばれた英雄となった私は違う存在だ。そうでなければ同時に存在することなどできない」

「それは貴方がサーヴァントになったからでしょう？時間軸にとられない守護者なら、自身が生きた時代に呼び出されることもあると聞きます！貴方はシロウだ。シロウがずっと思い描いて努力して叶えた姿が貴方のはずだ！なのにどうしてそんな違うものに！？」

「・・・・・・」

答えず、ヤツは階段を下り始める。

「何故なのです。アーチャー。私には解からない。守護者とは死後、英霊となって人間を守る物と聞いた。その英雄が何故、自分自身を殺そうなどと考えるのか」

「・・・・守護者、だと？」

それに何か感じ入るモノがあつたのか。

ヤツは歩を止めて、無表情でセイバーを見下した。

「違うよセイバー。守護者は人間を守るものではない。あれはただの掃除屋だ。オレが望んでいた英雄などでは断じてない」

その声のには先ほどまでの物とは違っていた。淡々とした声には嘲笑と憎悪が込められていた。

「アーチャー・・・？」

「ああ、オレは英雄になった。衛宮士郎が望んでいたような正義の味方になったんだ」

――正義の味方。

誰一人傷つける事のない誰か。

どのような災厄が起きようと退かず、あらゆる人を平等に救えるだろう、衛宮士郎が望んだ誰か。

それに、

あの男は成れたというのか。

「ああ、確かにいくらかの人間を救ってきたさ。自分に出来る範囲で多くの理想を叶えてきたし、世界の危機とやらを救った事だってあったよ。英雄と、遠い昔から憧れていた地位にさえ、ついには辿り着いたこともある」

「英雄に辿り着いた・・・なら貴方は報われたのですね？少なくともここに居る貴方はエミヤシロウの理想を叶えられたのでしょうか？なら悔いなどないはずですよ」

訴える声に力はない。

・・・彼女は気づいている。

自らの言葉がそうであって欲しいという、願いでしかない事に。

「理想を叶えた、か。確かにオレは理想通りの正義の味方とやらになったさ。だが、その果てに得たものは後悔、残ったものは死のみだった」

「殺して、殺して、殺し尽くした。己の理想を貫くために多くを殺し、無関係な人間の命なぞどうでもよくなるぐらい殺して、殺した数の数千倍もの人間を救ったよ」

「――――」

セイバーは言葉を失ったまま、愕然とアーチャーを見上げる。それは己の鏡像を見たような貌でもあった。

「―――そう、そんなことを何度繰り返したかも分からないんだセイバー。俺は求められれば何度も戦い、争いがあると知れば命を賭して戦った。何度も何度も、思い出せないほど何度もだ。・・・だって仕方がないじゃないか。何を救おうと救われない人間は出るし、戦いはいつまでも起こり続ける。そんなものがある限り正義の味方はあり続けるしかないんだから」

その言葉は誰に宛てたものか。

騎士はゆっくりと階段を下りながら、かつての己を告白する。

「だから殺したよ。一人を救うために何十もの願いを踏みにじり、その踏みにじったものを救うためにさらに多くを踏みにじった。今度こそ終わりだ、今度こそ誰も悲しまないとつまらない意地を張り続けた」

「けど終わらなかった。争いはどこにでも目についた。争いのない世界なんて望んでなどいなかった。ただオレはせめて自分の知りうる世界では誰にも涙して欲しくなかっただけなのにな」

・・・それは。

紛れもなく、衛宮士郎^{じばんじろう}の願いのカタチ・・・

「だけど一人を救えば視野が広がってしまっただ。一人を救えば十人。十人救えば次は百人。百人の次は、さて何人だったか。そこでようやく悟ったよ。衛宮士郎の抱いていたものは都合のいい理想論だと気づいた」

「・・・それは、何故」

「判りきつた事を訊くなセイバー、君ならば何度も経験した事だろう。全ての人間を救う事はできない。国を救う為にほんの少しの間を見殺しにする、なんていうのは日常茶飯事だったろう？」

「・・・・・・・・」

押し黙る声は、反論する意思を奪われていた。
赤い騎士の言葉は、セイバー自身の闇でもあったのだ。

「そう、席は限られている。幸福という椅子は、常に全体の数より少ない目しか用意されない。その場にいる全員を救う事など出来ないから、結局誰かが犠牲になる。・・・それを。被害を最小限に抑える為にいずれこぼれる人間を速やかに、一秒でも早くこの手で切り落とした。それが英雄と、その男が理想と信じる正義の味方の取るべき行動だ」

誰にも悲しんで欲しくないという願い。

出来るだけ多くの人間を救いたいという理想。

その二つが両立し、矛盾した時・・・取るべき道は一つだけだ。

正義の味方が助けられるのは、味方をした人間だけ。

全てを救おうとして、全てを無くしてしまうのならせめて、
一つを犠牲にして、より多くの物を助ける事が正しい、と。

「大勢を救うのが正義の味方だろう？誰も死なないようにと願いな
がら多くのために一人には死んでもらった。誰も悲しまないように
と言いながら何人かには絶望を抱かせた。そのうちそれにも慣れて
ね、オレは自分の救おうとした人間だけ助け、敵対したものは速や
かに皆殺しにした。犠牲になる誰かを容認することがかつての理想
を守り続けた」

「それがこの俺、英雄エミヤの正体だ。・・・そら。そんな男は今
のうちに死んだ方が世のためだとは思わないか？」

そうだ。

正義の味方が助けられるのは、味方をした人間だけ。

・・・だが。

その言葉に逆らったのは、果たして誰だったのか。

「それは嘘です。たとえそうだったとしても、その”誰か”を貴方
自身にして理想を追い続けたのではないですか？」

「・・・・・・・・」

騎士の足取りが止まる。

ヤツはわずか。

一度だけ、苦々しげに眉を曇らせた。

「貴方は理想に反したのではない。理想に裏切られて道を見失った
だけではないのですか？そうでなければ・・・自分を殺して罪を償

おうとは思わない」

「・・・・・・・・」

皮肉げに歪んでいた笑みが消える。

騎士は凍り付いた貌でセイバーを直視したあと。

「・・・・は。はは、はははははははは」

心底おかしい、と。

はじけるように笑い出した。

「くく、ははは！いや、これは傑作だ。オレが自分の罪を償う？馬鹿な事を言うなよセイバー。オレには償うべき罪などないし、そんな無責任なものをだれかに押し付けたこともない」

騎士は、あくまで冷静に見える。

声は小さく、くぐもった笑いだけが広間に響く。

「ああ、そうだったよセイバー。確かにオレは何度も欺かれ裏切られた。救ったはずの相手に罪を被せられたこともある。死ぬ思いで争いを収めてみれば争いの張本人だと押し付けられ最後には絞首台だ。そら、オレに罪があるというのならその時点で償っているだろう？」

「な・・・・嘘だ・・・・アーチャー、貴方の最期は・・・・」

「・・・・ふん。まあ、そういう事だ。だが、そんな事はどうでもよかった。初めから感謝をして欲しかった訳じゃない。英雄などともてはやされる気もなかった。オレはただ、誰もが幸福だという結果

が欲しかったただけだ。・・・だが、それが叶えられた事はない。生前も、その死後も」

くぐもった笑いは既がない。

ヤツから漏れる言葉には、もう、憎悪しか含まれていなかった。

「守護者とは、” 霊長の存命 ” のみを優先する無色の力だ。力は高き処にありて、人の世が滅亡する可能性が生じれば世に下る。・・・それが奴隷である事は知っていた。死後、己が存在を守護者に預けたモノは輪廻の枠から外れ、無と同意になるのだと」

「それでも、誰かを救えるのならそれでいい。かつてのエミヤシロウはその誓いを守れなかった。なら・・・守護者となって” 人間の存亡 ” とやらを食い止める一端になるなら、それでいいと思ったのだ」

「・・・だが、実際は違う。守護者は人など救わない。守護者がする事はただの掃除だ。既に起きてしまった事、作られてしまった人間の業をその力で無にするだけの存在だった」

「ソレは人を救うのではなく、世界に害を与えるであろう人々を善悪の区別なく無くすだけ。絶望に嘆く人々を救うのではなく、絶望と無関係に生を謳歌する部外者を救う為に、絶望する人々を掃除するだけの殺戮者。・・・馬鹿げた話だ。それが、今までの自分^{オレ}と何が違う？」

・・・何も変わらない。

むしろ絶望が増したただけだ。

自分一人の力では叶わないから、より大きな力に身を預けた。だが、その先も結局は同じだったのだ。

その力ならば叶うと思つた事なのに、その力はヤツがした事を、更に巨大にしただけのモノだとしたら。

「・・・アーチャー。貴方は、ずっと、そんな事を」

「それも慣れたよ。人間は繰り返す。どんな時代でも強者が弱者を奪い尽くすのだ。そして、それが最も効率のいい繁栄だと思い知らされた」

「俺は何度も何度もこの手で守りたいと願つたはずの人たちを焼き払つたよ。そう、何度も、何度もだ」

「・・・ああ、何度も見てきた。意味のない殺戮も、意味のない平等も、いみのない幸福も・・・！オレ自身が拒んでも見せられた。守護者となつたオレには、もはや自分の意思はない。ただ人間の意志によつて呼び出され、人間が作ってしまった罪の後始末をさせられるだけだつたからな」

それが、ヤツが辿り着いた結末だつた。

人間が生み出した欲望を消す為だけの存在。

誰かを救うのではなく、救われなかった人々の存在を無かつた事にするだけの守護者。

何度も何度も。

自らの手で滅びようとする人間の業を目の当たりにし。

それを、ゴミのように焼き払ってきた。

一人でも多くの人間を救うのだと。

その思いだけで英雄になつた男は、結局・・・ただの一度も、それ

を叶える事がなかったのか。

「・・・そうだ。それは違う。俺が望んだ物はそんな事ではなかった。俺はそんな物のために守護者になったのではない・・・・・・！！！」

あそこにいるのは、とうに磨耗した残骸だった。

繰り返される人間の醜さと、己の愚かさの果てに衛宮士郎は絶望した。

「俺は人間の後始末など真つ平だ。だが守護者となった以上、この輪から抜け出す術はない。・・・そう。唯一つの例外を除いて」

冷めた瞳に揺るぎない殺気が灯る。

ヤツの目にセイバーはいない。

アーチャーの目的はただ一つ、自身の消去だ。

だが、ヤツが死んだところで輪の外にある”座”に在るえみや本体は消えない。

守護者となったモノに消滅などありえない。

それはもとより『無』、この世界の輪に無いモノを殺した所で意味はない。

・・・だが。

もしヤツが消えられるとしたら、それは一つだけ。

英雄となる筈の人間を英雄になる前に殺してしまえば、その英雄は誕生しない。

「・・・それは無駄ですアーチャー。貴方は既に守護者として存在しているでしょう。ならもう遅い。今になって英雄となる前のエミヤシロウを消滅させた所で、貴方自身は消えはしない」

「そうかもしれん。だが可能性のない話ではあるまい。過去の改竄だけでは通じないだろうが、それが自身の手によるモノならば矛盾は大きくなる。歪みが大きければ、或いは――ここで、エミヤという英雄は消滅する」

「そんなことは分からないでしょう？」

「ああ、そうだ。セイバー、これはただのやつあたりだ。いずれ道化となり下がる衛宮士郎に対しての」

そうして、赤い騎士は広間に降り立った。

瓦礫で埋め尽くされた広間には俺とヤツだけが立っている。

俺とアーチャーを隔てるものなどない。

あと数歩詰めればもう後戻りはできない。

だがその前に一つだけ訊いておくべきことがあった。

「アーチャー、おまえ、後悔しているのか？」

「無論だ。俺・・・いや、お前は正義の味方になぞなるべきではなかった」

「・・・そうか、それじゃあ、やっぱり俺たちは別人だ」

「なに」

「俺は後悔なんてしないぞ、どんな事になったって後悔だけは絶対にしない。だから・・・絶対にお前の事も認めない。お前が俺の理想だって言っんなら、そんな間違った理想は、俺自身の手でたたき出す」

「・・・その考えそのものが元凶なのだ。おまえもいずれオレに追いつく時が来る」

「来ない。そんなもん絶対に来るもんか」

「ほう。それはつまり、その前にここでオレに殺されるという事が」

「・・・・・・・・・・」

敵に踏み込む。

もはや剣を打ち合える間合い。

お互いに武器はない。

俺とヤツは徒手空拳のまま対峙する。

「解っているようだな。オレと戦うという事は、剣製を競い合うという事だと」

「トレース・オン
投影開始」

俺とヤツの両手に双剣が握られる。

「・・・・・・・・・・」

一步を踏み込む。

きちり、と。

踏み込んだ足元で、瓦礫が軋む音がする。

・・・それが開始の合図になったのか。

「オレの剣製に付いてこれるか。僅かでも精度を落とせば、それが
おまえの死に際になるう・・・！」

――対峙した剣が奔る。

一対の武装、四つの刃は磁力で引き合ったように重なり、弾け合った。

英霊エミヤ（後書き）

一応これからの話の肝になると思い原作から殆ど牽引しました。

この話の内容は今後の設定に関わるかもしれないので文章を長くしてしまいました、長い活字で皆さんにご迷惑を掛けた事をお詫びします。

余談ですが昨日、この話を完成間近まで作ったのですが、急な停電で文章は全て消えてしまい、凄く気落ちしました。

他にも似た経験でサブタイトルを入れ忘れたり、ボタンを押し間違えたりして文章が消える事がありました。

ですから皆さんも十分お気を付けください。

体は剣で出来ている

- ガキン -

同じ剣、同じ剣戟が交差する。

衛宮士郎の一閃とヤツの一閃は全くの同等。

だと言うのに、衝突を重ねる度に刃は欠け、体は深手を負っていく。

- キン -

- パリン -

止めた筈の一撃が貫通する。

左の干将はヤツの干将によって碎かれ、凶器は横殴りに俺の体を一閃した。

- ザシュ -

「は・・・づうう、う・・・！」

身を捻って躲すも、薄皮一枚とはいかない。

「く・・・そ・・・！」

痛みを罵倒でかみ殺し、踏み込んだ敵に右の莫耶を叩き落とす・・・！

- パリン -

「な・・・・・・・・」

それも砕かれ、防がれた。

「・・・・おまえの干将とオレの干将が同等とも思ったか？おまえはまだまだ基本骨子の想定が甘い。いかにイメージ通りの外見、材質を保とうが、構造に理がなければ崩れるのは当然だ」

再び闘ぎ合う。

その中でヤツから剣技を模倣^{トレース}し、その複製技術を手に入れる。

それが自分に馴染むのは当たり前だ。

ヤツの技術は、長い年月の末に得た。『衛宮士郎にとって最適の戦闘方法』に他ならない。

「投影による剣製ではそろそろ限界だろう。・・・わざわざアレを見せてやったというのに、未だそんな勘違いをしているとはな」

勘違い・・・・？

そのモノ、言われた所で知ったことか。

「・・・・・・・・！」

剣戟が迫る。

双剣ではない、尖った角のような剣が心臓を貫きに来る・・・・！

- ガキン -

「ぐっ・・・・・・・・！」

間合いを離す。

手にあるのは、咄嗟に複製したヤツの剣。

「は．．．はあ、はあ、はあ、は．．．！」

赤い外套が翻る。

ヤツは一息で間合いを詰め、その一角剣を突き出してくる。

・キン・

・パリン・

「っ．．．．！」

一撃で破壊された。

急造、加えて初めて投影した剣など、ヤツに及ぶべくもない．．．！
だが。

こちらは空手だと言うのに、ヤツはその一角剣を投げ捨てる。

「オレはおまえの理想だ。敵う筈などないと、理解できる筈だ」

「はあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．」

残った魔力を回路につき込み、その中で動揺する事なく八節を組み上げる。

「――――トレース、完了」
オフ

手にする物はヤツの双剣。

「ふ……あああああああ」

・ヒュン、ヒュン、ヒュン、ヒュン・

振るう。

残った体力、その全てが燃え尽きるまで、絶え間なく攻め続ける。

・ガキン、キン、ガキン、キン・

双剣を迎え撃つ物はやはり双剣。

アーチャーは獲物を干将莫耶に替え、一步も退かずに俺の連撃を防ぎきる。

「ふん……ならば問おう衛宮士郎。おまえは本当に、正義の味方になりたいと思っっているのか？」

「何を、今更……俺はなりたいたんじゃなくて絶対になるんだよ……！」

「そう、絶対にならなければならない。何故ならそれは、衛宮士郎の唯一つの感情だからだ。逆らう事も否定する事も出来ない感情。……例えばそれが自身の裡から、現れた物でないとしても」

「……な」

「オレにはもはやおまえの記憶などない。だがそれでもあの光景だけは覚えている。一面の炎と充実した死の匂い。絶望の中で助けを請い、叶えられた時の感情。衛宮切嗣と言う男の、俺を助けた時に見せた安堵の顔を」

「っ！・・・」

「そうだ。お前は唯一人助けられた事で、助けられなかった人々に後ろめたさを感じていたわけじゃない。ただ切嗣に憧れたただけだ。あの男の、お前を助けた顔があまりにも幸せそうだったから、自分もそうなりたかっただけ」

・・・そう。

あの時、救われたのは俺の方じゃない。

「・・・・・・・・」

「そう、子が親に憧れるのは当然だ。だがおまえのそれは行きすぎだ。衛宮切嗣に、衛宮切嗣がなりたかった物に憧れるだけなら良かった。がだ、最後にヤツはおまえに呪いを残した。言うまでもないだろう。それがおまえの全てだと言ってもいい」

”・・・・・・・・じいさんの夢は、俺が”

・・・それが答えだった。

その瞬間に、衛宮士郎は正義の味方にならなくてはならなかった。自分の気持ちなどどうでもいい。

ただ、幼い頃から憧れ続けた者の為に、憧れ続けた者になろうとしただけ。

「気づいているのだろう、士郎。おまえの理想は只の借り物だ。衛宮切嗣が正しいと信じたモノを真似ているだけにすぎない」

「・・・それは」

「正義の味方だと？笑わせるな。誰かのためになると。そう繰り返して来たお前の想いは、決して自ら生み出された物ではない。そんな男が他人の助けになるなどと、思い上がりも甚だしい！」

剣が奔る。

罵倒を込めた双剣は、かつてない程の勢いで繰り出された。

-ギン-

叩きつけられる衝撃。

華麗だった剣筋は見る影もなく、ただ、力任せに打ち付けられた。

「は……」

「そうだ、誰かを助けたいと言う願いが綺麗だったから懂れた！」

繰り出される剣を受ける。

莫耶は砕かれた。残る命綱は干将のみ。

「故に、自分から零れ落ちた気持ちなどない。これを偽善と言わずに何と言っ！」

その干将も歪に折れ曲がり、存在そのものが薄れかかっている。

「この身は誰かの為にならなければならないと、脅迫概念に突き動かされてきた。それが苦痛だと思う事も、破綻していると気づく間もなく、ただ走り続けた！」

- - - 繰り返される否定。

それが届くたびに、心は戦闘を放棄しかける。

「だが、所詮は偽物だ。そんな偽善では何も救えない。否、もとより何を救うべきかも定まらない……！」

- ガキン -

「が……！」

弾き飛ばされる。

バーサーカーもかくやという一撃は、たやすく衛宮士郎の体を弾き飛ばす。

消えかかった干将を地面に突き立てて、体を預ける。

「は……あ、はあ、は………」

干将を杖代わりにして、前に倒れ込む体を両手で押さえる。

「その理想は破綻している。自分より他人が大切だと言う考え、誰もが幸福であって欲しい願いなど、空想の御伽噺だ。そんな夢を抱いてしか生きられぬのであれば、抱いたまま溺死しろ」

「……………」

武器は消えかけ、体は立っている事自体が奇跡。

- ……ここに勝敗は決した。

いや、そんなものは、初めから決していた。

衛宮士郎では、英霊エミヤに敵う道理などない。

「・・・ざけんな」

「何」

「ふざけんなコンチクショウ!!」

俺は屈しそうになる心を奮い立たせる。

「
、体は」

自らに胸を張る為に、その呪文を口にする。

「体は剣で出来ている《I am the bone of my
sword》」

知らずに呟いていた。

死に掛けの体を奮い立たせる。

そして存在が希薄だった陽剣干将が確かな実像を帯びていく。

「貴様、まだ」

「誰に負けてもいい・・・でもお前には、自分にだけは負けられない
!!!」

・キン、ギン、ガキン・

それは、ありえない剣戟だった。

今までのどの攻撃よりも重い一撃がアーチャーの剣を軋ませた。

「貴様
」

「・・・じゃない」

「なに？」

「・・・なんかじゃ、ない!!」

「っ・・・！そこまでだ。消えろ　　!!」

アーチャーは長剣を振り上げる。

「ギン」

必殺の筈のそれは、容易く弾かれた。

今まで一度も防ぎきれなかった筈の相手が、アーチャー渾身の一撃を当然のように弾き返した。

「・・・間違い、なんかじゃない!!・・・決して間違いなんかじゃないんだから・・・!!」

「　　」

ざくんと。

胸に刃物が突き刺さる。

手にした干将は、確実にアーチャーの胸を貫いていた」

「アーチャー、何故」

「・・・」

アーチャーは答えない。

いかに胸を貫かれたとはいえ、サーヴァントなら十分に反撃できるだろう。

だが、ヤツの両手は下げられたまま動く気配はない。

「俺の勝ちだ。アーチャー」

見据えたまま、宣言する。

赤い騎士は、一度だけ目蓋を閉じ。

「・・・ああ、そして、私の敗北だ」

アーチャーは遠くを見つめ、言い聞かせるように呟いた

アーチャーの胸から剣が引き抜かれる。

その光景を見て、アヴェンジャー。いや、うちはサスケは理解した。

・・・やっと判った。

何故、アイツがアーチャーの事を教えなかったのか。

俺と同じだからだ。

アーチャーはかつての自分と似ている。

そして、その結末も。

俺は復讐、アーチャーは怨嗟。

士郎とナルトは希望。

どちらもその在り様は同じだ。

かつての俺はその結末を見届けられなかった。

だからアイツは俺にこの戦いを見届けさせたかったのか。
と、その時。

「士郎、無事・・・ってアーチャー、アンタその傷どうしちゃったのよ・・・!」

階段の奥から凜が目を覚ましたのか。

士郎の剣に貫かれてできた傷をみて声を漏らした。

「・・・途中から見ていたくせにつくづく甘いものだな。彼女がもう少し非道な人間なら、私もかつての自分になど戻らなかったものを」

そう言いながら、少しも不快なものない苦笑をしているアーチャー。
!

それはかつての自分を見ているようだった。

気が抜けたと言っべきなのか、それとも憑き物が落ちたと言っべきなのか・・・

「ともあれ決着はついた。おまえを認めてしまった以上、エミヤなどと言っ英霊はここにはいられん。・・・敗者は早々に立ち去るでしょう」

凜に別れも告げずに。

俺は言葉を伝える事も出来なかった。

確かに傷は深く、マスターもいないのでは、アーチャーは消え、英霊として同じ場所に戻る事に

「っ
」

突然の出来事だった。

アーチャーはいきなり士郎を突き飛ばす。

その直後。

アーチャーの体に無数の宝具が突き刺さり、血飛沫を上げた。

俺は宝具が放たれた場所を見る。

そこにいたのは、二日前に俺が深手を負わせた筈のギルガメッシュがいた。

黄金の鎧には醜い剣撃の跡が残っており、修復は間に合わなかったようだ。

断ち割られた鎧の先にある肉体は、完全に回復している。

「楽しませてもらったぞ。偽者同士、実にくだらない戦いだっ」

「ギルガメッシュ！！なぜあなたがここにいる！？」

セイバーが踊り場に立っている姿を見て視線を厳しくした。

「なに、お前を迎えに来ただけだ。そのついでに目障りな偽物どもを始末しようかと思ってな。」

英雄王は士郎たちを見下していった。

「さて、理解したか。それが本物の重みというものだ。だが、なかなか滑稽なものが見られたぞ？なんら真作をもたぬ貴様らなど疾くゴミになるがいい」

無数の宝具を、広間へと打ち出した。

それを。

「ふざけるなよ・・・貴様に人の希望を踏み躪る資格はない!!」

俺は須佐能乎^{スサノオ}で宝具の群れを弾く。

ギルガメッシュは俺を見据えると忌々しげに顔を歪めた。

「雑種！王の体を汚した罪、その身で購うがいい!!」

再び王の財宝を展開し宝具を打ち続ける。
ゲート・オブ・バビロン

「アヴェンジャー！加勢します。貴方は宝具の防御を・・・」

「おっと、おまえの相手はオレだぜ」

近づくセイバーを朱色の魔槍が遮る。

広場に現れたのはランサーだ。

「っ・・・貴様はランサー！」

「悪いな、あの金ピカを助けるのは本意じゃないが、何分手を組んでいるんでな。おまえの相手はオレだ」

セイバーはランサーに足止めされ、俺はギルガメッシュの相手をするようにした時。

広場に新たな声が響く。

「ふっ、実に面白いモノが見れた。この運命を神に感謝せねばなるまい」

その声は入り口から発せられていた。

黒い僧衣を身に纏ったその神父はゆっくりと姿を現す。

「あ・・アンタ、綺礼！なんでアンタがいるのよ！」

「なに、マスターとして自分のサーヴァントに同行するのは当然だろっ」

神父は歪んだ笑みを浮かべ歩いてくる。

「エセ神父。アンタならやりかねないと思ったけど、ほんとにマスターだったなんてね」

「そのわりには落ち着いているな、凜。だが、今はお前に構っている訳にはいかんのでな」

そう言うと、僧衣を翻し、広場の隅にいたイリヤを捕まえる。

イリヤは必死に抵抗するが、綺礼の掌底によって気を失う。

「これで、聖杯の器は手に入った。後は大聖杯で”この世、全ての悪”を降臨させるだけだ」
アンリマユ

恍惚とした顔をした神父はそのまま城を離脱した。

士郎と凜はその後を追いかけるが、そこで再びあの黒い影が出現した。

それは、あたかもあの神父を逃がすかのように。

「ぐずぐずするな！イリヤは死んでも守れ！！」

剣が刺さったまま、アーチャーが叫ぶ。

だが、黒い影は触手をアーチャーへと伸ばしその体を貫こうとする。
それを見た瞬間、咄嗟に体が動いた。
ギルガメッシュの宝具を無視してアーチャーを突き飛ばし、触手が
俺の体を貫いた。

同化

アヴェンジャーは終わっていた。
まだ息はあるし、出血も少ない。

・・・それでも、アヴェンジャーはもう戦えないと判ってしまった。
俺と遠坂はアヴェンジャーとアーチャーに駆け寄るが。

「来るな！早く離れろ！！」

アーチャーが怒声を上げる。
その意味をすぐに理解した。

・・・黒い影が躍動している。

それはあたかも水風船のように膨らんでいた。
もういっぱいではちきれそうな風船に、まだ水を注いでいるようだった。

それを見たランサーとギルガメッシュはこの場を離れる。
風船は限界以上に膨れ上がり、破裂して、その中身を外にぶちまけるような厭な予感^{イメージ}が

「ま　　ずい」

巻き込まれる。

ここに居ては完全に呑み込まれる。

セイバーは俺と遠坂を連れて離脱を計るが、二人を運ぶには至らなかったのか。

そのスピードは目に見えて遅い、広場の入り口に差し掛かった時。

- パアン -

視界が黒に染められる、だが、次の瞬間には光が戻り城門が見えた。どうやら間一髪、無事に城から脱出できたようだ。傍らにはセイバーと遠坂が城を見ている。俺も城を見ると、其処には黒一色に染め上げられた城があった。それが黒い影の影響かと思われたが、どこか違う。そう、あの黒い炎には見覚えがある。

「アレは・・・アヴェンジャーの宝具か！」

かつて、どんな攻撃も無効化したバーサーカーを骨も残さず灰にした、アヴェンジャーの宝具。

その黒い炎が城を囲むように燃え盛っている。

黒い影が開放した魔力の波はその黒炎によってせき止めている。

一分もしない内に城は崩れ、黒い炎は瓦礫に埋まった。

しかし、それでも黒炎の勢いは止まらない。

更に三分が経過した頃。

・・・黒い炎が消えていく、どうやら全てを燃やし尽くしたようだ。広場を見ると黒い影は跡形もなく消えていた。

そしてアーチャーとアヴェンジャーの姿を確認した。

どちらも半死半生の状態だ。

「アーチャー!!」

「アヴェンジャー!!」

急いで駆け寄る。

アーチャーは全身をギルガメッシュの宝具で貫かれていたが、まだ僅かに現界できているが。

アヴェンジャーは絶望的だった。

至る所が欠けおり、体の節々から何故か淡い緑色の光の粒子が溢れている。

最初はバーサーカーが消えた時に見た、体が魔力の粒子になっているのかと思っていたが様子が違う。

アヴェンジャーの体は血も出ているが血と一緒に光の粒子も噴出ししているのだ。

「ふっ……俺の体は……ちょっと特殊だね……」

息も絶え絶えなアヴェンジャーが俺に言う。

「それよりも……頼み……がある」

「なんだ？言ってくれ！」

「俺を……アーチャーの所……まで運んでくれ……」

何故と思ったが、アヴェンジャーの頼みだ、無下には出来ない。言われた通りにアヴェンジャーをアーチャーの元へと運ぶ。

アーチャーは遠坂に優しい笑みを浮かべている。

「答は得た。大丈夫だよ遠坂。俺も、これから頑張っていくから」

風に乗ってそんな声が聞こえた。

「アーチャー……！」

凜が駆け寄ってくる。

「　　っ！」

私の姿を見て凜は言葉に詰まっている。

既に足から消え始めていて、時間が残されていないと言うのに・・・いや、だからこそ彼女は何を言ったらいいか判らなくて混乱する。

「ク・・・」

「・・・な、何よ。こんな時だったのに、笑うことないじゃない」

凜はむつと上目遣いで私を見上げてくる。

たったそれだけのことで、凜は調子を取り戻してきたらしい。

「いや、失礼。君の姿があんまりにもアレなものでね。お互い、よくもここまでボロボロになったと呆れたのだ」

いつもと変わらない、何の変哲もないやり取りだが、私の顔には笑みが残っている。

そんな私に凜は言った。

「アーチャー。もう一度私と契約して」

契約すれば、以前のように魔力供給をする事が可能となる。

そうすれば、このまま消えなくて済むかもしれないが。

「それは出来ない。私にその権利は無いだろう。それに、もう目的がない。私の戦いは、ここで終わりだ」

私の願いは、自分を殺す事だった。
それに意味を見出せなくなった以上、ここにいる理由も、戦う理由も無い。

「・・・けど！けど、それじゃ。アンタは、いつまでたつても・・・」

救われないじゃないの、と。

言葉を飲み込んで少女は俯いた。

そんな、泣きそうな顔の少女を私は見たくなかった。
彼女にはいつも笑顔でいてほしかった。

「まいったな。この世に未練はないが　　凜」

だからこそ、私は言おう。

いつだって前向きで、現実主義者で、とことん甘い。
いつも私を励ましてくれた少女に。

「私を頼む。知つての通り頼りない奴だからな。・・・君が支えて
やってくれ」

と他人事のように別れを告げる。
それは、この上ない別れの言葉。

「・・・アー、チャー」

未来は変わるかもしれない。
凜が衛宮士郎の側にいてくれるのなら、エミヤという英雄は生まれ

ない。

そんな希望が込められた、遠い言葉。

もう既にエミヤと士郎は違う存在。

私が守護者から解かれることはない。

けれど、それを承知で凜は頷いてくれた。

だからこそ、何もしてあげられなかった少女に。

生前も、死後でさえも私を救ってくれた少女に。

私は満面の笑みを返すのだ。

「うん、わかってる。わたし、頑張るから。アンタみたいに捻くれたヤツにならないよう頑張るから。きつと、あいつが自分を好きになれるように頑張るから……！だから、アンタも」

今からでも自分を許してあげなさい。

言葉にはせずとも、その想いは私の心に確かに響く。
それがどれほどの救いになったか。

「答は得た。大丈夫だよ遠坂。俺も、これから頑張っていくから」

私は穏やかな顔で、在りし日の衛宮士郎のように笑った。
そして潔く消えようとした時。

「待て……アーチャー……」

苦しげな声と共にアヴェンジャーを抱える衛宮士郎の姿を見た。
士郎はアヴェンジャーを私の傍に横たえた。

「アヴェンジャーの頼みだ。お前に何か用らしい、聞いてやってくれ」

そう言つて私の目を見る。

私は答えを得た、もはや衛宮士郎を殺す理由はない。

それにアヴェンジャーの事は謎のままで。

最後に話をするのも悪くないかもしれん。

私は横たわるアヴェンジャーに近づく、屈み込みその姿を見据える。アヴェンジャーの傷は深く生きているのが不思議なくらいにボロボロだ。

何故か血と一緒に淡い緑色の粒子がこぼれている。

それを調べる為に解析を試みる。

「・・・驚いたな。貴様は受肉しているのか、それにこの魔力量。・・・一体何者なんだ」

解析して判つたのは、光の粒子は高純度の魔力で心臓から全身に供給されている事と肉体が完全に受肉している事、そして眼に特殊な能力がある事が判つたのみだ。

受肉している事にも驚いたが、何より目を睜つたのは、今も粒子になつて溢れている魔力だ。

下手をすれば聖杯に匹敵する程の量と純度だ、これ程までの魔力を有する者を私は見た事がない。

そう思案していると。

「アーチャー・・・もし守護者を・・・やめられると・・・言つたら・・・お前は・・・どうする・・・」

「なに？」

「ある・・・方法を・・・実行すれば・・・お前を英霊の座・・・から解放させる・・・事ができる・・・だが、替わりにある使命を・・・果たさなければならぬ・・・それが対価だ・・・」

「馬鹿な！！そんな事はありません！」座”にいる本体は、いかなる干渉を受け付けぬ筈だ！」

そう、守護者とは輪廻の枠から外れ、”座”に本体が置かれる。そして本体がある限り、守護者として様々な世界に召喚され掃除屋として駆り出される。

いかなる事があっても”座”にいる本体に干渉する事は出来ない。だから絶望した、そして過去の自分を恨む事で正気を保ってきた。それを解放できるだ・・・

「ああ・・・確かに・・・普通ならな・・・だが・・・俺とお前は・・・例外だ・・・」

「・・・何故、貴様となら例外なんだ」

「ふっ・・・俺達は同じ運命を・・・押し付けられた・・・いわば似た物同士なんだよ・・・」

「似た物同士？・・・どういう意味だ」

「俺も・・・守護者という・・・意味だ・・・」

「貴様も守護者だと！」

俺と同じというのか。
この男が。

士郎と凜は目を見開いて話を聴いている。

「そつだ・・・お前の言う・・・守護者とは・・・少し違うが・・・やる事は同じだ・・・」

「・・・貴様の言う、”座”から消える方法とは何だ」

「ああ・・・簡単だ・・・俺と同化・・・すればいい・・・」

「なに！？貴様と！？」

「同化と言っても・・・意識と体の統合だ・・・基本的な人格はお前の物だ・・・俺は記憶と能力そしてこの体を・・・与えるだけだ・・・」

「それが何故”座”の消滅を意味するのだ」

「同化する事で・・・お前の存在を・・・俺に移し替える・・・同時に”座”にいる本体も・・・俺に統合され・・・本体は・・・”座”から消える・・・筈だ・・・急げ・・・お互い時間がない・・・」

確かにこのままでは、消えるのもあと僅かだろう。

この世に未練はないが、凜達の行く末を見守りたい気持ちもある。だが、一つだけ聞いておきたい事があった。

「・・・貴様は何故、俺に肩入れする」

そつだ、これが最もな疑問だ。

わざわざ自分から消滅するような事を行うなど、なにか罫があるのではないかと疑うのは当然だ。

「言っただろ・俺達は似た物同士だと・その在り様も、生き方も・俺と良く似ている・だが、俺は答えを見る事は出来なかった・だから、見てみたい・お前の答えを・・・」

要領を得ない答えだが。

その気持ちだけは嘘偽りがないと確信した。

「・・・いいだろう。試してやる、だが、少しでも気に入らなかったら、すぐに出て行くぞ・・・!」

「ふっ・・・いつてくれるぜ・・・人が好意ですばらしいプレゼントを・・・やろうというのに・・・」

「それで、同化するにはどうしたらいい。そもそも同化など出来るのか？」

「安心しろ・・・守護者同士で同じ境遇、同じサーヴァントだ・・・これ程の適格者はそうはいない・・・」

「ふん。今は信用してやろう。それで、これからどうするんだ」

「ああ・・・基本人格になるお前が俺の体に手を置くだけでいい・・・」

「そう言っただけでアヴェンジャーの体に手を乗せる。その光景を士郎達は見守る。」

特に、凜は話を聞いていたのか不安げに見守る。そして、

アヴェンジャーから淡い緑色の粒子が立ち上り。アーチャーとアヴェンジャーを包み込んだ。

同化（後書き）

次は今までの謎が解明される話です。

これまで長い間、衛宮士郎の視点が続きましたが、これからサスケ中心に話が進むと思われます。

それに伴って小説を修正する所が多々あるかもしれませんがご了承ください。

では、更新を期待して待っていてください！！

うちはサスケ（前書き）

一応オリジナル設定で進めました。
判りにくい所が多々あると思われるのでご了承をお願いします。

うちはサスケ

アヴェンジャーの記憶が流れ込んでくる。

それは復讐に満ちた記憶だった

幼い頃、実の兄　うちはイタチの手で一族を皆殺しにされた。

自らの全てを奪った兄を葬る事を使命として、自分の命をも賭す覚悟をする。

そして、はたけカカシ率いる第七班の所属になり、ナルトやサクラとの交流の中で徐々に彼等に心を開いてゆき、対等な仲間・友人として認めと心を通わせ、仲間意識を育んでいった。

だが、再会したイタチに戦いを挑むも全く相手にされず、昔から一向に縮まっていけない自分と兄の実力差を痛感した。

深い絶望感とイタチの興味がナルトへ向けられていた事への嫉妬心により復讐を焦り始める。

その後、大蛇丸の元へ誘いを受け、仲間の顔を思い浮かべ迷うが、サスケは力を欲するあまり里を抜け大蛇丸の下に行く事を決意した。制止しようとするナルトを最終的に終末の谷で対峙し。

激闘の果てに、万華鏡写輪眼を会得する為には最も親しい友を殺さなければならぬというイタチの言葉を思い出すが、結局ナルトを殺すという選択はせず、イタチに言われるままでなく自らのやり方で復讐のための「力」を手に入れる事を決意し、そのために大蛇丸の元へ向かう。

二年後、木ノ葉へ連れ戻しにアジトへ乗り込んできたナルト達と数年ぶりに再会したが、ナルトと心通わせることは無かった。

自分の命と体は大蛇丸に差し出す事でイタチを葬れるのであれば構わないと大蛇丸が転生の手段として執着していることも甘受してい

たが結果的に病に侵されていた大蛇丸が万全でなく、いよいよ転生の時期かというタイミングで叛旗を翻した。

大蛇丸との戦いの末、転生の儀式によって肉体を吸収されそうになるが、写輪眼の瞳術で術を跳ね返し、逆に大蛇丸のすべてを乗っ取った。

そして、うちはイタチが所属している組織「暁」を探す為に、同じ組員のデイダラと戦闘。

両者満身創痍の状態になるまで戦ったが、デイダラの自爆で辛くもサスケの勝利に終わった。

その戦いでの傷を癒した後、実兄イタチと再会、激しい戦いを繰り広げる。

しかし、イタチが勝利を目前にして力尽きたことにより、兄弟対決は終焉を迎えた。

その後、うちはマダラにより保護され、イタチにまつわる真実をマダラから聞き、兄の尊さを実感した。

この時、サスケの両眼は「万華鏡写輪眼」を開眼した。

復讐のために生きてきたサスケにとってその行動の全ての動力源であったイタチの死を皮切りにすべては彼がサスケの為にした行動であったことや、イタチが一族を殲滅させた木ノ葉の真実をうちはマダラから告げられる。サスケの心を深い憎悪と怒りが一気に爆発、増長させ。結果、全ての根本である木ノ葉そのものへの復讐を決意する。

そして、新たな火影が復讐の対象であるダンゾウに決まったこと、間もなく五影達が緊急会議を開くという事をマダラから知らされると、その現場でダンゾウを討ち取るという意味を示して、会議の会場へと向かった。

マダラの手引きでダンゾウとの対決に臨むが。

いかなる決定打もうちは一族でも禁術とされているイザナギで無効化するダンゾウに苦戦するが、発動時間の制限という弱点を突き攻撃を当てることに成功する。

仲間を人質に取られたが、仲間ごと千鳥で貫き勝利する。

仲間を見限り始末しようとするが、サクラやカカシの介入で一旦留まる。

再三の説得を試みるカカシだったが、サスケはこれを拒絶する。

サクラやカカシを殺そうとするがナルトの介入で失敗する。

その後はナルトと一触即発状態に陥りナルトの抱いている思いを聞くことになる。

木ノ葉への復讐の前にナルトと決着を付けることを決め、戦いに備えてイタチの眼を移植する。

そして、ナルトと決着を付けようと再び対峙するが。

戦いの最中、兄の願いやカカシとナルトの言葉を思い出し、戦いに敗れた。

だが、気持ちは穏やかだった。

復讐を諦めナルトと共にやり直そうと手を取り合おうとした時、マダラによって時空間の狭間に送られ意識を失った。

ここまでがアヴェンジャー・・・うちはサスケの過去だった。

復讐に生きた人生は結局・・・ただの一度も、報われる事がなかったのか。

いや、最後にサスケは救われた。

だが、答えは得ていなかった。

確かにサスケの在り方は自分と似ている。

私は答えを得たがサスケは最後までそれを得る事が出来なかった。

そして、記憶は聖杯戦争へと続いていく。

目が覚めると伊織とその娘に出会い、聖杯戦争に参加する為にサーヴァントとして召喚されたと聞かされた。

自分が既に死んで魂だけになり、伊織の弟を抛り代にして受肉し、自分が消えてからの結末を聞かされた、叶えたい願いも無かったので伊織に恩を返す為に聖杯戦争に参加する事となった。

そして、冬木に到着しランサーやバーサーカーと戦い、衛宮士郎と手を組むなど、この記憶は私も知っているが肝心の守護者になった記憶が見つからない。

そうしている内に、私と戦う場面が再生され、私が撤退すると。

「予定が早まりましたが今から全てをお話します」

伊織の雰囲気が変わる。

そして、

「はい、全てはあなたが召喚される一月前の事です・・・・・・・・・・」

全ての謎を知る男は静かに語りだした。

「私には特殊な能力があるのです、それは別の時空間に存在する自分に思考と感覚の一部を共有する《意識共有》という能力があります」

「？　つまり何なんだ」

「簡単に言えば、未来を知る事が出来る能力です、この能力は数分〜数日後の自分の意識を共有することで、これから起こる事を記憶として体験できる、いわゆる未来視が可能なのです」

「そうか！それでお前の行動はいつも裏目に出ないのか」

未来を知る事が出来る、それは凄まじい能力だ。ある意味ではこの男に勝てる者はいないだろう。

たとえ自分が死んでも少し前にその死に方が解かればいくらかでも回避できる、まさに驚異的な能力だ。

「はい、ただ。この能力にも弱点があります」

弱点？

とてもそうは見えないな。

「まず、最大で十日までしか意識を共有できない事と一回につき一時間のインターバルが必要なのです」

「・・・何故、インターバルが必要なんだ？」

「この能力は精神に多大な負荷を掛けるのです、思考や感覚を共有するという事は精神に二人分の意識があるという負荷を与え、そしてその矛盾を脳が理解するのに一時間もの時間が掛かるのです」

「そうか、それにしても凄い能力だ。何故、俺に黙っていたんだ」

「それを話すには、まず先程の続きを話さなければなりません」

「一月前がどうとやらの事か」

「ええ、私の能力《意識共有》は最大で十日までしか共有できないと先程、説明しましたね」

「ああ」

「あなたが召喚される前、つまり今から三ヶ月前の事です。私の意識共有は無意識の内に十日ではなく三ヵ月後に開戦される聖杯戦争の結末を共有したんです」

「つまり、聖杯戦争の勝者を知っているのか」

「・・・そうです。この聖杯戦争の勝者は衛宮士郎になる筈です」

「士郎が！じゃあ、俺は・・・負けるのか」

なんて道化だ。

わざわざ勝つ奴の手助けをしているなんて、何を考えているんだ伊織は。

「いいえ。正確に言うと、あなたはある目的の為に私が召喚したサヴァント。聖杯戦争に勝つ為に召喚したのではないのです」

「勝つ為じゃないだろ!? だったら何で俺を召喚したんだ!」

すると予想を裏切る答えが返ってきた。

「あなたを召喚した本当の目的は、私の後継者として守護者を引き継いでもらう為なのです」

守護者。

・・・あらゆる異世界、平行世界で滅びが生じる可能性がある、それを修正する為に世界の理と契約した者をその時代に送り、歪みを補正する世界の代理人。

世界の理と契約した者は魔力を無尽蔵に供給でき、長く使命を果たす為に肉体の時間を止め不老になる事ができるが半永久的に戦いの運命が待ち受ける為、後継者を選び代を変える事が出来る。

「これが守護者の全容です。私はこう見えても軽く三百歳を超えています」

とても信じられない話だった。

異世界、平行世界、世界の理との契約、どれも信じられない話だ。

「そして、あなたに謝らなければならない事があります。実はあなたに話した事は殆どが嘘なのです」

「なに！」

「まず、あなたは過去の人間ではなく。異世界の住人なのです」

「異世界・・・本当にそんな物があるのか？」

「ええ、そして私が触媒と抛り代となる肉体であなをサーヴァントとして召喚した為、あなたは此処に召喚されたんです」

「じゃあ、お前の弟だと言ったこの体は・・・」

「私がこの世界で蒼崎という人形師に依頼して作ってもらった、私を元にした人形です。人形といってもちゃんと血肉が通っている肉体です、彼女の人形師としての技術は本人と寸分変わらない程ですから安心してください」

外見が似ているとは思っていたが、まさか伊織の体を元にした人形だったとは。

ちゃんと血も出るし、感覚も人間そのものだ。

こんな事が可能なら、異世界や世界の理の事も信憑性が出てくる。だが、疑問が沸く、俺が選ばれた理由はなんだ。

「・・・一つ聞かせろ。何故・・・俺を選んだ・・・」

「守護者に必要なのは強い精神、強大な戦闘技能、そして心の闇を乗り越えた魂。この全てに合致したのがあなたです、うちはサスケさん」

「勝手に決めるな。俺はそんなモノになる気はない。悪いが俺は降

りる」

守護者なんてモノになって世界を救うだと。

正直、迷っていた。この身は闇に染まりし犯罪者、そんな男が人を助ける・・・滑稽な話だ。

そう思っている。

「・・・何故、聖杯戦争の結末が視えたのか解かりますか・・・その結末には続きがあります。衛宮士郎は最後に聖杯を破壊します。その時、ある事が起こります。」

「・・・・・・・・」

「今の聖杯は”この世、全ての悪”^{アンダー}汚染されており、破壊すれば、パンドラの箱の如く呪いが溢れ返り、この街は火の海となって焼かれるでしょう」

「なんだと!？」

街の人々を思い出す。

公園で逢った小さな女の子の顔が過ぎった。

しかし、まだ迷っていた、俺に人を救う資格があるのか・・・

「私がこれまで、衛宮士郎の補助をしてきたのは、この事態を回避する為なのです。そしてこれが世界の理から与えられた使命だと判ったのです。あなたはこれから起こる悲劇を見て見ぬ振りをするのですか!？」

「つ・・・・・・・・!!」

響き渡る怒声。

それで覚悟は決まった。

俺は一度は闇に落ちてナルトに救われた身、だったらナルトの様に人を救う為に守護者になってもいいと決意した。

「・・・そうだな、人を救うのに理由なんていらない。・・・そんな事が今更解かるなんてな、ほんとウスラトン力チだな俺は」

空を見上げる、月が夜空を照らし出していた、ふとナルトの顔を思い出す。

そして、その瞳に決意を灯らせ。

「いいぜ、守護者になってやる。それで、どうやって守護者になるんだ」

そう言つて、伊織に向き合つた。

二日後

柳洞寺で最後の確認をする。

伊織は意識共有で得た聖杯戦争の情報を俺に教えた。

バーサーカーが死ぬ事や英雄王ギルガメッシュが八人目のサーヴァントとして現れる事、間桐臓硯が暗躍している事、アサシンの真名がハサン・サッパハである事、黒い影には近づくな等を教えてもらった。

だが、アーチャーの事やそれ以外の事は教えてもらえなかった。

何故かと聞くと。

「あなたにとっては最初の試練です、自分の力で切り抜けてください。それに未来を簡単に知ってしまったら面白味がないでしょう」

「ふっ、確かにな……よし、始めるか」

「ええ、では……これからあなたに守護者の力を譲ります」
目を閉じ詠唱を唱える。

「研磨されし孤高の光が、新たに奇跡を照らし今交わりて永久の命となりて光輝け！」

詠唱が終わり、伊織の手に淡く緑色に輝く光の球体が現れる。

「これは、魔力を極限まで凝縮したエネルギー球で、いわば守護者の証です。これを選ばれし継承者へ渡す事であなは守護者となります」

凄まじい魔力が溢れている。

光の粒子は泉の様に際限なく零れていた。

「これをあなたの心臓に移します……これを受け取ったらあなたは人間では無くなります」

「ああ、頼む」

伊織は頷くと光の球体を近づけると、

「・・・一つ聞き忘れていた」

伊織の手が止まる。

「なんで、伊織は守護者を辞めるんだ。あんたの方がよっぽど守護者に向いているだろう」

「・・・言っただしょう。未来を知ってしまったら面白くないと・・・私は三百年間、守護者として使命を全うしてきました。この能力のお陰で様々な世界を救いましたが、同時に決められた運命をなぞるだけの道具に過ぎないと実感しました。そして使命に疲れこの世界に來た時、妻と出会いました」

あの優しい女性を思い出す。

恐らく、夫が人間じゃないなんて想像もしていないだろう。

「初めての感覚でした。これが恋という感情だと判り、私は震えました。そして結婚して娘を設け幸せに浸っていましたが、守護者の使命がそれを許さない。この幸せを守りたいという願いの為にあなたを召喚する決意をしました、運よく触媒の額当てと人形の体があったので聖杯のシステムを利用してあなたをサーヴァントとして召喚しました・・・これが私の全てです」

伊織は遠く懐かしむように語った。

その顔はとても穏やかだった。

「すみません。あなたに全てを押し付けてしまって」

「いや、いいんだ。というより、お前が俺を焚き付けたんだろう。」

だつたら最後までやり通せ、それが俺への償いになる」

「・・・ありがとうございます・・・さあ、いきますよ」

そしてゆつくりと光の球体が心臓に届いた。

瞬間、魔力が溢れんばかりに漲る。

これなら、天照や須佐能乎を使用しても魔力切れになる事はもうないだろう。

「よし、いい感じだ」

体の調子を確かめながら伊織に背を向ける。

これから英雄王に苦戦しているであろう士郎達を救援しに向かう為に足を魔力を通し強化する。

「では、アヴェンジャー。私は聖杯戦争が終わるまで隠れています。もし聞きたい事があったらあなたの巻物で連絡をください」

「ああ、守護者の初仕事だ、必ず成功させてやる」

そう言つて手を掲げ。

「じゃあな、伊織」

「ええ、いずれ何処かで」

背を向けたまま、アヴェンジャーは走り出した。

うちはサスケ（後書き）

サスケに過去をダイジャストに書いてみました。（殆どがWikiからの牽引ですが・・・）

その後のオリジナル設定に設定の矛盾、理論の破綻がある事に気が付いた方は遠慮なく言ってください。

決戦

目を開けると自分の周囲が光の粒子に覆われているのに気が付いた。アヴェンジャー・・・うちはサスケの記憶を見て、これが守護者の証から溢れる魔力の粒子だと理解する。

守護者の証から溢れる魔力にも驚いたが、なにより驚いたのが守護者の引継ぎが出来る事だ。

どうやら、私を知る守護者とアヴェンジャーの守護者は根源は同じだが、その在り様は全く異なる様だ。

同化が上手くいったのも守護者の根源が同じだった事が大きいのだろう。

そして、唐突に光の粒子が止み辺りは夜だが見覚えのある森が現れ、すぐ近くに凜の姿を確認した。

「ア・・・アーチャー!!」

凜が驚いた声を挙げ私に駆け寄る。

その後ろで衛宮士郎とセイバーの姿も確認する。

凜は怒ったような嬉しいような顔をして、私に詰め寄った。

「アンタ!! 無事だったならもつと早く出てきなさいよ!」

「・・・やれやれ、落ち着きたまえ凜。まだ体が慣れていないんだ、お手柔らかに頼む」

「解かってるわよ・・・て、アンタその目どうしたのよ」

凜が私の目を見て驚く。

それで私にも眼に違和感がある事に気が付いた、この感覚はまさか・

・

「
トレース オン
同調、開始」

自身の状態を把握するべく体に魔力を通す。

身体機能・・・眼球に写輪眼を確認

身体能力・・・英霊時と同等

魔術回路・・・二十七本正常稼動

魔力量・・・測定不能にまで増大

固有結界、
アンリミテッド・ブレイド・ワークス
“無限の剣製” 発動可能

” 全て遠き理想郷^{アヴァロン} ”、正常に稼動中

肉体、完全に受肉

補足、守護者の証に解析不能のブラックボックスを確認、解除は失敗

「そうか、アヴェンジャーと一緒に写輪眼も同化したのようだ・・・
この眼、お前の証として貰っておこう」

そう言つて近くにあった魔眼殺しの眼鏡を拾い、ボディーマーの上から漆黒の外套を羽織る。

外見はアーチャーのままだが、その後ろ姿はアヴェンジャーと寸分
違わぬ程だ。

凜はそんな私を見て。

「アーチャー、何があつたのか説明してくれるわよね」

その質問に衛宮士郎とセイバーが頷く。

守護者と無関係とは言えない凜や衛宮士郎には事実を話すべきだろう。

「判った。だが、こんな森の中では落ち着いて話もできん。一旦街まで戻るとしよう、言峰に連れて行かれたイリヤの事も気になる」

「・・・そうね。綺礼がイリヤを使って何かするのは間違いないわ」

凜は憮然とした顔で何かを考え込む。

奴は大聖杯で”この世、全ての悪”^{アンリマユ}を降臨させると言った。

だとしたらイリヤの居場所は恐らく・・・

「大聖杯は柳洞寺の地下に隠されている、イリヤも其処にいるのだろっ」

「柳洞寺の地下だって!」

衛宮士郎が驚いた声を挙げた。

大聖杯は英霊の召喚等をはじめとする聖杯戦争のシステムその物を司る最も重要な物だ、その場所を知る人間は限られている。

「とにかく、急ぐぞ。奴は人を陥れるための策謀に関しては敵うものはいない精神破綻者だ。どんな嫌がらせを仕掛けているか解からん」

「せ・・・精神破綻者?」

私の言葉に、きよんとするセイバー。

そんな事を言っている内に夜が明け、朝日が上ろうとしていた。

街に着いた頃には既に昼になっていた。

私達は今、衛宮邸でアーチャーの話を聞いている。

そして、話が終わり皆が難しい表情をした。

「これが、私を知るアヴェンジャーと世界の理の全てだ。ともかく今はイリヤを助けるのが先決だと思う」

・
アーチャーがイリヤの救出を提案する、その意見には賛成だけど・

「アーチャー・・・アンタは本当にそれでいいの・・・」

「・・・何がかね？」

「守護者の事よ！アンタは士郎を殺して守護者から逃れたかったんでしょ。なのにアンタはまた守護者になったのよ。それでいいのアンタは」

「・・・凜、私はすでに答えを得た。私の生涯に意味はあったのだ、はつきりとそう言える自分がいる。だから守護者であろうとなかろうと関係ない、凜達のお陰で私は目の前に不幸な人間がいればそれを救う”正義の味方”であり続けられるんだ・・・確かに、後悔も慙愧の念もある。しかし、それでも私は後悔していない」

「アーチャー……」

その顔には満足気な笑みを浮かべている。
それで私は怒る気を失くし、話を促した。

「じゃあ、確認するわね。今夜、柳洞寺の地下に奇襲を掛けるけど
目的はイリヤの救出と大聖杯の破壊よ、各自質問はある」

「凜、聖杯を破壊したら呪いが溢れるのではないのですか」

セイバーが言う。

確かに正史では、聖杯を破壊した事で呪いが溢れ街を焼いたとある。
だが、その問いに答えたのはアーチャーだ。

「いや、対策は考えてある。君は遠慮なく聖杯を破壊してくれ」

「で……ですが……」

釈然としない答えにセイバーがうろたえる、その気持ちは私も同じだ。

それを問いただそうとした時。

「む……奴め。夜を待たずに始める気だな」

柳洞寺の方角を睨むアーチャー。

その視線の先には暗雲が立ち込める柳洞寺が見える。

此処からでも判る程の異質な魔力が立ち上がっている、その魔力は
あっという間に空を覆い隠す。

その模様はまるで昼と夜が逆転したかの様だ。

「遠坂！これは・・・」

「・・・どうやら、あの似非神父は人の考えをとことん裏切るのが上手いみたいね」

私は悔しそくに唇を噛み、柳洞寺を睨む。

これから戦うであろう、兄弟弟子を倒す為にその兄弟弟子から貰ったアゾット剣を静かに握り締めた。

私達は当初の予定通り、全員で柳洞寺に向かう。

街は突然暗くなった空を見て軽い混乱が起きている。

住人は柳洞寺から立ち上がる黒い魔力を見て本能的な恐怖を感じていた。

「言峰め、魔術の秘匿をするつもりはないらしいな。いや、むしろ恐怖に歪んでいる人々を見て楽しんでいる」

あの精神破綻者は本気でこの街を焼くつもりらしいな。

柳洞寺に向かう道すがら、そんな事を考えていた。

傍らでは、私に抱えられている凜とセイバーの後に続く衛宮士郎の姿がある。

あの男はセイバーに抱えられるのは男として甘受出来ないと言い、必死にセイバーの後を走っている。

こんな状況であつても信念を捨てない事に腹ただしさを感じたが、それが衛宮士郎という男が持つ強さだと実感した。

そして、目の前に柳洞寺の山が見えてきた。

凜を降ろし、私が先頭で入ろうとすると。

「！！！」

敵意を感じ、咄嗟に横へ飛ぶ

・ヒュン・

すると、先ほどまで私がいた場所を真紅の槍が通る
その槍の持ち主は・・・

「やはり君か、ランサー」

「よ、この間の続きをしに来たぜ。アーチャー」

青い鎧を着たランサーが槍を構えて現れる。
セイバーが臨戦態勢をとるが。

「お前達は先に行け、私もすぐに追いかける」

「しかし・・・」

尚も食い下がるセイバーを私は諭す。

「セイバー、今は時間がない。あの神父が何をしてくるか解からない以上、急いだほうがいい。それに君は私が負けると思っているのかね」

不敵な笑みでセイバーを見返す。
その物言いにランサーの殺気が膨れ上がる。

セイバーは渋々ながらも剣を収める。

「凜、小僧とセイバーを連れて早く行け」

「・・・判ったわよ。けどね、負けたら承知しないからね」

「ク・・・心得た。ならば全力で応えよう」としう」

凜達がランサーの横を駆け抜ける。

門番であるランサーは凜達をあつさりと通した。

ランサーは既にアーチャーと対峙している。

少しでも凜達に意識を向ければ、次の瞬間に切り伏せるつもりだったが、どうやらワザと見逃したらしい。

「・・・意外だな。忠義に厚い番犬かと思ったが、どうやら駄がなっていないようだ」

「は、ほざいてる。単にこの仕事が気に食わないだけだ。それにあなたのお嬢ちゃんの事は気に入ってるでね」

「そうか、お互い損な役回りだな」

「まっただ」

二人して笑い合う。

これから死合うとは思えない顔だ。

ランサーの少し後方で凜が振り返る。

・・・少し餞別を贈るか。

「トレース・オン
投影開始」

手にしたのは宝石剣ゼルレツチ。

本来なら不可能である筈の宝石剣の投影はすんなりとうまくいった。守護者の証から溢れる強大な魔力とつつすらと残る記憶から宝石剣の設計図を取り出して投影した事で完璧に近い出来だ。

「凜、餞別だ。受け取れ」

それを凜に放り投げる。

宝石剣をみた凜は啞然としていたが、すぐにその意味を理解したのか階段を駆け上る。

「用事は済んだかよ。それじゃあ、そろそろ殺るか」

「よかるう、私も急いでるのでな、悪いがすぐに終わらせてもらう」

私は干将・莫耶を投影し、腕を下げる。

殺気が交差し。

「んじゃ、始めますかねえ！」

「私とアヴェンジャーがたどり着いた剣技の極致、それを見せてやるう。ランサー！」

朱槍と双剣が奔る。

三度目となる戦いは高々に雄叫びを挙げたのだった

好敵手

闇に沈む柳洞寺は、跨る巨人のように大きく、何か異質な力を感じさせる。

「・・・階段の上に力を感じます。計内の裏手にある池に、なんらかの場が作られているようです」

「いえ、柳洞寺そうちに用はないわ。上で作られている場は表向きの、ただの聖杯を欲しがるマスター用の門よ。・・・聖杯戦争の大聖杯おおもてに行こうってんなら、上じゃなくて下に行かないとね」

階段から離れ、遠坂は森の中に入っていく。

木々を掻き分けて、山を歩いていくと小川を見つけた。

「・・・小川？」

待て。

小川って事は、どこからか水が湧いているって事だ。

小川が流れ出ている源を見ると、其処には天然の洞穴があった。幾つもの岩が折り重なり、人間一人がようやく入れる程度の隙間は、まるで岩で出来たカマクラのようだった。

遠坂は躊躇いもせずに暗い闇へと進んでいく。

俺達もそれに続いていく。

かつん、という音。

水に濡れた地面を進んでいく。

地面は急激な角度で下へ下へと傾いている。

黄泉に通じるような長い路。

それが螺旋状に穿たれた通路であり、体の感覚で百メートル以上進んだと判断した時。

暗い洞穴は、一転して俺達を迎え入れた。

一人一人しか進めなかった路は、通路になっていた。

「・・・行くわよ。ここからは、自分の命を優先して」

・・・通路の奥、黒い空気の源流へと遠坂は進んでいく。
俺とセイバーも周囲に気を配りながら足を進める。

生暖かい風が頬を撫でる。

通路を抜けた先は、大きく開けた空洞だった。

横幅は学校のグラウンドほど。

生命の気配はない。

忘れられた地下の広間。

そこに、

絶対の恐怖は放つ、黒い影が佇んでいた。

空洞には黒い影しかない。

言峰も、ギルガメッシュもイリヤも姿はない。

立ち塞がっているのは、直立不動している黒い影だけだ。
だが、様子が変だ。

今まであの黒い影は無差別に襲ってきた。

それが、全く動いていない。

そして、沈黙を破ったのは遠坂だった。

「・・・ふん。そろそろ姿を現したら、間桐の後継者さん。いえ、桜と言った方がいいかしら？」

姿勢を低くしながら、遠坂はアーチャーから渡された宝石剣に手を伸ばす。

俺は佇む黒い影を呆然と見ながら呟いていた。

「桜・・・なのか・・・」

予想はしていた。

間桐臓硯は黒い影を従えていた、なら間桐の者があの黒い影の生みの親なのだろう。

臓硯がいない今、あの黒い影を操れるのは一人しかない。

けど心の何処かでは否定してあえて考えないようにしてきた。

だが、黒い影はそれに答えるように動く。

そして、影が天井まで伸び、そこから。

「ふふ。やっぱり気付いてたんですね、姉さん」

影の間から久しぶりに見る桜の姿が現れた。

しかし、その姿は普段とはかけ離れていた。

紫の髪は真っ白に染まり、眼には虚ろな光を宿し、体から溢れる禍々しい魔力は黒い影と相対した時以上の恐怖を与える。

「でも嬉しいです先輩。何度、先輩に逢っても私だと気付いてもらえなかった。けど、やっと私を見てくれた、嬉し過ぎて先輩

を呑みこみたいほどです」

クスクスと笑う桜を見つめる事しか出来ない。
そんな桜に遠坂は遠慮もなしに言う。

「あら、ずいぶんと自分を曝け出せるようになったわね、桜？ ちよつと前まで臆硯が怖くていつもオドオドしていたのにその変わり様・
・まさかとは思うけど」

「ええ、私の心臓に巢食っていたお爺さまの刻印虫は殺しました。
だから私はもう自由です、後は・・・」

虚ろな目が俺に向けられ。

「さあ、先輩・・・天の杯このわたしに溺れなさい」

そう言った瞬間、桜の周りには数体の黒い影の巨人が現れる。
黒い巨人の魔力は英霊の宝具に匹敵する程だ。
それが数体の列をなして近づいてくる。
そこへ、

「残念ね、士郎には先に私が先約を入れているのよ」

軽快な声と共に、エクスカリバーに匹敵する光の線が奔る。
黒い巨人はそれに巻き込まれるように消滅する。

「
やっぱり邪魔をするんですね、姉さん
」

苛立ちを含んだ桜の声。

視線の先には、宝石剣を構えた遠坂の姿。

恐らく先程の光の線は宝石剣の能力なのだろう。

「士郎、これは私達、姉妹の喧嘩よ。アンタはさっさとイリヤを助けに行きなさい」

威風堂々と宣言する遠坂。

その気迫に俺とセイバーは言葉を失っていた。

「嬉しいわ姉さん。私も姉さんを殺したくて堪らなかったです。だから先輩は最後にしてあげますね」

対する桜も遠坂と決着を着けるつもりなのか、俺を行かせるようだ。未だ戸惑っていると、

「さっさと行きなさい！桜は私が最後まで面倒見るわ、アンタは自分の出来る事をやりなさい」

一喝する遠坂を見て、迷いは消えた。

セイバーを連れて奥に進むと。

遠坂が何かを俺に放り投げた

「これあげるわ。私の代わりにあの似非神父を葬ってきなさい」

放り投げられた物を掴むと、それは柄頭の宝石にAZOTHと書かれた短剣だった。

見ると大量の魔力が籠められているようだ。

「そのアゾット剣は魔力を増幅させる事が出来るの。使いたい時は”AZOTH”って唱えれば其処に籠められている魔力を使えるから、もしアーチャーに追い付きたいならそれを使いなさい」

その言葉の真意に気が付く、遠坂は微笑んで俺達を見送っていた。
俺は最後に、

「　　ありがとう。遠坂には何度も助けられた、無事に帰れたら
何でも言う事を聞くよ」

「そうね・・・なら、今度の休日にデートにいきましょう。それで
許してあげるわ」

途端に桜は殺気を膨らませ、セイバーは俺の顔を不機嫌そうに見て
いる。

「ば　　わ・・・解かった、それで手を打とう　　／／／」

俺は顔を赤くし照れながら、返事をした。
遠坂は満足そうな笑みで。

「じゃあ、楽しみにして待ってるから。だから士郎も頑張りなさい
！！」

「ああ、遠坂も桜の事を頼んだぞ！！」

遠坂に背を向け、セイバーを連れて奥へと駆け出す。

「ずるいです。姉さんは、いつも先輩の心を持っていく

」

「・・・残念だけど、士郎の心にはもうセイバーがいる。だから私は自分の気持ちに素直になっただけよ」

「そうですか。なら、セイバーさんから殺さないと

」

桜は士郎が向かった方へと歩き出した。

「待ちなさい、桜。アンタの相手は私だって言ったはずよ。それとも十一年間、味わい続けた劣等感ってのはその程度なの」

ピタリ、と歩みを止め私に振り返る。

その肩は小刻みに震え。

「いいでしょう。力の差を見せてあげますね、姉さん

」

先程の黒い巨人が数倍の数となって現れる。

「お互い、妙な男に惹かれたわね。やっぱり姉妹か・・・」

嘆息して再び宝石剣を構えた。

――――

体を貫こうと無数の突きが迫る。

その動きを眼で追い、紙一重で躲す。

それが今の状況だ。

アーチャーとランサーの戦いはランサー有利で進んでいるかの様だが、実際にはランサーが焦りを見せている。

その原因はアーチャーの動きにあった。

「どうしたのかね、最速の槍も随分と遅くなったものだ」

「ち、アヴェンジャーも厄介な眼を残したもんだぜ」

今のアーチャーは写輪眼の能力と自身の戦闘経験を生かし全ての槍を躲している。

以前なら、多少なりとも傷を負わされたが、それが今はかすり傷一つない。

それは天性の能力と実戦を積み重ねて得た心眼によって完成された一つの答えだった。

どんな能力も鍛錬と努力を積み重ねる事で真価を発揮する。

故に、アヴェンジャーの能力と才能を得る事で、今のアーチャーはセイバーやランサーを超える存在となっていた。

「ようやくこの眼にも慣れてきたようだ、次はアレを試すか」

そして左眼を閉じる、その行為の意味をバーサーカー戦を偵察して見ていたランサーは槍の速度を更に上げて防ぎに掛かる。

その威力はバーサーカーを灰にする程だ、ランサーも警戒しているのだろう。

だが、次の瞬間にランサーの予想は大きく外された。槍を止めてアーチャーを睨む。

「デメエ・・・何のつもりだ」

「なに、試し撃ちという奴だ。気にするな」

怒気を含むランサーの声、それは当然の行動だ。アーチャーは天照を空に向けて放っていた。

「戯言を、貴様が何の意味もなくそんな事をするはずがなろう、アーチャー・・・いや、エミヤシロウ」

「随分と私を買っているのだな。光栄だよ、クー・フリーン」

睨み合う二人だったが、突然の雷によって中断される。空を見上げると、雷雲が立ち込め雨が降り出した。

「・・・雨は何故降ると思う」

「さあね、気にした事もないな」

「・・・地表で大気が暖められると空中に上昇気流が発生し、水滴を含んだ雲が出来る。それが雨が降る理由だ」

「」高説どうも。で、結局何が言いたいんだ」

「気付かないか？雨が降ると言う事は雷も同様に降ると言う事だ」

荒れ始める空の下…

垂れ込める雷雲…

そして乱れ落つ稲光！

「？……まさか！？」

黒雲に沸き起こる雷火。

轟き渡る雷鳴…気付いた時には頭上の雷雲から大量の雷が顔を出していた。

「そうか、さっきの空への攻撃はこの為ってか」

アーチャーは境内にある一番高い木に移動し。

手に千鳥を発動させ、それを頭上の雷雲に放つ。

「この術は天から降る雷…いかずち私はその力を君へと導くだけだ」

雷鳴と共に巨大な雷の化身が現れる。

それはまさに伝説上の生き物であった。

「術の名は”麒麟”……この術は絶対に回避出来ない。何故なら落雷は千分の一秒…つまり音よりも速い」

頭上で麒麟が口を開けている、その様は今にも獲物に飛び掛らんとしているようだ。

「は！おもしれえじゃねえか。ようは当たる前にテメエを倒しやあいんだろ！！」

サーヴァント中最速といわれる男が、地面に四肢ついて腰を上げ、スプリンターの様にゲイ・ボルク槍を携た。
そしてランサーの体から、魔力が溢れる。

「その心臓・・・貫き受ける！！」

アーチャーも千鳥を帯電した腕を掲げる。
そして、

「雷鳴と共に散れ！！！！！！」

麒麟が繋がった腕を振り下ろし。

「・・・突き穿つゲイ」

ランサーは大きく跳躍し、ゲイ・ボルク槍は空間を軋ませながら。

「死翔ボルクの槍・・・！！！！！！！！！！」

怒号と共に、その一撃を叩きつけ。

カッ

その瞬間、周囲が閃光に包まれた。
激突する紅い流星と蒼い閃光。

拮抗していた紅と蒼だが、”麒麟”が僅かに押し始め・・・

「うおおおおおおお！！！！」

突き穿つ死翔の槍ゲイ・ボルクごと、ランサーを飲み込んだ。

バチチチチチ…チチイ

時が止まったかのような閃光は数秒で終息した。

柳洞寺の境内は跡形も無く吹き飛び、無残な破壊の後を晒していた。
土煙が視界を覆い、中央に立っている人影を遮っていた。

だが、舞い上がる土煙が風に煽られていき、そこに悠然と佇む人影
を映し出した。

男は漆黒の外套を風に靡なびかせながら目前に倒れる槍兵を見下ろしていた。

「ちっ、俺の負けかよ。ま、本気で楽しめたからよしとするか」

負けたというのに、ランサーはどこか清々しい笑顔を浮かべている。
しかし体は半分まで消え、もう消滅まで数刻と迫っていた。
私は最後に最大の賛辞を籠めて、

「・・・見事な一撃だったよ。君は私が戦ったサーヴァントの中でも最高の好敵手だ、君と全力で戦えた事を誇りに思う」

「けっ。誇りなんぞない、なんて言っていた奴がどういう心境の変化だ。・・・まあ、素直に褒め言葉として受け取っておくか・・・」

首まで消滅したランサーは最後まで不敵に笑い。

「・・・あばよ、エミヤ」

「・・・さらばだ、クー・フリーン」

その言葉を最後に、ランサーの体は消滅した。

アーチャーは空を見上げながら。

「誇りか・・・確かに変わったな。・・・だが、悪くない気分だ」

誇りなど下らぬと言っていた自分が、今はそれを清々しいと思える程に変わった理由は凜と衛宮士郎のおかげだと思う。

衛宮士郎の事を認めるのは癪だが、事実なので認めてやる。

「・・・そろそろ地下に向かうか。凜達に死なれては元も子もないからな」

大聖杯に向かうべく、外套を翻し柳洞寺の森を突き進んで行った。

好敵手（後書き）

話の構成に時間が掛かり、今後は更新の感覚が徐々に遅れるかもしれません。

皆さんにご迷惑をお掛けする事を深くお詫びします。

こんな下手な小説でも皆さんの声援を胸に頑張って続けて行こうと思いますので応援、宜しくお願いします！！

姉妹

桜に見逃されて先に進む俺達が暗い闇を抜けた時、此処が地の底である事を忘れてしまうほどの空間がそこにはあった。

崖の奥には二百年間起動し続けている大聖杯の姿がある。だが、その魔力は黒く澱み、禍々しい毒を放っている。

果てない天蓋に輝く黒い太陽。

それがあの大聖杯を見た時に感じた心境だ。

「・・・行きましょう、シロウ」

セイバーの声に緊張が混じる。
・・・それは俺も同じだった。

「・・・ああ」

頷いたが首筋に、冷たい汗が流れる。
一歩踏み出す度に奔る悪寒と、息苦しいまでの圧迫感。

「大聖杯は破壊する。アレは願望器なんかじゃない、この世の全ての悪を内包した呪いの塊だ」

「はい、聖杯が私を汚す物ならいりません。・・・私が欲しかった物はすべて揃っていたのですから」

強く断言するセイバーに迷いや憂いはなかった。
なら、もう言うべき事はない。

大聖杯を破壊すれば、それで終わりだ。
けど、この戦いがどちらの勝利に終わろうと、セイバーは消える。
長く、一瞬だった戦いの日々は終わって、セイバーはこの世界から
消滅する。

・・・それに。

悔いがないなんて、言えるはずがない。

「・・・・・・・・」「・・・・・・・・」

セイバーを失う。

守ると。幸せになってほしいと思っ た相手を失う。

何日も前に。

彼女とであつたその日から、最後には別れがあるのだと知らされて
いたとしても。

「・・・・・・・・」「・・・・・・・・」

無言で歩を進める。

明確なさよならを、俺もセイバーも口にする事が出来なかった。
そして、

「・・・セイバー」

立ち止まって、セイバーへ振り向いた。

その姿を見た瞬間、彼女と居たいと言う欲望が体を駆け抜ける。
だが、それは彼女への侮辱だ、俺は最後の覚悟と共に。

「・・・行こう。これが最後の戦いだ」

今まで通り、マスターとして告げた。

セイバーは無言で頷く。

それは今まで通りの、強い意志を持ったセイバーの瞳だった。

「・・・・・・・・」

自分の選択は間違っていない。

なら、後悔などしない。

崖下へと足を進め。

もう戻れない戦いに向かっていく。

赤い光が周囲を包み込んでいた。

「・・・来たか。待ちわびたぞ、セイバー」

その極彩色の中で、金色に武装したサーヴァントが俺達……いや、セイバーを待ち受けていた。

彼女は一步踏み込み、その剣を、目の前の騎士へと向けたが、その間を俺が遮った。

「邪魔は要らぬ。その雑種、言峰に用があるなら早々に消えろ。」

「ヤツは祭壇で貴様を待っている」

言峰の事など意に返していないのか、それとも単に目障りなだけなのか、ギルガメッシュはセイバーとの対決だけを求めている。それを、

「おまえの相手は俺だ。セイバーに手を出したかったら、まず俺を倒しやがれ」

「シ・シロウ、貴方は何を言っているのです!!」

セイバーが驚いた声を上げて抗議するが、俺はそれに構わず一歩踏み出す。

それが癪に障ったのか。

黄金のサーヴァントはセイバーから目を離し、完全に俺だけを視界に納めた。

同時に、ヤツの背後が陽炎と揺らぎ、二十を超える”宝具”が、弾丸として装填される。

「どうやら貴様には思い知らせる必要があるようだ。

薄

汚い贗作者。その身をもって、真偽の違いを知るがいい

!

」

指を鳴らし、ギルガメッシュは自らの財宝を、惜しげもなく打ち出した。

黒い波が迫る。

遠坂凜というちっぴけな獲物を逃がすまいと両手を広げ、高波となつて襲い掛かる。

それを、黄金の一閃が貫いた。
既に六体。

際限なく湧き上がってくる黒身の呪いを、凜は一刀の下に両断していた。

「しつこい・・・!」

宝石の剣が七色の輝きを放ち、七体目の影をかき消した。
目前には、間桐桜の姿が見える。

「うそ・・・そんな、はず」

・・・少女の呟きと共に、無数の影が立ち上がる。
その数は先程の比ではない。

「・・・また大盤振舞ね。協会の人間がいたら、卒倒するわよ」

「・・・それを斬り伏せる姉さんはなんですか。・・・たぶんその剣のおかげでしょうけど」

疑惑の目を姉の剣に注ぐ桜。
それを肯定するように、

「当たり前よ、これはね、桜。遠坂に伝わる宝石剣でゼルレッチって言うの。まあ、要は貴女にとっては天敵ってコト!!」

・・・宝石剣が一閃される。

短剣はその軌跡通りに光を放ち、間桐桜を守る影を消滅させる。

どのような魔術・・・いや、魔法を使ったのか。

今の遠坂凜には、確かに、間桐桜に匹敵する魔力の貯蔵がある。
ストック

「っ・・・！？まだです！！」

更に影を増やす桜だったが。

「はっ・・・！」

またも光を一閃させただけで黒い影は消滅した。

「
」

目の前の光景を、間桐桜は理解できなかった。

ただもう、恐れだけで影たちを役とする。

それを容赦なく打ち払っていく光の剣。

間桐桜は怯え、混乱していた。

それ故に気付かない。

遠坂凜の額の汗。

一撃振るう度に腕の筋肉を切断していく、宝石剣からの代償に。
ペナルティ

「っ・・・貯蔵に関しちゃあ負けないんだけど、私の体が何処までもつか、か・・・」

襲いくる影を光が打ち消していく。

それを幾度か繰り返す、すると。

「は・・・あ、あ・・・」

・・・影が止まる。

大きく肩を揺らし、苦しげに吐息を漏らして、間桐桜は悠然と佇む姉を睨む。

「ふざけないで……！そんなの不公平です姉さん、姉さんばかり、どうして……！」

長く。

長く鬱積^{うっせき}し続けた、唯一の肉親に対する恨みと共に。

「そうです……！わたしは姉さんが羨ましかった……！遠坂の家に残って、いつも輝いていて、苦労なんて一つも知らずに育った、遠坂凜が憎らしかった……！」

「……………」

……姉は齒をかみ締め、妹の心を垣間見る。

「どうしてですか！？わたしは違ったのに。同じ姉妹で、同じ家に生まれたのに、わたしには何もなかった……！」

「……………」

その憎悪は。

姉である、自分に対してのものではなく。

世界と自分自身に向けられた、出口のない懇願だった。

「十一年、十一年です姉さん！マキリの教えは鍛錬なんてものじゃなかった。体に直接刻んで、ただ魔術を使うだけの道具にしたてあげた。苦痛を与えれば与えるほどいい道具になるって笑うんです」

泣いている。

泣いて縋ってくる少女を、彼女は無言で見つめていた。

「わたしだって好きでこんな化け物になったんじゃない・・・！みんなが、みんながわたしを追い詰めるから、こうなるしかかったのに・・・！」

身の内を全て曝け出した妹に姉は。

「・・・ふうん。だからどうしたって言うの、それ」

・・・可哀想ね、なんて。

彼女は同情しなかった。

「な」

「私、あんまり他人の痛みが解からないの。だから正直に言えば、桜がどんな辛い思いをして、どんな酷い日々を送ってきたかは知らない。悪いけど、理解しようとも思わないわ」

冷酷な全否定。

・・・少女の叫びは、行き過ぎてはいたが、温かさを求めただけの行為だった。

それを否定された。

怪物である自分を肯定された。

そうだったのはおまえが弱かったからだ、と。

いつも、いつも潔癖で完全だった姉が、誤魔化しようのない真実を口にした。

「姉さん

姉さんが、そんなだから

！！」

影が湧き立つ。

姉に圧され戦いを拒否しかけた少女は、絶望と共に呪いを具現化させていく。

その僅かの間に、

「桜」

「え？」

なにげない、朝の挨拶のように名前を呼ばれる。

・・・瞬間。

彼女にとって最大の武器。

何者にも替えがたい魔法使いの遺産を、ぽーん、とキャッチボールのように投げて、

「We l t 《事象》、E n d e 《崩壊》」

宝石剣は爆散する。

空洞は、一面の光に包まれて全ての影を打ち消していく。

そこを走った。

一直線に、間桐桜目指して走り抜けた。

桜は光に怯んで動けない。

遠坂凜はあっさりと間合いを詰める。

走り抜ける中、背中に隠したもう一本の短剣を握り締める。

「」

桜は反応できない。

・・・確実に殺^とった。

これでおしまい、と彼女は短剣を突き出し。

あ、ダメだこれ。

自分の敗けを、悟ってしまった。

・・・殺された。

躲す余裕などなく、あの短剣で心臓を突き刺されると理解できた。体は反撃を試みるが、絶対に間に合わない。

” 殺され、るんだ ”

それが遠坂凜の手によるものなら、ひどく当然のような気もする。でも痛いのはイヤだし、自分が死ぬのは怖いから眼を瞑った。そのまま消えてしまえば、それなりに楽だろうと少しだけホッとした。

「 ？ 」

けれど痛みはなく、終わりは来ない。

かわりに、とても温かい気持ちになる。

その正体がなんであるかに気付いた瞬間。

間桐桜は潰えた視力を取り戻した。

・・・血が流れている。

温かい人の血。お腹から、ポタポタと血を流している。

しっかりと　崩れ落ちそうな体で、自分を抱きしめる姉の体から、取り返しがつかない程の血が流れている。

「ねえ、さん？」

どうして？と少女は言った。

確実に自分を殺せた筈なのに、最後の最後で、彼女は短剣を突き出さなかった。

「・・・あーあ。土郎の事は言えないな、わたしも」

ぼんやりとした声。

それは少女がずっと懂れていた、

皮肉屋で容赦がなくて、けど温かくて優しい、遠坂凜という声だ。

凜は思う。

「・・・なんという事はないのだ。

要するにさっきの瞬間、ここ一番っていう時に気付いてしまった。

間桐桜を間近で見た途端、自分には桜を殺せないないなー、などと、当たり前のように感じてしまった。

・・・本当に呆れてしまう。

最後の最後でそんな事に気が付かされるなんて、自分のドジさ加減も筋金入りだ。

そんなのもっと早くに気付いて言うのだ。

・・・けどまあ、それも仕方ないかな、と凜は納得してみる。

「桜の事が好きだし。いつも見ていたし、いつも笑っていて欲しかった」

愛おしむように桜を抱く。

一生で一度だけの、姉妹の抱擁。

彼女は自らの腹部を貫いた妹を、ようやく手に入れた宝物のように、柔らかく抱きとめる。

「姉さん」

・・・体温が消えていく。

恨み言など一つもない。

遠坂凜は、自分の死ではなく、抱きしめた少女を救ってやれない事だけを後悔して。

「ごめんね、こういう勝手な姉貴で・・・それとありがとう。そのリボン、ずっと着けていてくれて、嬉しかった」

力なく崩れる姉。

そして、眠たげな声で。

「・・・はあ。ホントにバカだ、あたし」

「・・・まったくだ。解かっているなら直せ、凜」

同時に後ろから男性の声が響き。

「ごめんな、桜・・・お前の苦しみに気づいてやれなくて・・・」

「え？」

「遅れたけど、助けに来たぞ・・・」

凜が嘆願した様子で呟いていた。
自分でも自覚しているのだろう。

「・・・まったくだ。解かっているなら直せ、凜」

その意見に同意しながら。

エミヤシロウとしてやるべき事をする。

「ごめんな、桜・・・お前の苦しみに気づいてやれなくて・・・」

「え？」

自分の側にいた、妹のような存在・・・間桐の魔術に侵され、常に絶望を抱きながら、それを自分に見せることは一切無く慕ってくれた・・・間桐桜。

彼女を救う事が自分には出来なかった。

だが、この身が正義の味方であり続けるなら、何度だって彼女を助ける。

今更、こんな事を言える資格はないが・・・

「遅れたけど、助けに来たぞ・・・」

「セ・・・ンパイ・・・？」

桜に予め用意していた契約破りの短刀を振り上げ。

一息で、彼女の心臓がある場所を背中から突き刺した。

- パリン -

硝子が碎ける音が響き、桜は意識を失った。

あらゆる魔術効果を初期化し、サーヴァントとの契約を破る宝具は桜の命を奪わず、彼女を縛り付けていた契約だけを破戒した。影から解放された反動か、桜は眠るように横たわっている。

「どうやら上手くいったようだ。さて、大丈夫かね、凜」

桜の隣りで息も絶え絶えな凜に声を掛ける。

どうやら自分で止血したらしいが血を流し過ぎたのか、若干顔色が悪い。

「……来るのが遅いのよ。……でも正直助かったわ、桜を自由にしてくれてありがとう、アーチャー」

ごふ、と血を吐きながら礼を言う凜。

さすがにいつもの覇気は感じられない。

「喋るな、今手当てをする。」

トレース・オン
投影開始

「

私は自身の中にある鞘を投影する。

セイバーの時ほどの治癒力は発揮できんだろうが少しならば傷を癒してくれるだろう。

鞘に魔力を流し込み凜に持たせた。

鞘の治癒力で凜の傷は塞がり、顔色も通常に戻っていく。

「んっ、だいぶ楽になったわ。ありがとう」

そう言っつて鞘を私に返しに来るが。

傷が塞がっても体力は戻っていないので、足取りがおぼつかない。

「無理をするな、君は桜を看ていてくれ。……小僧とセイバーの

所には私が行く、凜は桜を頼む」

「・・・そうね、頼んだわよ。アーチャー」

この状態では足手まといと感じたのか凜は素直に応じた。
大聖杯を目指し奥へと進むと。

「アーチャー!!」

凜が私を呼び止める。

「絶対に生きて帰って来なさい、勝手に消えたら許さないからね！
」

それは、二重の意味で言ったのだろう。

一つは無事に帰って来なさいと言う事と、もう一つは黙って立ち去るなど言う凜なりの警告なのだろう。

守護者の使命を終えればこの世界から去らなければならない、その事を心配しているのだろう。

「了解した。安心したまえ、必ず戻る!!」

使命を終えた後、どうなるかは知らないが、せめて凜の元には帰ろうと心に決め、私は奥へと駆け出した。

Unlimited Blade Works

- ガガガガガガガガガアーン!!!! -

- ガキン、キン -

「っ、あ・・・!」

繰り出される剣をひたすら干将獊耶で弾く。

展開された宝具は二十を超え、その全てが矢となって衛宮士郎を碎きにかかる。

「そら、そら休んでいるヒマなぞないぞ!!」

「く、っ・・・!!!!!!」

襲い掛かる宝具を裁ききれずに体の節々が被弾する。

セイバーは齒痒そうにこの戦いを見ていた。

俺がこの戦いを見守ってくれと令呪で命令した為、助けたくても動けないのだ。

「どうした。齒応えがあるのは口先だけかフェイカー?」

何も出来ない俺の姿が気に入ったのか、ヤツはあくまで愉しげだ。

ギルガメッシュはいつも通りの慢心に満ちた視線をセイバーへと向け。

「セイバーは貴様には過ぎた宝よ。アレは王である我にこそ相応し

い、雑種如きが手に入れていいモノではない。・・・セイバー、お前の望みは過去の改変による王の選定のやり直しだったな。どうだ、我のモノになるならその願い叶えてやってもよいぞ」

「そ、それは・・・！！私・・・私は・・・」

^{セイバー}彼女は自分の国とそこに住む者達・・・そして俺の命との天秤の狭間で葛藤していた。

一を捨てる事で九を救う。

王とはそうやって国を守る物だ。

「・・・・・・・・・・」

だが・・・俺は信じている^{セイバー}彼女はそんな誘惑に負けないと。

揺れる視線が俺を捕らえ、^{セイバー}彼女がはつとした。

その翡翠の瞳が俺を・・・衛宮士郎だけを見つめる。

「それは違う・・・そういうことなのですね、シロウ」

その言葉は、俺に伺いを立てるようでありながら、まるで自分に問いかけるようでもあった。

さつきまでの動揺が、潮が引くかのように^{セイバー}彼女から抜けていく。

「ああ・・・私が愚かだった」

「何？」

紅い瞳が見開かれ、セイバーは悠然と。

「アーチャーとシロウの戦いを見て私の願いは間違っていた、私の

行いは間違っではないなかったのだと判ったのです。シロウがそれを教えてくれた、だからもう願いは必要ない！！」

その答えがよほど意外だったのか、ギルガメツシュの顔から笑みが消える。

思わずセイバーはニヤリと笑い。

「わからぬか英雄王。私は貴様のモノにはならない、願いがあるとすれば、私はシロウが欲しい。私はシロウさえいればそれだけで私は構わない。・・・シロウ、それが私の望みです」

優しい顔を俺に向けるセイバー。

その愛の告白をぶちまけられた俺はこんな状況にも関わらず顔を赤らめてしまった。

だが、その空気をぶち壊すようにギルガメツシュは狂ったような笑い声を上げた。

「ふ　　はは、はははははははは！！！！！！正気かセイバー？俺を笑い死にさせるつもりか、そんな雑種の何処がいいのだ、理解に苦しむぞ。　　もうよい、戯言は終わりだ」

ギルガメツシュは背後の王の財宝から乖離剣を取り出た。
ゲート・オブ・バビロニア

「っ　　！！マズイ・・・」

風が断層を作り上げる
エア
乖離剣は大気を巻き込みながら唸りを上げ。

「天地乖離す開闢の星
エヌマ エリッシュ

「！！！！！！」

ギルガメツシュの乖離剣^{エア}から放たれた斬風は自らの宝具を蹴散らして衛宮士郎に襲い掛かるうとしていた。

しかし、空間断裂が迫る直前。

俺の前に躍り出る蒼い影があった。

それは令呪に逆らいエクスカリバーを構えるセイバーの姿だった。

「セイ
」

言うより早く、セイバーの剣が光を放ち。

「約束された勝利の剣^{エクスカリバー}

！！！！！！」

目を覆う光が放たれ、空間断裂を相殺した。

だが、完全には相殺できず俺とセイバーは吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

俺はセイバーのお陰で軽傷で済んだがセイバーはエクスカリバーの反動で動けないでいた。

「どうしたそこまでか。我をもっと楽しませろ？」

ギルガメツシュはそんな俺達を見て嘲笑を浴びせていた。

俺は立ち上がるうとするが手足の感覚がなくなり再び倒れこむ。

「ふん、これならばアーチャーの方が楽しめたな。ヤツも贗作者だったが、その理念は俗物ではなかったからな」

必死になって動かそうとしても手足の感覚は戻らない。

それどころか体全体が言う事を聞いてくれなかった。

このままヤツの手に掛かるのはゴメンだし、セイバーを取られるのはもっとゴメンだ。

最後の意識を振り絞り力を入れようとした時。

「あぁ。そう言えばヤツも言っていたな。おまえの理想は借り物だと。自身から生み出したモノが一つもない男が何かを成そうなどと、よく思い上がったものだ」

・・・そう、その通りだ。

この思いは借り物。

誰かを助けたいという願いがキレイだったから憧れただけ。

故に、自身から零れ落ちた気持ちなどない。

この身は誰かの為にならなければならないと、呪いのような強迫観念に、ずっと突き動かされていた。

だから偽物。

そんな偽善は結局何も救えない。

もとより、何かを救うべきかも定まらない。

だが。

だが、それでも美しいと感じたんだ。

だからこそ、その理念に憧れた。

自分では持ち得ないから、その尊さに涙した。

いけないのか。

自分の気持ちではないから、それは偽物なのか。
偽物だから、届いてはいけないのか。

違う。それはきっと、違うと思う

偽物でもいい。

叶えられない理想でも叶えるだけ。

もとより届かないユメ、もはや辿り着けぬ理想郷。

なら、衛宮士郎が偽物だとしても。

そこにある物だけは、紛れも無い本物だろう。

「
そうだ。そんなこと、とつくに」

全てを救う事はできないと。

誰かが犠牲にならなければ救いはないと、解かっている。

大人になったから、それが現実なのだと理解している。

その上で、そんなものが理想にすぎないと知った上で、なお理想を
求め続けた。

傷ついて終わり、ではなく。

多くを救う為に傷つけて、それが最善であつても。

それでも 誰も傷つかない幸福を求め続ける。

正義などこの世にはない、と。

現実とは無価値に人が死に続けるものだ。

そんな悟ったような諦《言葉》めが、正しいとは思えない……！

その果てに、ヤツは剣の丘に辿り着いた。

おまえが信じるもの。

おまえが信じたもの。

その正体が偽善だと男は言った。

それでも、そう言った男こそが、最後までその偽善を貫き通したのだ。

……なら、やっていける。

借り物のまま、偽物のままでも構わない。

だいたい、そんな事を気にするほど複雑な感情はもっちゃいない。そう、剣の丘で独り思った。

自分に見える世界だけでも救えるのなら、その為に戦おうと。

こんな事、考えるまでもなかったんだ。

狭搾な自分の世界。

もとより自分が生み出せるのは、この小さな”世界”だけなんだから

そう。

この体は、硬い剣で出来ている。

……ああ、だから多少の事には耐えていける。

衛宮士郎は、最後までこのユメを張り続けられる。

……磨耗しきる長い年月。

たとえその先に。

求めたものが、何一つないとしても。

「なんだ、それだけの事じゃないか！」

「っ ！？」

体を起こす。

手足の感覚は戻り力を入れる。

勢いよく起き上がった体はまだ動く。

呼吸を整えながら距離を保つ。

やり方は判った。

遠坂のアゾット剣の魔力があるんなら、きつと出来る。

問題は詠唱時間だ。

一応暗記したとは言え、どれだけ早く自身に働きかけるかは、やってみないと判らない

「 ” A Z O T H ” ！！」

まず、アゾット剣を発動させ魔力を漲らせた。

体にとんでもない量の魔力が流れてくる、俺の普段の魔力の四、五倍の量だ。

改めて遠坂の魔力貯蔵に感謝した。

「ふん。存外しぶといな小僧」

ギルガメッシュの背後に無数の宝具が出現する。

あの一撃から生還を遂げたところで、投影魔術を武器にする衛宮士郎では、あのサーヴァントに敵うべくもない。

「ほう、無駄と判つたらしいな。 ならば潔く消えるがいい。
偽物を造るその頭蓋、一片たりとも残しはせん 消えるがいい
！」

宝具が展開される。

数にして三十弱。

防ぎきるには、もはや作り上げるしかない。

「・・・贗作、偽善者か。ああ、別にそういうのも悪くない。たしかに俺は偽者だからな」
フェイカー

片手を中空に差し出す。

片目を瞑り、内面に心を飛ばす。

「ぬ　？」

「・・・勘違いしてた。俺の剣製っていうのは、剣を作る事じゃないんだ。自分の心を形にする事だったんだ」

ゆらり、と。

前に伸ばした右腕を左手で握り締め、ギルガメッシュを凝視する。

「
one of my sword」
体は剣で出来ている《I am the b

その呪文を口にする。

詠唱とは自己を変革させる暗示にすぎない。

この言葉は、当然のように在った、衛宮士郎を繋げるモノ。
あ

「そうか、世迷言はそこまでだ」

放たれる無数の宝具。

造る。

片目を開けているのはこの為だ。

向かってくる宝具を防ぐ為だけに、丘から盾を引きずり上げる

！

そして七枚の花弁が現れ宝具の進行を食い止めた。

- パリン -

「ぐ　　」

乱打する剣の群。

盾は衛宮士郎自身だ。

七枚羽の盾が一枚ひび割れ、碎けるたびに体が欠けていく。

「　　血潮は鉄で　心は硝子《Steel is
my body, and fire is my blood》」

- パリン -

導く先は一点のみ。

堪を切つて溢れ出す力は、瞬時に衛宮士郎の限界を満たす。

「な　　に？」

驚愕は何に對してか。

たった一枚の盾すら突破できない自らの財宝か　　目の前に進
る魔力にか。

「　　幾たびの戦場を越えて不敗《I have
created over a thousand blades
s》ただ一度の敗走もなく《Unaware of loss.

《ただ一度の勝利もなし》Nor aware of gain《

- パリン -

壊れる。

溢れ出す魔力は、もはや抑えが利かない。

一の回路に満ちた十の魔力は、その逃げ場を求めて基盤を壊し

「 担い手はここに独り《With sto

d pain to create weapons》剣の丘で
剣を鍛つ《waiting for one's arrival
》
「

- パリン -

魔力は猛り狂う。

だが構わない。

もとよりこの身は『ある魔術』を成し得る為だけの回路。
ならば先がある筈だ。

この回路で造れないのなら、その先は必ずある。

・・・いや、今だつてそれはある。

ただ見えないだけ。

回路の限界など、初めからなかったのだ。

せき止めるものが壁ではなく闇ならば。

その闇の先に、この身体かいろの限度がある

「 ならば、我が生涯に意味は要らず《I have no regrets. This is the only

y path》
「

- パリン -

一の回路に満ちた十の魔力は、その逃げ場を求めて基盤を壊し
百の回路をもって、千の魔力を引き入れる。

「 この体は、無限の剣で出来ていた《My
whole life was “ unlimited blad
e works” 》
」

真名を口にする。

瞬間。

何もかもが砕け、あらゆるものが再生した。

炎が走る。

燃えさかる火は壁となって境界を作り、世界を一変させる。
後には荒野。

無数の剣が乱立した、剣の丘だけが広がっていた。

「
」

その光景は、ヤツにはどう見えたのか。

ギルガメッシュは鬼気迫る形相で、目の敵と対峙する。

「 そうだ、剣を作るんじゃない。俺は、無限に剣を内包した世界を
作る。それだけが衛宮士郎に許された魔術だった」

荒涼とした世界。

生き物のいない、剣だけが眠る墓場。

直視しただけで剣を複製するこの世界において、存在しない剣などない。

それが、衛宮士郎の世界だった。

固有結界。

術者の心象世界を具現化する最大の禁呪。

英霊エミヤの宝具であり、この身が持ったただ一つの武器。

ここには全てがあり、おそらくは何もない。

故に”無限の剣製”アンリミテッドブレイドワークス生涯を剣として生きたモノが手に入れた唯一の確かな答え

「固有結界。それが貴様の能力か・・・！」

一歩踏み出す。

左右には、ヤツの背後に浮かぶ剣が眠っている。

「驚くことはない。これは全て偽物だ。おまえの言う、取るに足らない存在だ」

両手を伸ばす。

地に刺さった剣は、担い手と認めるように容易く抜けた。

「だがな、偽物が本物に敵わない、なんて道理はない。お前が本物だというなら、悉くを凌駕して、その存在を叩き墮とそう」

前に出る。

目前には、千の財を持つサーヴァント。

「いくぞ英雄王

武器の貯蔵は十分か」

「は 思いあがったな、雑種

！！」

ときは”門”を開け、無数の宝具を展開する。

荒野を駆ける。

異なる二つの剣群は、ここに、最後の激突を開始した。

・ヒュン・

・キン・

「はっ ！」

繰り出される長刀に長刀を合わせる。

互いの剣は相殺し、大気に破片を撒き散らす。

「おのれ。調子に乗るな、小僧 ！！！」

背後から二振りの剣を携えて迫る英雄王。

それをまったく同じ剣で迎え撃つ。

・ガキン・

「っ ！」

後退するギルガメツシュ。

その間に踏み込み、すぐさま剣を引き抜き一閃する。

「うおおおおおおお

!!!!!!!!!!!!!!」

-キン-

-ガキン-

「ぐつ、何故だ……！何故打ち負ける、雑種の剣に……
！」

矢継ぎ早に現れる宝具に剣を合わせる。

-キン-

-キン-

-ガキン-

「でやあああああああ

!!!!!!!!!!!!!!」

ヤツの宝具を見た瞬間、手元と同じモノをたぐり寄せ、渾身の力で
打倒する
！

-キーン-

-ガキン-

-パキン-

「馬鹿な……！この我がこのような贗作に
！！」

「うおおおおおおおお
！！！！！！！！」

- キン -

- ガキン -

- キン -

- ギン -

剣戟が響き渡る。

ヤツは俺の一撃を捌ききれず、その宝具を相殺させる。

それが奴の敗因になる。

千を超える宝具を持ち、その全てを扱うギルガメッシュの器の大きさは、英霊の頂点に位置するものだ。

だがヤツはあくまで”持ち主”にすぎない。

たった一つの宝具しか持たぬ故、それを極限まで使いこなす”担い手”ではない。

あいてが他のサーヴァントなら、こんな世界を造ったところで、究極の一を持つ敵には対抗できない。

ギルガメッシュにはあるのだろうが、それだけの身体能力が俺にはない。

故に 俺が肉薄できる相手はこの男のみ。^{サーヴァント}

同じ能力、同じ”持ち主”であるのなら、既に剣を用意している俺

が一步先に行く………！

「おのれ おのれ、おのれおのれおのれおのれ」

- ガキン -

- ギン -

「おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ」

- ガン -

- キイン -

「おのれおのれおのれおのれおのれおのれ、おのれ
！！

- ガキン -

- ガアン -

ヤツの剣は俺の一撃を受けて。
パリン、とヒビが入り砕け散った。

「なっ ！？くう………」

ギルガメッシュの腕が動く。

その背後に現れた柄は、ただ一つこの世の存在しないあの魔剣
！

「させるか」

「ザシュ」

「がっ！？」

ヤツの腕をセイバーのカリバーンで切断した。

「な」

剣戟が止まる。

ヤツは愛剣を失い、完全に無防備となっている。

「は、あ！」

勝利を確信した手足は、なお鋭く英雄王へと踏み込み、その体を両断する！

「っ」

飛び退く体。

渾身の一撃を紙一重で躲し、ギルガメッシュは更に後退する。

「く　　今はお前が強い・・・！」

この場での敗北を認め、ギルガメッシュは離脱する。

「逃がすかってんだ、このヤロウ　　！！！」

後退するギルガメッシュに一気に肉薄する。

狙いはアヴェンジャーが付けた鎧の亀裂、そこだけが生身を晒している。

俺は残った魔力を全てカリバーンに注ぎ込み。

「待
」

待て、と言いたかったのだろう。

だが、俺は容赦なく剣を振り上げ。

「勝利すべき黄金の剣
カリバーン
!!!!!!!!!!!!!!」

鎧の亀裂目掛けて一閃させた。

光の線は軌跡通りに亀裂に命中し内側からギルガメッシュの体を破壊した。

「な、に
!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!」

ギルガメッシュは最後の断末魔を上げてこの世界から消滅した。

「っは
」

息を絞り出すと膝を折り倒れこんだと同時に剣の丘は消え去った。
俺は呼吸を整え倒れ伏しているセイバーに駆け寄る。

「大丈夫か、セイバー？」

体を起こし問いかける。

セイバーは額に玉のような汗が滲み、呼吸も弱々しいがなんとか意識はあるようだ。

「シロウ・・・強く・・・になりましたね・・・」

ぼんやりと俺を見てセイバーは言う。

その体は熱病のように熱かった、このままセイバーが消えるんじゃないかと心配していると。

「私は平気です・・・シロウ・・・貴方は行ってください・・・私もすぐに後を追います・・・だからそんな顔をしないでください・・・」

そんな俺の動揺を悟ったのかセイバーは自分の心配より俺を気遣っていた。

その気持ちを無駄には出来ない。

「・・・判った。けど、絶対に無理はするなよ。待ってるからな！」

「・・・はい・・・私も責務を果たすまで消えるつもりはありません・・・ご武運を・・・」

体の傷はセイバーの鞘のお陰で大分良くなった、だが魔力は先の固有結界で殆ど空だ。

けど泣き言は言ってられない、覚悟を決め最後の敵、言峰綺礼を倒す為に大聖杯の祭壇へと向かう。

これが最後の別れになるかもしれない・・・俺はセイバーに振り返ると、

「・・・セイバー、全てが終わったら伝えたい事があるんだ。だから必ず来てくれ」

「・・・ええ・・・必ず・・・私も貴方に一つだけ伝えたい事がありますから・・・」

彼女は真っ直ぐな瞳で俺を見ている。

それで絶対に負けられない理由が出来た。

そして俺は聖杯戦争の最後のマスターとして歩を進めたのだった。

フェイト／ステイナイト（前書き）

季節外れの風邪を引いてしまい3日程寝込んでいて更新が遅れてしまった事をお詫び致します。

もしかしたら今後も更新が遅れる事があるかもしれないのでお気を付けください。

フェイト／ステイナイト

大空洞の奥。

駆けてきた足を止めその光景に息を呑んだ。

目前に広がるのは赤い燐光。
黒く濁ったタールの海。

そして

中央に穿たれた『孔』と、捧げられた少女の姿。
そしてそんな俺を愉しそうに見ている神父。

「言、峰……！」

「よく来たな衛宮士郎。最後まで残った、ただ一人のマスターよ」

皮肉げに口元を歪め、ヤツは両手を広げて出迎える。
背後の孔からはボトボトと黒い泥が零れ落ちている。

「……イリヤは降ろせ。お前をぶちのめすのはその後だ」

目前の言峰を睨む。

……ヤツまでの距離は十メートルほど。
これ以上先に踏み込めば戦いが始まる。

「おい、聞こえないのか。イリヤを降ろせって言うてんだ。いい歳して、子供をいじめて何が楽しいんだよ」

「気持ちには分かるが、それは出来ない相談だな。この世、全ての悪^{アンリマユ}は現れたが、それは未だ不安定だ。接点である彼女には命の続く限り耐えてもらわねば。それが私の願いなのでな」

命の続く限り じゃあ、イリヤはまだ生きている……！

「……そうか、おまえに降ろす気がないっていうんなら、力ずくで降ろすだけだ。そしてこの世、全ての悪も今^{アンリマユ}すぐに止めやる！！」

無論はったりだ、今の俺の魔力じゃあの膨大な魔力の塊である大聖杯に傷一つ着けられないだろう。

アレを破壊するにはセイバーのエクスカリバーに匹敵する宝具がなければ……

「ほう、親子二代で私の前に立ちはだかるか、やはり血は繋がってなくとも親子だな。衛宮切嗣の意志は脈々と受け継がれているようだ、しかし同時に嬉しくもある」

言峰はどこかウツトリと何かを懐かしむように目を細めた。

「切嗣の息子を倒し十年前のあの火災をもう一度再現できると思うと心が躍る」

「な……まさ、か……」

「そうだ、衛宮士郎。アレは私が前回の聖杯に願って起こした火災だ、あの地獄は……今でもはつきりと思い出せる。この上なく美しい光景だった。そうは思わないか？」

「て
」

ふざけるな。

あの時間が。

あの地獄が、そんな一言で。

「・・・そう、十年前の火災は悪くなかった。小規模であつたが、通常ではありえない刺激に満ちていた。それはおまえ自身も体験した事ではないかな衛宮士郎。どうだ、無念のまま朽ちる人間の叫びは、胸に迫るものがあつただろう？」

そうして、神父は満足そうに笑った。

あの出来事を。

為す術もなく死んでいった人たちの姿を、心の底から素晴らしいと言つかのように！

「ああ、そういうコトか」

つま先に意識を集中する。

地を蹴ろつとする足に力を込める。

「つまり、殺していいんだな、テメエ・・・！」

全力で地面を蹴った。

ヤツまでは十メートル弱、このまま一直線に間合いを詰めて、そのまま

「！」

咄嗟に真横に跳んだ。

それはアイツを殺してやる、という理性より。

死にたくないという本能が勝った結果だった。

「っ
！」

横っ滑りに転がり、すぐさま顔を上げる。

「っ、今、の
！」

さっきまで自分が走っていたルートを見据える。

地面を焼く音。

じゅっじゅっと湯気を立てているのは、孔から伸びてきた黒い泥だった。

「言い忘れていたが、既におまえは私の射程に入っている。加えて
コレは生き物に敏感でな。動き回るのは勝手だが、不用意
に動くと死ぬぞ」

「
っ！」

容赦なく伸びてくる黒い泥を跳んで躲す。

不用意に動くもクソもない、あの野郎、殺る気満々なんじゃないか・
・・！

「く
この似非神父・・・！」

泥に気を配りつつ姿勢を立て直す。

・・・触手がうねる、そしてその数はどんどん増えていく。
それはまるで黒い蛇のように鎌首をあげていた。

ヤツは、それを楽団を率いる指揮者の様に両手を上げ、

「命をかける。或いは、この身に届くかもしれん！」

一斉に、黒い蛇たちを解放した。

「あ　　はあ、はあ、あ　　！」

幾重にも重なって落ちてくる泥を跳び退いて躲す。

「く　　は、はあ、は、あ　　」

どうしようも、ない。
言峰に近づく事も出来なければ、あの黒い泥を黙らせる事も出来ない。

「はっ　　はっ、はっ、はっ、あ　　」

体の節々が悲鳴を上げる。

避けられずに泥を浴びた箇所は、感覚が失われていた。

「　　そこまでか。少しは愉しめると期待したが、所詮は切嗣の息子。つくづく益にならぬ男だ」

「な　　」

「・・・正直に言つとな、衛宮士郎。わたしはおまえに期待していたのだ。凜がおまえを教会に導いた夜、運命すら感じた。おまえが

\neg
、
 \neg

脳が破裂する。

全身に喰らいついた泥は剥がれず、容赦なく体温を奪っていく。

正視できない闇。

認められない醜さ。

逃げ出したい罪。

この世全てにある、人の罪業と呼べるもの。

だから死ぬ。

この闇に捕らわれた者は、苦痛と嫌悪によつて自分を食い潰す。

だ
が。

この感覚には覚えがあつた。

そう、これは桜の黒い影と同質、なら

[illegible]

黒い塊、濃厚な泥の中から、ただ必死に跳び退いた。

「つ
! ?
」

ヤツの戸惑いが聞こえる。

「馬鹿な。アレを振り払ったというのが、おまえが！？」

「！」

全身に喝を入れて、ただ走った。
言峰は再び背後の泥を放った。
今度は先程の何倍は在るかの大きさだ。

「っ、あ！」

さすがに避けきれず泥が全身に絡みついた。
指先から朽ち果てていく。

前へと進む足は宙を泳ぎ、伸ばした腕は黒い泥に吞まれ、とうに視えなくなっていた。

外側からまるごと消されていくのか。

体が縮んでいくような感覚に襲われながら。

それでも、衛宮士郎は死を受け入れようとはしなかった。

「はあ、ぐ！」

目を逸らさず、全力で拒み続ける。
体を覆う闇にも、体を溶かそうとする痛みにも、心を融かそうとする痛みにも。

「っ　　っ、　　」

それも叶わぬ試みだった。

人の身でこの汚濁に抗う術はない。
体はまだ動いている。

何かを掴もうと突き出された腕も上がったまま。
だが、既に心が壊れていた。

思考は闇に塗り潰され、じき、その肉体も闇に消えるだろう。

その、刹那。

” 貴方が、私の ”

その声が、なぜ思い出されたのか。

「 「

暗闇に光が灯る。

それが ” あの光 ” なのだと眼球が捉えた時。
全てが逆転した。

「 「

撃鉄が落ちる。

思考は円還状に速度を増し、火花を散らし軋みをあげて、そのカタチを悪魔めいた速度で作り上げている。

「 トレース
投影、開始 「

投影開始の呪文を口にする。
瞬間。

それは、あらゆる工程を省いて完成した。

・・・そう、一から作る必要などなかったのだ。
何故ならこれは衛宮士郎の半身故。

” 貴方が、私の鞘だったのですね

”

懸命に伸ばした指先が動く。
精神集中も呪文詠唱もすっ飛ばして作り上げたそのカタチを握りしめる。

世界は一転し、闇は黄金の光に駆逐され、そして 衛宮士郎の手に彼女の鞘が握られた瞬間、闇は全て払われた。

衛宮士郎を取り囲んでいた闇も、彼の体内を汚染していた闇も、その全てが霧散した。

「な に？」

だが驚くに値しない。

聖剣の鞘は持ち主を守る物。

故に”全て遠き理想郷”^{アヴァロン}彼女が追い求めた理想郷の具現が、こんな薄汚い泥に遅れを取る筈がない

！

駆ける。

闇から解放された分、そのスピードは流星すら思わせた。

「っ

！？」

己を過信していた者と、過信する余裕などなかった者。

その差はわずか一瞬、だが命運を分ける一刹那。

「言峰綺礼

！」

地面に倒れかけながら、両腕で地を弾いて、衛宮士郎は疾走した。
だが、自分の手元には武器がない、投影を使おうにも一から作る時間がない。

構うものか、まずあの顔に一発入れなければと思っていた

時。

「衛宮士郎！これを使え！！」

アーチャーの声が響くと同時に、上空から紅い槍が落ちてくるのが見えた。

「アレは・・・！」

勢いのままに跳んで槍を掴む。
そして神父の前で槍を翻し

矢のように突進させた体と、槍に籠めたありったけの魔力。
それを、疾風の如く、

「刺し穿つ死棘ゲイボルグの槍

！！」

因果の槍を言峰へと叩き込んだ。

「
」

言峰はただ不思議そうに、自身の心臓を貫いた紅い槍を見下ろしていたが。

「おまえの勝ちだ衛宮士郎。目的があるのなら急ぐがいい」

神父は以前のまま。

教会で出会った時と同じ、何事にも関心がないという声で告げた。

「
言峰」

「おまえが最後のマスターだ。聖杯を前にし、その責務^{のぞみ}を果たすがいい」

神父は変わらぬ声で言い捨てた。

「
ああ。散々ためつけてくれたお礼だ。容赦なく、あなたの願いを壊してくる」

「
、」

最後に男は笑ったのか。

言峰綺礼という神父の体が、力なく倒れていく。

「
」

・・・それを最後まで見届けた。

死の淵でさえ、他人事のように自らのカタチを語り。

今まで使役していたモノ、自らが望んだモノの中へ神父は沈んでいく。

それが言峰綺礼という男の最後であり。

長かった戦いの、本当の終わりだった。

フェイト／ステイナイト（後書き）

終盤を迎え、いよいよ次で完結しようかと思っています。

一章で判る通りこの物語はまだまだ続きます！！この小説を見た人は予想出来ると思いますが、次回作はサスケの能力を得て新たな守護者となったエミヤシロウが様々な世界に旅立つクロスオーバー作品になります。

詳しい事は完結した後で考えようと思いますが感想や希望があったらどんどん言ってください。《一応、原作欄にある作品に行かせようと考えています、賛成や反対があれば感想と同じく言ってください》

R?alta Nua 《ラストエピソード》（前書き）

遂に第一章の完結です。

長い間この小説を見ていただいた皆さんにお礼を申し上げます。

ここで一応の一区切りを付け、新たな物語を鋭意製作中です、しばらく更新が滞りますが、皆さんの期待に答えられる為にも獅子奮迅の気持ちで頑張っていきたいと思しますので応援を宜しく願います！！

R?alta Nua 《ラストエピソード》

明確な敵がいなくなり、ようやく、最後の大仕事と対面する。
目の前には頭上に穿いた孔と黒く汚染された大聖杯がある。

言峰が消えて、イリヤを縛っていた力が無くなったのか。
イリヤは孔から解放され、今は俺のすぐ傍で眠っている。
どうやら命に別状はないらしい、とりあえずは安心した。

・・・戦いは終わったのだ。

もう誰も傷つく事はないし、誰も失う事もない。

マスターはいなくなり、サーヴァントもその役目を終え、この世界から姿を消す。

既に判っていた事だ。

長い階段を、彼女と共に歩いてきた。

「」

大聖杯を見上げながら、何も無い空っぽの心で待ち続ける。

・・・そうして、彼女はやってきた。

出会った時と何も変わらない姿で、まっすぐに、俺の下へと歩いてくる

「」

手が触れる距離で、彼女は立ち止まった。

「・・・」

お互いに押し黙る。

これはもう決めていた事。

ならば、やるべき事も一つだけ。

「・・・聖杯を破壊します。それが、私の役割です」

そう告げて彼女は歩き出した。

大聖杯は危険を察知したのか大きく脈動している。

「

」

間合いになったのか。

彼女は静かに剣を構え、黒い孔と大聖杯へと視線を向ける。

・・・その背中を眺めていた。

血が滲むほど拳を握り締め、唇を噛んで、口からこぼれてしまいそうな気持ちを殺して、彼女の姿を焼き付ける。
そうして。

「マスター、命令を。貴方の命がなければ、アレは破壊出来ない」

背を向けたままで、彼女は、最後の令呪を使えと言った。

聖杯を破壊すればセイバーは消える。

いや 成敗を自らの手で破壊したセイバーは、もうサーヴァントになる事もない。

セイバーは、聖杯に固執したからこそサーヴァントとなった。

その彼女が自らの意思で聖杯を壊すという事は、契約を断つという事。

ここで聖杯を破壊してしまえば。

彼女は永遠に王のまま、その生涯を終えるのだ。

「シロウ。貴方の声で聞かせてほしい」

セイバーの声。

それを聞く度に叫び出しそうになる。

行くな、と。

ここに残ってくれと、剥き出しの心を叫びたくなる。

「」

だが。

それは死んでもしてはいけない事だ。

彼女の人生を、俺のわがままで台無しにする事は、出来ない。

「セイバー。その責務を果たしてくれ」

万感の思いを籠めて告げた。

セイバーはそれを聞くと聖剣を掲げ。

「最後に、一つだけ伝えないと」

強く、意思の籠もった声で彼女は言った。

「・・・ああ、どんな？」

精一杯の強がりで、いつも通りに聞き返えず。
セイバーの体が揺れる。

彼女はまっすぐな瞳で、後悔のない声で、

「シロウ 貴方を愛している」

「俺もだ セイバーを愛している」

最後に自分達の本当の気持ちを告げる。

そして最後の令呪を発動させようとした時。

「結論を急ぐな衛宮士郎。私と違ってお前は運命をまだ変えられるのだから」

つい先程聞いた声と共に、アーチャーが舞い降りていた。

アーチャーは衛宮士郎と言峰が死闘を繰り広げているのを少し離れた場所で見ている。

この戦いは衛宮士郎自身が決着を着けねばならない、いわば宿命だ。私自身が身を持って知っている。

何度かその攻防が続いていると、衛宮士郎が黒い泥の呑まれた。

だが、奴ならあの泥に負ける事はないだろう。

そう確信していた、そしてそれを証明するように泥の塊から衛宮士郎が踊り出てきた。

言峰は再び泥を放ち衛宮士郎を呑みこむ。

しかし次の瞬間、奴の手には光輝く黄金の鞘が握られていた。

「そうだ、それこそがお前と彼女の絆の証だ」

知らず呟いていた。

衛宮士郎が言峰へと疾走するが奴の手元には武器がない、投影も間に合わんだろう。

この事態を予測していた私は予め投影していたランサーの槍を、ゲイ・ボルグ

「衛宮士郎！これを使え！！」

奴の頭上へと投擲した。

私の声に気が付き槍を受け取るとそれを言峰へと突き刺した。

言峰を倒した後、衛宮士郎はセイバーと共に大聖杯と向き合っている。

磨耗した記憶の中でもその光景ははっきり覚えていた、それが彼女との別れだと知っている。

私は彼女と別れても正義の味方になるという理想を貫き、そしてその理想に裏切られ絶望した。

だが奴はその理想は間違いじゃないと言った、例え彼女と別れても奴は俺にはならないだろう。

「・・・だが奴にはお目付け役が必要だな」

凜と桜がいれば安心だが奴にはセイバーの存在が必要だ。

ならばセイバーを現界させ続ける方法はただ一つ……………

「結論を急ぐな衛宮士郎。私と違ってお前は運命をまだ変えられるのだからな」

私は衛宮士郎の前に降り立ち大聖杯の破壊を止めさせる。

「アーチャー……何故止めるんだ、その聖杯は破壊しなくちゃいけないんだ」

事情を知らない奴からすれば邪魔している様にしか見えないう。まあ当然の反応だ、だが今回ばかりは感謝して欲しいものだ。

「私は結論を急ぐな、と言ったんだ。少し落ち着くがいい」

「……で、何の用だ。ゲイ・ボルグ槍の礼なら一応言っておく……すまなかった」

私に礼を言うのがよっぽど悔しいのか慚然とした声で礼を言った。まったく最後まで腹立たしい奴だ。

「く、貴様が感謝するなど珍しい事もあるものだな」

「な、なんだよ人がせつかく礼を言ってるのに……で、一体何の用だよ」

「まあ、簡単に言えば大聖杯の破壊を止めてくれ」

この予想外の言葉に衛宮士郎とセイバーは目を見開いて驚いていた。そして怒りを露にして私を締め上げる。

「お前、それがどういう事か解かっているのか！！これを破壊しないって事はまた聖杯戦争が起きて罪の無い人が死んでいくんだぞ！！！！」

「そうです、貴方はそれを甘受するのですか！！それが貴方の望んだ理想だとしたら私は貴方を許しません！！！！」

英霊に肉体には大したダメージはないが、心には言葉の槍がグサ、と刺さる。

さすがに説明不足だったな。

「話は最後まで聞け、私は破壊ではなく封印をすべきだと言ったんだ。そうすればセイバーが消える必要もない、理解したか？」

この言葉にハツとする衛宮士郎。

セイバーも同じような表情をしている。

「聖杯が封印されればセイバーの契約は続き使い魔としてこの世に現界できる筈だ」

「し、しかし現界するには膨大な魔力が必要です、とてもシロウ一人では補えません」

「その事なら問題ない、凜と桜と小僧の三人から魔力を供給できれば十分足りるはずだ、それともこの世に未練はないのか・・・いや、この世ではなくこの男か」

フフ、と意味ありげな視線を衛宮士郎へ向ける。
それを見たセイバーは顔を真っ赤にしている。

「小僧はどうだ、セイバーがこの時代に留まるならこれ程嬉しい事はあるまい」

「そりゃセイバーがいてくれるなら、これ以上嬉しい事はないけど・
・」

視線をセイバーに向けると、

「・・・私はこの時代に留まりたい・・・私は最後までシロウと一緒に居たい」

その声は穏やかで、強い意志が感じられた。

「
セイバー」

まっすぐに向けられる視線を、逸らさずに受け止める。

その見詰め合いが数刻続いた頃。

「・・・そろそろいいか。見詰め合うのは結構だが、いつまでもそうしては話が進まんだろっ」

呆れた声で先を促した、その声に二人はビク、としながら視線を逸らした。

やれやれこれは先が思いやられるな。

「・・・のろけるのは後にして、話を戻すぞ。まず、私が大聖杯を封印し、残ったセイバーを小僧と凜と桜で現界させるだけの魔力を供給する。これで構わんな」

「あ・・・ああ、セイバーが納得してこの時代に留まるのなら俺は

構わない」

「私もシロウが此処に居て欲しいと望むのなら……」

・・・これは予想外な程の効果だな。

だが、彼女が見守ってくれるのなら、この先何が待っていようと、衛宮士郎が道を間違える事はないだろう

「では始めるか、二人とも下がっている」

両目を閉じ体内の魔力を高める。

アイツの記憶が確かなら必ず出来るはずだ。

「今更なんだが、どうやってあんな高純度の魔力の塊を封印するんだ」

あの巨大な大聖杯を封印するのだ、不安が募るのも当然だが。

「安心しろ、確かに以前ならば不可能だったが今の私にはアヴェンジャーの眼がある！」

そう、これはうちはサスケが俺に残してくれた形見だ。

アレを発現するのは初めてになるが、サスケの記憶を見て天照と麒麟を発動できた、ならば……

両目の万華鏡写輪眼を開き須佐能呼スサノオを発現させた。

体中の細胞が悲鳴を上げるがそれに耐る。

そして私の頭上に巨大な髑髏が浮かび上がり、胴体が俺の体を包み込んだ。

記憶では知っていたがまさかこれ程の苦痛だったとは。

「具現化しただけでこの痛みか、完全体はどれほどの痛みやら・・・」

「完全体？」

衛宮士郎の目にはそれが完成された能力に見えたのだろう。

確かにギルガメッシュの乖離剣^{エア}の攻撃を防ぐこの状態でも十二分の力があるが、その真の能力は別にある。

「そうだ、この須佐能呼^{スサノオ}はまだ完全ではない、あらゆる攻撃を防ぐ絶対防御はいわば須佐能呼^{スサノオ}の特性だ、その真の力は完全体でこそ発揮できるがそれ相応のリスクもあるのであまり多用できないのだ」

実際に須佐能呼^{スサノオ}で命を落とした者もいる。

「どの道あの大聖杯を封印するには完全体の力が必要だ、ならば私がやるのが妥当だろう」

魔力を高めて須佐能呼^{スサノオ}に膨大な魔力を送る、すると骸骨が肉付き鬼のような顔をした巨人に変化する。
そして巨大な鬼の体を鎧のような凱甲が覆う。

「これが須佐能乎の完全体だ、時間が無いのでな、すぐに終わらせる！！！！」

鬼の右手には瓢箪のような物が握られており其処から炎の様な剣が現れ。

それを大聖杯へと突き刺した。

・・・そして貫かれた大聖杯は溶けるように剣に吸収されてい

く。

「な…何なんだ、あの剣は…!？」

「アレは十拳剣。別名・酒刈太刀と呼ばれる封印剣で、突き刺した者を酔夢の幻術世界に永久に封印する…剣そのものが封印術を帯びた霊剣だ、故に貫いたなら例え神だろうと封印できる」

説明している内に大聖杯はその殆どを十拳剣に吸収されてしまった。しかし大聖杯は最後の抵抗のように言峰が開けた孔から黒い泥を衛宮士郎へ放った。

だが、泥は遥か手前で須佐能乎の左手の盾によって防がれる。この盾も八咫鏡と呼ばれる霊器の一種で須佐能乎以上の絶対防御を持っている。

最後の抵抗を終えた大聖杯は完全に吸収され大空洞を静寂が包み込む。

「上手くいったのか…セイバー、体に違和感はあるか？」

聖杯が無くなった事でセイバーに何か変化があるのかを確認する。セイバーは自分の状態を確かめ。

「…いえ、特に問題はありません」

どうやら問題はないらしい。

「よかった…セイバー…」

「シ、シロウ!!!」

涙を流しセイバーと抱き合う衛宮士郎。

後は安定して魔力を供給できれば消える心配はないだろう。

・・・むしろ問題は私の方か。

「やはり守護者の輪廻からは逆らえんか・・・」

案の定、体の輪郭がブレ始めた。

守護者の役目を終えた事で、次の世界に転移されるのだろう。

「アーチャー・・・」

「行つて・・・しまわれるのですか・・・」

「・・・気にするな、私はこの世界で答えを得た、それで満足だ」

この世界に未練はない、衛宮士郎はセイバーと凜がいれば決して道を間違えはしないだろう、桜も最後には救う事ができた。

唯一の心残りが凜に別れが言えない事だが、彼女には何時かまた巡り合える気がする、そんな気持ちを抱かせるのが遠坂凜と言う女性なのだ。

「あんたには色々世話になった、本当にありがとう」

「私も貴方のお陰でこの世界に留まれる事ができました、礼を言います」

二人が頭を下げる。

セイバーはともかく衛宮士郎が私に頭を下げるとは驚いた。

先程とは違い本当に感謝しているようだな、それだけセイバーが消えずに済んだ事が嬉しいのだろう。

「そろそろ時間のようだ。凜にはすまないと伝えておいてくれ」

体が色褪せるように消えようとした時、

「待ちなさい、この唐変木とつへんぼく！！！」

声を響かせ、怒りに満ちた表情の凜が走ってやって来た。

その後ろには意識を取り戻した桜の姿がある。

とゆうより無理をするとまた倒れるぞ凜、と心でツツコミを入れた。

「うっさい、人の気も知らないで勝手に消えるんじゃないわよ！！！」

考えが伝わったのか、突進しながらガンドを放つ。

流石に予想外の攻撃に驚くがそれを首を捻りながら躲した。

今のは顔面直撃コースだったぞ・・・

「ちよつと、避けるんじゃないわよ！」

「無茶を言っな、躲さなければ直撃だったのだぞ！」

不毛な言い争いをしていて不意に気が付く、凜の目に涙が溜まっているのを。

私は彼女に泣いて欲しくはないのだが。

「・・・悪かった、黙って消えようとして」

「まったくよ！アンタが約束を破ったんだから大人しく食らいなさい」

「やれやれ、手厳しいな」

しかたなく目を閉じ、甘んじてガンドを受けようとしたが、代わりにやって来たのは平手の感触だった。

バチン、と平手打ちをした後、凜は崩れるようにへたりこんだ。

「大丈夫かね？」

「ふん、安心したら気が抜けただけよ」

凜は変わらずに言い返す、このやり取りももう出来ないかもしれないかもしれないと思うと少し寂しくはあるな。

守護者となつて様々な世界に旅立つのだ、この世界にまた来れる可能性は限りなく低い。

それでも可能性はゼロではない、私自身この時代に来る事自体が限りなくゼロに近い確率だった、なら諦めなければまた凜と出会える時が来る筈だ。

「凜・・・私はまた此处に戻ってくる、だから別れの言葉は言わんよ」

「当然よ！戻って来れないなら何度だって召喚してやるからね！」

彼女とはもうマスターの繋がりは無い、だが私達の絆が消えた訳ではない、きっと凜が戻って来いと言えば問題なく俺を召喚できるだろう。

「・・・ああ、もし道に迷ったら君が私を導いてくれ」

時間が来たのか、体は輪郭を失い透明になっていく。
意識は最後まであったがもう言葉を紡ぐ事はできなくなっていた。
そして消えようとした最後の瞬間。

「馬鹿、絶対に自分の力で帰って来なさいよ、待ってるから
……………」

大粒の涙を零しながら泣く凜を私は笑顔で、

『ありがとう。大丈夫だ凜。必ず戻ってくるよ』

既に出せない声で言う。

伝わったかは判らないがそれに答えるように凜は笑顔で私を見ていた。

（最後まで君らしいな、ならばそれに答えてみせるとしよう）

そしてこの世界から一人の英霊が姿を消した。

……こうして鍊鉄の英雄の新たな物語は始まりを告げたのであった……

外伝
} 終 }

F a t e / C r o s s O v e r G u a r d i a n

第一章『サスケ』

R?alta Nua 《ラストエピソード》（後書き）

祝、一章完結！！

皆さんにお付き合い頂いたこの小説も一章が終わり、二章へと続きます。

こんな不出来な小説を見てくれて本当に感謝致します、次回作の内容は未定ですがクロスオーバーさせる作品は決まりましたので只今鋭意製作中です。

完成は一週間〜1ヶ月の間に出れると思われ、どうかそれまで楽しみにして待っていてください！！

《今回の設定である須佐能乎の能力についてですが、サスケがイタチの眼を移植した事でイタチの須佐能乎も使えると言う設定にしました。つまり完全体の須佐能乎にはイタチの能力とサスケの能力の両方が使えます、ご都合主義にしまい申し訳ございません。今後もご都合で新たな能力を加えるかも知れないので、それでも構わない方はこれからもご愛読をお願いします》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8777m/>

Fate/CrossOverGuardian 第一章『サスケ外伝編』

2011年4月23日02時04分発行